神戸薬科大学

目次(専任教員の教育・研究業績)

	頁		頁		頁
宮田 興子	 1	福井 英二	 97	前田 秀子	 189
中山 尋量	 4	山本 克己	 99	竹下 治範	 192
北川 裕之	 7	國東 ゆかり	 102	武田 紀彦	 196
小林 典裕	 12	山野 由美子	 104	鎌尾 まや	 200
江本 憲昭	 15	竹内 敦子	 108	泉 安彦	 204
内田 吉昭	 18	赤井 朋子	 111	細川 美香	 207
沼田 千賀子	 20	竹仲 由希子	 115	増田 有紀	 210
向 高弘	 26	佐々木 直人	 118	堀部 紗世	 212
加藤 郁夫	 30	八巻 耕也	 121	森田 いずみ	 215
小西 守周	 33	児玉 典子	 124	富田 淑美	 218
力武 良行	 36	灘中 里美	 127	阿部 興	 221
長谷川 潤	 39	安岡 由美	 131	河野 裕允	 223
坂根 稔康	 42	中山 喜明	 134	山田 泰之	 226
奥田 健介	 45	中島 園美	 137	山﨑 俊栄	 229
士反 伸和	 49	古林 呂之	 141	高木 晃	 231
小山 豊	 53	佐野 紘平	 144	池田 義人	 234
國正 淳一	 56	小門 穂	 147	安井 基博	 236
玉巻 欣子	 58	原 哲也	 150	北條 寛典	 238
上田 昌史	 62	河内 正二	 153	田中 晶子	 240
大河原 賢一	 66	大山 浩之	 156	中山 啓	 243
波多野 学	 69	多河 典子	 159	宗兼 将之	 245
田中 将史	 72	上田 久美子	 161	高嶋 一平	 248
白木 孝	 75	三上 雅久	 164	木口 裕貴	 250
岩川 精吾	 78	西村 克己	 168	田中 亨	 252
畑 公也	 81	猪野 彩	 170	安宅 弘司	 254
濵口 常男	 83	西山 由美	 172	清水 涼平	 256
松家 次朗	 87	都出 千里	 175	寶田 徹	 258
奥川 斉	 90	沖津 貴志	 178		
河本 由紀子	 92	藤波 綾	 182		
髙尾 宜久	 94	土生 康司	 185		

所属 薬学部	職名 学長・教授	氏名 宮田 興子			
I 教育活動	•	1			
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法のエ	E夫(授業評価等を含む)	2006年~	医薬当に対して、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のでは、大学のいいは、はいいは、大学のいいは、はいいは、はいいいは、はいいは、はいいは、はいいは、はいいは、はいい	、成化学、医薬品開発を担当 有機化学系 II実習を担当。 市の講義は、板書すること は、土曜日を使用して、積 懸と共に学術論文の読み方 成の指導。さらに、臨床の	のの講義である有機化学、医薬品化学、 6。更に、医薬品合成、医薬品化学の分野 。いずれの場合もオフィスアワーを設けて さを心がけている。さらに、有機化学が苦 積極的に補講を行っている。卒業研究の学 5、問題解決能力の養成を心がけて指導。 の現場で役に立つ有機化学を教示するため ・ションも常に考えながら教えている。
2 作成した教科書、教 (1) パートナー医薬品化学 (2) 化学構造と薬理作用((3) スタンダード薬学シリ 化学系薬学I化学物質((4) 臨床への有機と薬理か ー事例を基に新時代の (5) 臨床医薬品化学	: (改訂第3版) (第2版) ーズ の性質と反応	2017年2月 2015年4月1日 2015年2月20日 2018年9月13日 2021年4月	6年制薬化学系薬 薬学部の	学教育に必須である医薬品学で学ぶ基本的な有機化合特徴である基礎薬学を臨床	の性質と生物活性との関連を記載した教科品を化学で理解するために作成された教科かの性質と反応を記載した教科書 表現場に活かす方法を示した教科書 によって、臨床現場で役に立つ化学を紹
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等		第1回薬 第25回日 日本薬学 がつ本薬学		E理学-有機化学の橋渡し教育を目指して フム「基礎と臨床の橋渡し教育を考える」 アポジウムS15「今何を考えるべきか―基础 ISO2 FIPフォーラム2018「Approach to Chemistry」
4 その他教育活動上特	記すべき事項			二十数名の先生方と臨床医薬 までをつなぐ新しい教育シ	英品化学研究会を立ち上げ、現在, 臨床か ノステムの考案中である。
Ⅱ 研究活動		1			

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takeda Norihiko, Arisawa Narumi, Miyamoto Misaki, Kobori Yukiko, Shinada Tetsuro, Miyata Okiko, Ueda, Masafumi	論文	Organic Chemistry Frontiers 2019, 6, 3721-3724. Reagent-controlled regiodivergence in the [3,3]-sigmatropic rearrangement of N-(acyloxy)enamides
Yuta Ito, Masafumi Ueda, Norihiko Takeda and Okiko Miyata	論文	Chem. Eur. J. 2016, 22, 2616-2619. "tert-Butyl Iodide-Mediated Reductive Fischer Indolization of Conjugated Hydrazones"
Shoichi Sugita, Norihiko Takeda, Norimitsu Tohnai, Mikiji Miyata, Okiko Miyata and Masafumi Ueda	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 2469-2472. "Gold-Catalyzed [3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-Alkoxyazomethine Ylides"
Norihiko Takeda, Mizuki Furuishi, Yuri Nishijima, Erika Futaki, Masafumi Ueda, Tetsuro Shinada and Okiko Miyata	論文	Org. Biomol. Chem. 2018, 16(46), 8940-894. "Chiral isoxazolidine-mediated stereoselective umpolung α -phenylation of methyl ketones"
Takeda, Norihiko; Futaki, Erika; Kobori, Yukiko; Ueda, Masafumi; Miyata, Okiko	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-163462. "Nucleophilic Arylation of N,O-Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to α -Aryl Amides through an Umpolung Process"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
共役ヒドラゾンの求核性を利用したインドール類およびピラ ゾール類の合成	2017. 10. 26	第47回複素環化学討論会
極性転換反応を利用したメチルケトン類の立体選択的 α - フェニル化反応の開発	2018. 3. 27	日本薬学会第138年会
極性転換反応を利用した γ ー置換アミド類合成法の開発	2019. 3. 23	日本薬学会第139年会

アミドの極性転換反応: α位およびγ位への求核剤導入法の 開発		2019. 6. 1	第17回次世代を担う有機化学シンポジウム		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動				
2019年6月~	日本私立大学協会 理事				
2019年4月~	全国薬科大学長・薬学	邓長会議 常任理事			
2019年4月~	神戸薬科大学学長	申戸薬科大学学長			
2020年6月~	日本私立薬科大学協会理事				
2021年6月~	薬学教育評価機構理事				
2015年~	神戸薬科大学理事				
2010年4月~2013年3月	日本薬学会化学系薬学部会役員				
2009年4月~	薬剤師国家試験出題基準改定部会委員				
2010年4月~	有機合成化学協会評議委員				
2011年4月~2012年3月	近畿化学協会事業企画委員				
2012年1月~2013年12月	有機合成化学協会関西	支部副支部長			
2014年1月~2015年3月	長井記念薬学研究奨励支援準備委員会委員				

所属 機能性分子化学研究室 職名 副学長・教授	氏名 中山 尋量			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) (1)薬学部学生への教育	2006年4月~現在	総合薬学	大学の6年制への学生には、 講座の講義、基礎化学実習の 年次生からは卒業研究の指導	
	2006年4月~2012年3月	物理化学	≒Ⅰ(旧カリ)	
(2) 薬学研究科院生への教育	2009年~現在	神戸薬科	大学薬学研究科院生に薬学演	習、課題研究の指導を行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書				
薬学生のための基礎化学	2015年2月28日	編集	訓書店	
薬学生のための基礎物理	2016年3月30日	編集	川書店	
物理系薬学 I. 物質の物理的性質(第2版)	2015年3月20日	編集 東	京化学同人	
物理系薬学 II. 化学物質の分析	2016年4月1日	編集 東	京化学同人	
物理系薬学 III. 機器分析・構造決定	2016年11月4日	編集 東	京化学同人	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
学生部長	2008年4月~2010年3月			
学生就職部長	2010年4月~2012年3月			
教務部長	2013年4月~2019年3月			
学生支援センター長	2018年4月~現在			
Ⅱ 研究活動		_		
1. 著書・論文等				

氏名	種別	内容
Maeda H., Iga Y., Nakayama H.	論文	J. Inclusion Phenom., 2016, $86(3-4)$, $337-342$. "Characterization of Inclusion Complexes of Betahistine with β -Cyclodextrin and Evaluation of their Antihumidity Properties"
Hayashi A., Hara N., Sugimura K., Masuda H., Oku E., Fujikake S., Noda S., Nakayama H.	論文	Clay Sci., 2016, 20(3-4) 43-48. "Intercalation Behavior of Carboxylic Acids and their Sodium Salts with Layered Double Hydroxide in Methanol"
Maeda H., Katsushiro M., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull, 2017, 32, 21-25. "Introduction of Phosphate Group into β-Arubutin by cyclo-Triphosphate"
Hayashi A., Fukui H., Nakayama H., Tsuhako M.,	論文	Applied Clay Sci., 2020, 187, 105480, Adsorption of Gaseous Aromati Compounds in Linear Quaternary Ammonium-modified γ- Zirconium Phosphate"
Tanaka M., Fujita Y., Onishi N., Ogawara K., Nakayama H., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids, 2020, 232, 104954. "Preparation and Characterization of Lipid Emulsions Containing Styrene maleic Acid Copolymer for the Development of pH-responsive Drug Carriers,"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
"Phosphorylation of Arbutin with cyclo-Triphosphate in Aqueous Solution"	2016年9月	9th International Symposium on Inorganic Phosphate Materials
「シクロデキストリンによるエトドラクの苞接能評価」	2017年3月	第137回日本薬学会年会
「アセトニトリルを用いた炭酸型層状複水酸化物によるカル ボン酸化合物のインターカレーション」	2018年3月	第98回日本化学会年会

「塩化物型層状複水酸化物によるカルボン酸ガス吸着特性」		2019年3月	第99回日本化学会年会			
「シクロデキストリンによるトリアムテレンの溶解性の改善」		2020年3月	第140回日本薬学会年会			
3. 講演等						
演題名		発表年・月	場所等			
「層状水酸化物の医薬、環境は	材料への展開」	2016年9月	第2回「次世代バイオマテリアル」を考える会(明治大学)			
「層状化合物を利用した環境汚染物質の除去 -層状リン酸ジ ルコニウムを中心に-		2016年12月	第2回桜花城北セミナー			
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動					
2016年9月~2020年8月	日本無機リン化学学会	日本無機リン化学学会副会長				
2020年9月~現在	日本無機リン化学学会会	会長				
2005年4月~現在	日本薬学会近畿支部委員					
2011年4月~2018年3月	近畿化学協会代議員					
2012年9月~2015年3月	薬学教育モデル・コア	カリキュラム改訂に関する調査	研究チーム委員			
2016年8月~現在	医道審議会薬剤師分科会	会薬剤師国家試験出題基準改定部会委員				
2008年7月~現在	薬学共用試験センター(
2018年7月~2020年6月 薬学共用試験センター原		財務委員会委員				
2018年4月~現在	大学コンソーシアムひ。	ょうご神戸FD・SD委員会 副委員長				
2017年4月~2018年3月	大学基準協会評価委員会	会委員				

所属 生化学研究室	職名 副学長・教授	氏名 北川 裕之			
I 教育活動					
教育等	実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の	工夫(授業評価等を含む)				
(1) 本学薬学部学生への	の教育	1997年4月-現在に至る	学部学生	Eに生化学と分子生物学の講義を ⁹	行っている。
			ながら、	講義に関連する内容における最完 医薬品の開発例や病因の解明な	で、下記の編集担当した教科書を用い 近の発見や注目されている事項(新し ど)について資料を作成し、適宜配付
			2) でき る。	るかぎり疾患、診断薬、治療薬	に関連する事項を重点的に解説してい
			家試験のして実施)問題を10問程度選び、講義終了	識させるために、過去に出題された国 10分前より配付し、数回確認テストと 着させるために、この問題の一部を定
				を中にレポート課題を与え、講義: 講義時に返却している(3回程/	終了後に提出させ、添削を行ったもの 度)。
			が、生化	公学、分子生物学ともに平均以上の 対案評価では、いずれもベスト	04年度より2年に一度行われている の評価を得ている。特に、最近行われ ティーチャー賞を受賞した(下記の4
			学部学生	Eに生物学系の実習指導を行って「	いる。
					せるために、最新の遺伝子工学に関す 変更を行い、実習テキストも改訂して
				骨時間の最後に学生個々と教員が 行った実習を理解できるようにし	実習内容について質疑応答を行い、そ ている。

		3) 学生による実習評価も本学では2年に一度行われているが、平均以上の評価を得ておりおおむね好評である。
		学部学生に卒業研究の指導を行っている。
		1) 学生個々に実験に対する目的意識を持たせるよう、随時質疑応答を行っている。
		2)論理的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまとめさせ、発表する機会を与えている。
		3) できるかぎり英文で書かれた論文を読むように奨励し、少なくとも年に一度はその内容をまとめて発表する機会を与えている。
(2) 本学薬学研究科大学院生の教育研究指導	1994年4月-現在に至る	大学院薬学研究科院生への生化学(生命科学)特論講義と演習及び研究指導を 行っている。 1)講義は、最新のデーターを分かりやすく解説するために、動画を用いたパ
		ワーポイントを使用している。 2) 演習時には、研究分野の最近の動向を学生に把握させるため、学生が主体的に国際的な雑誌に発表された論文を論理的に説明でき、活発に討論に参加できるように演習日の少なくとも2日前までにはレジュメを全員に配付することを義務づけている。
		3) 学生に論理的な思考力と表現力が身に付くように、定期的に自分の研究内容を発表させ、研究室での討論を行い、そのことを通じて現在の自分の研究内容の進展状況や問題点も把握出来るように指導している。
		4) 学生には、少なくとも毎年一回は学会発表できるように指導している。
(3) 医学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	神戸大学医学部2年生に生化学(糖質の構造と機能)の講義を行っている。
(4) 医学研究科大学院生への教育	2007年4月-現在に至る	神戸大学大学院医学研究科院生に薬物治療学の講義を行っている。
(5)他の研究科の大学院生への教育	2006年11月	北海道大学大学院先端生命科学院の院生に糖鎖生物学の講義を行った。
	2007年6月	北陸大学大学院薬学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。
	2008年5月	京都大学大学院生命科学研究科院生に糖鎖生物学の講義を行った。
	2010年2月	九州大学大学院システム生命科学府院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を 行った。

	2016年6月	名古屋大 た。	マ学大学院工学研究科院生に糖鎖生物学の集中講義(10時間)を行っ
2 作成した教科書、教材、参考書			
NEW生化学第2版(廣川書店、編集:堅田利明、 菅原一幸、富田基郎)	2006年3月31日	「IV. 4 ;	組換えDNA技術と薬学への応用」を記述した(pp. 481-517)。
スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学 I.生命現象の基礎(東京化学同人、日本薬学会編)	2015年3月30日	「第5章	重 糖質」を記述した(pp. 28-34)。
ニューダイレクション薬学生化学(京都廣川書店、編著:北 川裕之、山田修平)	2020年9月4日	本教科書	李全体の編集に携わった。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
特になし			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
ベストティーチャー賞(2年ごとに表彰、ただし2014年度は 表彰なし、また2018年度以降は既受賞者の表彰なし)			II (2006年度)、分子生物学I (2008年度)、分子生物学I (2010年度)、 7学I (2012年度)、分子生物学Iおよび生化学III (2016年度)
入試部長	2007年4月1日-2008年3月31日	高大連携	考プログラムの構築に携わった。
大学院主幹	2008年4月1日-2010年3月31日	大学院薬	医学研究科薬科学専攻設置申請に携わった。
教務部長	2010年4月1日-2012年3月31日	薬学6年	E制におけるカリキュラムの改正に携わった。
入試部長	2012年4月1日-2014年3月31日	高大連携	考プログラムの拡充、ネット出願の設置、入試制度の改革に携わった。
学生就職部長	2014年4月1日-2018年3月31日	本学奨学 た。	生制度の拡充、4年時生の「キャリアデザイン講座」の発足に携わっ
キャリア支援部長	2018年4月1日-2019年3月31日	キャリア	で支援プログラムの改革に携わった。
Ⅱ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容

Nadanaka, S., Kinouchi, H., and Kitagawa, H.	論文	J. Biol. Chem. 2018, 293, 444-465. "Chondroitin sulfatemediated N-cadherin/ β -catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion."
Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, YC., Tsai, CF., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, SC., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. 2019, 15, 699-709. "Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR σ -cortactin axis."
Shida, M., Mikami, T., Tamura, J., and Kitagawa, H.	論文	Biochim. Biophys. Acts. 2019, 1863, 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin α V β 3."
Nadanaka, S., Hashiguchi, T., and Kitagawa, H.	論文	FASEB J. 2020, 34, 8385-8401. "Aberrant glycosaminoglycan biosynthesis by tumor suppressor EXTL2 deficiency promotes liver inflammation and tumorigenesis through Toll-like 4 receptor signaling."
Nadanaka, S., Miyata, S., Yaqiang, B., Tamura, J. and Kitagawa, H.	論文	Biomolecules 2020, 10, 1499. "Reconsideration of the Semaphorin-3A Binding Motif Found in Chondroitin Sulfate Using Galnac4s-6st-Knockout Mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Deciphering roles of phosphorylation and sulfation in regulating trafficking and functions of proteoglycans.	2016年10月	EMBO workshop on "Glycosylation in the Golgi complex"
Chondroitin 6-sulfation regulates perineuronal net formation and neural plasticity.	2016年12月	46th Annual Meeting of the Society of Neuroscience
Glycosaminoglycans in neural development.	2017年5月	CEREBRAL CORTEX PLASTICITY: IN AND AROUND FAST-SPIKING INHIBITORY INTERNEURONS
コンドロイチン硫酸鎖による新たな細胞増殖の制御機構	2018年11月	第16回糖鎖科学コンソーシアムシンポジウム
Deciphering the structural and functional diversity of chondroitin sulfate chains in the brain.	2018年12月	Controlling neuronal plasticity; developmental disorders and repair
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2006年4月~現在に至る 日本生化学会近畿支部	幹事	

2006年4月~現在に至る	プロテオグリカンフォーラム 世話人
2007年4月~2013年12月	FCCA:Forum Carbohydrate Coming of Age 幹事
2007年4月~2013年12月	Trends in Glycoscience and Glycotechnology 編集委員
2007年8月~現在に至る	日本糖質学会 評議員
2008年1月~2011年12月	Journal of Biochemistry, Advisory Board
2008年7月~2013年3月	神戸大学グローバル COEプログラム「次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点」事業推進担当者
2009年1月~2017年12月	Glycoconjugate Journal 編集委員
2009年4月~現在に至る	神戸がん研究会 世話人
2009年4月~現在に至る	日本結合組織学会 評議員
2009年10月~2011年9月	日本生化学会 代議員
2010年9月~2010年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員
2012年4月~2017年3月	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「疾患糖鎖生物学に基づく革新的治療薬の開発」研究代表者
2012年6月~2013年11月	科学研究費委員会専門委員
2012年11月~現在に至る	日本糖鎖コンソーシアム(JCGG) 幹事
2013年9月~2013年11月	日本薬学会学会賞第1次選考委員
2014年1月~2019年12月	日本生化学会 「生化学」誌企画委員
2015年4月~現在に至る	Scientific Reports 編集委員
2015年11月~2019年10月	日本生化学会 代議員
2015年11月~現在に至る	日本生化学会 評議員
2016年1月~2017年12月	Journal of Biochemistry, Associate Editor
2015年6月~2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会長
2016年8月~2017年7月	特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員、及び卓越研究員候補者選考委員会書面審査員
2018年1月~現在に至る	Journal of Biochemistry, Editor
2018年4月~現在に至る	「ひょうご産学連携コーディネーター協議会」運営委員および「TLOひょうご協議会」運営委員
2019年4月~2021年3月	日本薬学会 理事

所属 生命分析化学研究室	職名 教授	氏名 小林 典裕			
I 教育活動	<u> </u>	L			
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法のコ	上夫(授業評価等を含む)	2002. 4. 1~2020. 12. 31	学II』 分をリ美工ので用大 分をリ美工ので用大	「ントを配付して併用した.隔年 春を図っている.前年度は,学生 本常点(出席と授業終了前の小ラ を授業スタイルなので,早くから 鮮明に書くように心がけている), 『臨床検査学II』(1単位(50%を分
2 作成した教科書、教	放材、参考書	2008. 1. 1~2020. 12. 31	『免疫薬・担 の NEW 分 目 カリン 2. 線 1 に カリン 3. に カリン 3. に カリン 4. に カ	学機器分析』(廣川書店,分担 引),『ベーシック薬学教科書シ パートナー分析化学II』(南江 理系薬学 IV. 演習編』(東京们 じほう,分担),『免疫測定法- こついては,研究活動の欄を参照	堂,分担),『スタンダード薬学シリー 比学同人,分担),『薬学分析科学の最
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等		特になし		
4 その他教育活動上特	詳記すべき事項			-2014.3 学生就職部長 -2020.12 薬用植物園長	

II 研究活動						
1. 著書・論文等						
氏名	種別	内容				
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolution Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine with More Than 40-Fold Enhanced Affinity"				
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, E. Katayama, M. Fujita, M. Narasaki, A. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 47(7), 1062-1070. "Antibodies and Engineered Antibody Fragments against M13 Filamentous Phage to Facilitate Phage-Display-Based Molecular Breeding."				
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi		Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. "Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"				
Y. Kiguchi, H. Oyama, I. Morita, M. Morikawa, A. Nakano, W. Fujihara, Y. Inoue, M. Sasaki, Y. Saijo, Y. Kanemoto, K. Murayama, Y. Baba, A. Takeuchi, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"				
H. Oyama, Y. Kiguchi, I. Morita, C. Yamamoto, Y. Higashi, M. Taguchi, T. Tagawa, Y. Enami, Y. Takamine, H. Hasegawa, A. Takeuchi, N. Kobayashi	論文	Sci. Rep., 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"				
2. 学会発表						
演題名	発表年・月	学会名				
VH-FR1へのアミノ酸挿入による抗コルチゾールscFvの試験管 内親和性成熟	2020. 1	第70回日本薬学会関西支部大会				
In vitro affinity maturation of anti-cortisol antibodies to develop sensitive immunoassays	2019. 5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine				

Generation of monoclonal antibodies for on-site analysis of psilocin and psilocybin in hallucinogenic mushrooms		2019. 5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
新世代の高性能イムノアッセイを目指す「抗体育種」		2018. 8	日本分析化学会第67年会
アッセイ感度の向上を目指す「抗体育種」:抗コチニン抗体を例として		2017. 7	日本法中毒学会第36年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
2006年4月~2020年12月	日本分析化学会 近畿	支部常任幹事	
2008年12月~2020年12月	日本臨床化学会 近畿	支部評議員	
2007年4月~2014年6月	生物化学測定研究会 副会長		
2014年6月~2017年12月	生物化学測定研究会		

江本

所属 臨床薬学研究室 職名 教授	氏名 江本 憲昭			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2008年4月1日	「生理学	」6年制課程3年次	
	2009年4月1日	「薬物治	療学Ⅲ」6年制課程4年次	
	2009年4月1日	「実務実	習事前教育」6年制課程4年次	
	2011年4月1日	「処方解	析」6年制課程6年次	
	2013年4月1日	「機能形	態生理学」6年制課程2年次	
	2018年4月1日	「薬物治	療学IV」6年制課程3年次	
	2019年4月1日	「薬物治	療学V」6年制課程4年次	
		ルンしスを提しいとなるとなった。	しながら進めている。講義前! 一部穴埋め形式にして配布し 験に基づき、具体的な疾患や; 交えるなど、学生の学習意欲:	表や写真を含めたパワーポイントファイにパワーポイントファイルの内容をプリている。講義内容については、臨床医と症例を提示しながら最近の臨床エビデンを高める工夫を行っている。また、知識を改変したものを講義終了前に提示し、
2 作成した教科書、教材、参考書	2008年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2009年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2010年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2011年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2012年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2013年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2014年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2015年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2016年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製
	2017年4月1日	最新の知	見を含めた独自のプリントと	スライドを作製

•	2018年4月1日	最新の知り	見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	·		見を含めた独自のプリントとスライドを作製
	2020年4月1日	最新の知り	見を含めた独自のプリント、スライドとeラーニング用の動画を作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項	2015年4月~2017年3月	大学院主韓	幹
	2019年4月~現在	学生部長	
Ⅱ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
Barinda AJ, Ikeda K, Nugroho DB, Wardhana DA, Sasaki N, Honda S, Urata R, Matoba S, Hirata KI, Emoto N.	論文	i p	Indothelial progeria induces adipose tissue senescence and impair nsulin sensitivity through senescence associated secretory henotype. Nat Commun. (2020) 11: 481. doi: 10.1038/s41467-020-4387-w.
Adhikara IM, Yagi K, Mayasari DS, Ikeda K, Kitagawa H, Miyata O, Igarashi M, Hatakeyama K, Asada Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	a a	Chondroitin sulfate N-acetylgalactosaminyltransferase-2 deletion alleviates lipoprotein retention in early atherosclerosis and attenuates aortic smooth muscle cell migration. Biochem Biophys des Commun. (2019); 509: 89-95.
Wardhana DA, Ikeda K, Barinda AJ, Nugroho DB, Qurania KR, Yagi K, Miyata K, Oike Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	i	Camily with sequence similarity 13, member A modulates adipocyte nsulin signaling and preserves systemic metabolic homeostasis. Proc Natl Acad Sci U S A. (2018) 115: 1529-1534.
Nugroho DB, Ikeda K, Barinda AJ, Wardhana DA, Yagi K, Miyata K, Oike Y, Hirata KI, Emoto N.	論文	i	Geuregulin-4 is an angiogenic factor that is critically involved in the maintenance of adipose tissue vasculature. Biochem Biophys des Commun. (2018) 503: 378-384
Yorifuji K, Uemura Y, Horibata S, Tsuji G, Suzuki Y, Miyagawa K, Nakayama K, Hirata KI, Kumagai S, Emoto N.	論文	1 h	CHST3 and CHST13 polymorphisms as predictors of bosentan-induced iver toxicity in Japanese patients with pulmonary arterial hypertension. Pharmacol Res. (2018) 135: 259-264 doi: 0.1016/j.phrs.2018.08.011.
2. 学会発表			
演題名	発表年・月		学会名

江本

Translational Research on Pulmonary Hypertension – From Bench to Bed –		2020年・10月	The 29th Annual Scientific Meeting of the Indonesian Heart Association (ASMIHA)	
Endothelial Cell-Derived Activin A is Critically Involved in Pulmonary Arterial Hypertension through Mediating Bmpr-II Degradation in Endothelial Cell		2020年・7月	第84回日本循環器学会学術集会	
Translational Research of Endothel Hypertension and Diabetic Nephropa		2019年・7月	Jogja Cardiology Update 2019 Indonesia	
膠原病にはなぜ肺高血圧症が合併しやすいのか		2019年・6月	第4回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会	
静注PGI2製剤導入のタイミング:6th WSPHからのメッセージ		2018年・9月	第66回日本心臟病学会学術集会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	 動			
1987年6月~現在	日本内科学会	(2002年9月~現在:日本内科学	会認定内科医、2014年12月~現在:日本内科学会総合内科専門医)	
1987年4月~現在	日本循環器学会	(2004年3月~現在:日本循環器学会認定循環器専門医、2015年4月~2020年3月:日本循環器学会評議員)		
2000年10月~現在	日本高血圧学会	(2009年10月~現在:日本高血原	王学会評議員、2010年10月~現在:日本高血圧学会専門医)	
2004年4月~現在	在 日本医学教育学会			
2012年11月~現在	国際心臓研究学会日本 部会	(2012年11月~現在:国際心臟研究学会 日本部会 評議員)		
2013年9月~現在	International Conference on Endothelin	International Advisory Board		
2016年4月~現在	日本肺高血圧・肺循環 学会	(2016年4月~現在:日本肺高血	圧・肺循環学会常任理事)	

所属 数学研究室	職名 教授	氏名 内田 吉昭					
I 教育活動							
教育実	践上の主な業績	年月日			概	要	
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)						
数学 I と数学IIにおいて,	習熟度別クラスの導入	2008年4月~現在に至る				(高等学校での数学IIIお 授業を行っている.	SよびCの履修の
統計学IとIIにおいて,サ	ブノートの作成	2009年4月~現在に至る	統計学を たサブノ	となるべく視覚を ソートを作成して	を使って理解して , 授業の補助。	てもらうために, グラフ として使っている.	′等を多く使用し
2 作成した教科書、教	材、参考書						
薬学系学生のための微分積	分 熊澤美裕紀共著 ムイスリ出版	2016年3月					
数えて描いて塗って学ぶ / 著/日本評論社	ブラフ理論ワークブック 内田吉昭	2018年7月					
わかりやすい微分積分 内日 出版	田吉昭/熊澤美裕紀共著 ムイスリ	2020年2月					
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特	記すべき事項						
Ⅱ 研究活動							
1. 著書・論文等							
	氏名	種別				内容	
2. 学会発表							
	演題名	発表年・月				学会名	

内田

Delta unknotting number one knots without ribbon singularity are prime		2018 • 1	第13回東アジア結び目スクール
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
1988年4月~現在に至る	日本数学会会員		

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 沼田 千賀子				
I 教育活動	•				
教育実践上の主な業績	年月日			概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2009年~現在	患者心理 て2~3人	lについての講義、	ワークを行っている。 /ョンを行い、「死」カ	緩和医療を中心に薬物療法と ワークでは「死生観」についいら見えてくる患者心理を感じ
	2010年~現在	にスムー	-ズに取り組める』 こいる。また自己の	よう、臨床現場で求めら	長期実務実習(病院・薬局) られる知識・技能・態度の指導 ように「ルーブリック評価」を
	2011年~現在			寒害被害者の体験談を聞 3機会となっている。	引く授業を実施し、学生が薬害
	2013年~現在	がん専門 る。「か ら多職種	月医療者養成」にお ぶん医療薬学特論」 重連携の研究を行っ	らいて、がん医療に従事 の講義・演習で模擬患	ラン「地域・職種間連携を担う 事する薬剤師の養成を行ってい 患者を使った服薬指導や海外か 四聘し、ワークショップ形式で いでいる。
	2016年~現在	センター ん患者や	-にて隔月で開催し - そのご家族、医療	ている「メディカル・	は、本学の地域連携サテライト・カフェ」に学生が参加し、が る機会を設けている。この経験 っている。
	2019年9月~現在	同で行う から実施 5名にイ	IPE科目「在宅医 国となった。演習で	療演習」を2015年から で使用する症例は、実際 、それを元に作成した	隻リハビリテーション学部と共 打ち合わせを重ね、2019年9月 景に在宅で活躍している薬剤師 。現場に近い内容や問題点を
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月15日	薬学生の		ーズ1 ヒューマニズム	薬学入門(共著)
	2011年3月~現在	実務実習	胃事前教育用テキ ス	ストの作成	

	2020年3月~現在	処方解析Ⅱテキストの作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2015年5月23日	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 ルーブリック作成ワークショップ (星薬科大学) 講演
	2016年2月14日	第10回がんプロシンポジウム「がん患者の立場から、薬剤師教育を考える」 (大阪) 講演
	2016年10月23日	がんプロ連携7大学合同研修会「神戸薬科大学における 「がん哲学学校 メ ディカル・カフェ」の取り組みと 参加者および学生の意識変化について」 (大阪) 講演
	2016年11月1日	レギュラトリーサイエンスエキスパート研修会「薬学部における薬害教育の取 り組み」(東京)講演
	2019年2月24日	文部科学省:多様なニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン」事業「青少年へのがん教育〜中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化〜」(大阪)講演
	2020年4月18日	がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ(広島)講演、タスクフォース
4 その他教育活動上特記すべき事項	2010年4月~現在	OSCE実施委員長
	2010年1月~2016年	薬学教育者・薬剤師へのFD活動として、タスクフォースとして、薬剤師のためのワークショップin近畿に協力
	2012年4月~2017年3月	がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 「地域・職種間連携を担うがん 専門医療者養成」 担当
	2014年4月~2016年3月	学生就職委員会 委員
	2015年4月~現在	がん哲学学校 in 神戸 メディカルカフェを開催し、地域のがん教育を推進
	2015年6月~現在	甲南女子大学との連携教育プログラムワーキンググループ委員
	2015年6月~2017年3月	地域連携教育推進ワーキンググループ委員
	2015年4月~現在	神戸薬科大学における人を対象とする研究倫理審査委員会委員
	2017年4月~現在	地域連携サテライトセンター運営委員

1		
	2018年4月~2020年3月 学生	委員会 委員
Ⅱ 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
沼田千賀子	著書	薬学生のための基礎シリーズ1 ヒューマニズム薬学入門(共著)(2015.3.12)
寺岡麗子、中山みずえ、湯谷玲子、沼田千賀子、岡本禎晃、 平野剛、富田猛、平井みどり、北河修治	論文	1日1回張り替え型フェンタニルクエン酸塩貼付剤(フェントステープ)の薬物残存量に影響を与える要因, <i>日本緩和医療薬学会</i> ,9,25-32(2016)
寺岡麗子, 三宅真衣, 伊藤真依, 塩野朋香, 沼田千賀子, 中山みずえ, 岡本禎晃, 平井みどり, 湯谷玲子, 北河修治, 坂根稔康	論文	フィルムドレッシング材による1日1回型フェンタニルクエン酸塩経 皮吸収型製剤の半量投与, <i>日本医療薬学会</i> , 43 (12), 671-679 (2017)
横山郁子,浅田聖士,藤本佳昭,河内正二,沼田千賀子	論文	中学生に対するがん教育の実施および生徒の意識変化, <i>日本緩和医療薬学雑誌</i> , 11 (3): 73-79 (2018)
後藤惠子, 富澤崇, 有田悦子, 沼田千賀子, 野呂瀬崇彦, 井手口直子, 半谷眞七子, 平井みどり	論文	かかりつけ薬剤師に求められるコミュニケーションスタンダード (Pharmaceutical Communication Standard) の構築, <i>日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会誌</i> , 17(2), 17-29(2018)
Hashimoto M., Aogaki K., Numata C., Moriwaki K., Matsuda Y., Ishii R., Tanaka I., Okamoto Y.	論文	Journal of opioid management, 2020,16(4), 247-252. "Factors influencing the prescribed dose of opioid analgesics in cancer patients
2. 学会発表		•
演題名	発表年・月	学会名

Adhesion Levels of Fentanyl Transdermal Products		9th World Research Congress of the European Association for Palliative Care
中学1年生を対象としたがん教育による意識変化	2017年6月	第11回緩和医療薬学会(札幌)
オピオイド系鎮痛剤の投与量に影響を与える因子の調査研究	2018年2月	第12回緩和医療薬学会(東京)
スボレキサントの不眠改善効果およびその因子に関する調査	2019年10月	第28回日本医療薬学会年会(福岡)
新人薬剤師に求められる基本的な社会的スキルに関する研究 ーインタビューから得られた 6 年次生の心理ー	2020年9月	第5回日本薬学教育学会大会(東京 帝京大学 web)
3. その他(講演等)		
演題名	発表年・月	講演場所
終末期の患者に対する精神的な支援	2017年2月	日本薬学会近畿支部 第4回在宅医療推進ワークショップ (大阪)
がんサバイバーの尊厳をサポートするコミュニケーション	2017年3月	がん治療における患者支援のためのSP参加型ワークショップ(大 阪)
病気と老化の原因「活性酸素」について	2018年1月	阪神シニアカレッジ(兵庫)

カフェでコミュニティとつながる〜神戸薬科大学の取り組み〜		2018年9月	昭和薬科大学「昭薬祭」(東京)
健康と免疫力を める 〜ミトコンドリアと腸内細 について〜		2020年10月	阪神シニアカレッジ(兵庫)
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動		
2002年5月~現在	日本医療薬学会会員		
2005年8月~現在	(社)兵庫県薬剤師会	認定 禁煙指導認定薬剤師	
2006年4月~2020年5月	兵庫県病院薬剤師会	理事	
2006年4月~現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会会員		
2007年3月~現在	日本緩和医療薬学会会員		
2007年4月~現在	日本ホリスティック医学協会会員		
2007年11月~現在	日本メンタルヘルス協会公認 心理カウンセラー		
2009年4月~2017年3月	6年制認定実務実習	指導薬剤師	
2009年8月~2019年3月	日病薬認定指導薬剤	師	
2009年10月~2014年10月	がん薬物療法認定薬	剤師	
2011年4月~現在	ブザン教育協会マインドマップ®アドバイザー		
2015年1月~2020年3月	(財)レギュラトリーサイエンスエキスパート認定		
2015年4月~2017年3月 日本緩和医療薬学会 広報副委員長			
2015年7月~現在	(社)がん哲学外来 監事		
2016年1月~現在	(社)がん哲学外来市	民学会 がん哲学外来コーデ	イネーター

2016年6月~現在	日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会 理事
2018年4月~現在	一般社団法人 日本ファンクショナルダイエット協会 ケトジェニックダイエットアドバイザー
2019年3月~2021年3月	一般社団法人日本医療薬学会代議員
2019年8月~現在	(社) 臨床分子栄養医学研究会 認定カウンセラー
2020年7月~現在	一般社団法人日本医療薬学 企画・シンポジウム委員会委員

所属 薬品物理化学研究室 職名 教授	氏名 向 高弘			
I 教育活動	•			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)				
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習) 物理化学II 放射化学 物理化学系実習	2011年4月~現在	ている。 COVID1 確認テス	また添削アルバイトを活用し、問題	国とともに各講義毎にグーグルフォームによる
(2) 本学薬学部学生への教育(卒業研究指導)	2011年4月~現在	ている。	然現象の解明と疾患の新たな診 『学生が以下の学会賞を受賞した	断法・治療法の開発を目指した研究を指導し エ(2016-2020年分)。
	2016年3月31日	•日本薬	学会第136年会 優秀発表賞	
	2016年10月15日	•第66回	日本薬学会近畿支部大会 優秀本	ポスター賞
	2017年10月14日	•第67回	日本薬学会近畿支部大会 優秀本	ポスター賞 (2名)
	2018年9月8日	•第2回日賞	日本核医学会分科会放射性薬品	科学研究会 CKJSRS2018トラベルグラント受
	2018年10月13日	•第68回	日本薬学会近畿支部大会 優秀本	ポスター賞
	2018年11月4日		th China-Japan-Korea Symposiur ostar Award	m on Radiopharmaceutical Sciences
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育 物理系基礎創薬学特論、物理系創薬学特論	2011年4月~現在	大学院生	こへの講義と研究指導を行ってい	ే .
(4) 他大学での講義	2016年6月	京都大学	と大学院薬学研究科の大学院生に	に基盤物理化学特論の講義を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書 放射化学・放射薬品学(第2版)	2011年12月30日	廣川書店 を執筆し		5章 原子核反応と放射性同位元素の製造」
新 放射化学・放射医薬品学(改訂第4版)	2016年8月15日	南江堂(佐治英郎ら編集)の改訂第4版の	「第1章 原子核と放射能」を執筆した。

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
国家試験対策委員会委員	2013年4月~2016年3月	物理系担当として、国家試験対策を実施した。
CBT実施委員会委員	2013年4月~2018年3月	CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。
神戸市消防局員への放射線実習	2016年7月21日	神戸市消防局員16名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
大学院主幹	2017年4月~2019年3月	大学院教授会、学位論文審査会の運営を担当した。
神戸市消防局員への放射線実習	2017年7月20日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
神戸市消防局員への放射線実習	2018年8月2日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。
CBT実施委員会委員長	2018年4月~現在	CBT体験受験、本試験、追再試験を実施した。
キャリア支援部長	2019年4月~現在	キャリア支援プログラムの改善を実施した。
神戸市消防局員への放射線実習	2019年9月3日	神戸市消防局員12名に対し、放射線測定に関する実習を行った。

Ⅱ 研究活動

1. 著書・論文等

氏名	種別	内容
Masayori Hagimori, Eri Hatabe, Kohei Sano, Hirotaka Miyazaki, Hitoshi Sasaki, Hideo Saji and Takahiro Mukai	論文	Biological & Pharmaceutical Bulletin, 40(3), 297–302 (2017) "An activatable fluorescent γ-polyglutamic acid complex for sentinel lymph node imaging" (Highlighted Paper Selected by Editor-in-Chief) (Featured Article in J-STAGE)
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane and Takahiro Mukai	論文	ACS Applied Polymer Materials, 1(5), 953-958 (2019) "Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline"
Kento Kannaka, Kohei Sano, Masayori Hagimori, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane and Takahiro Mukai	論文	Bioorganic & Medicinal Chemistry, 27(16), 3613-3618 (2019) "Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs"

Toshihide Yamasaki, Risa Azuma, Kohei Sano, Masayuki Munekane, Yuta Matsuoka, Ken-ichi Yamada and Takahiro Mukai	論文	ACS Medicinal Chemistry Letters, 11(1), 45-48 (2020) "Radioiodinated nitroxide derivative for the detection of lipid radicals"
Kento Kannaka, Kohei Sano, Hiromichi Nakahara, Masayuki Munekane, Masayori Hagimori, Toshihide Yamasaki and Takahiro Mukai	論文	Langmuir, 36(36), 10750-10755 (2020) "Inverse electron demand Diels-Alder reactions in the liposomal membrane accelerates release of the encapsulated drugs"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
合成高分子を用いたディスク型脂質ナノ粒子の作製と物性評価 (優秀発表賞受賞)	2016年3月	日本薬学会第136年会
細胞内遊離亜鉛イオンの検出を目的とした蛍光プローブの開発 (優秀演題賞受賞)	2016年7月	第27回日本微量元素学会学術集会
がんの核医学診断を目的としたコンドロイチン硫酸被覆自己 組織化ナノ粒子の開発 (優秀ポスター賞受賞)	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部大会
がんの光熱治療を目的としたコンドロイチン硫酸被覆金ナノロッドの開発 (優秀ポスター賞受賞)	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部大会
Thioflavin-TとCongo-redの融合化合物を母体とする全身性アミロイドーシス診断用放射性薬剤の開発	2020年11月	第60回日本核医学会学術総会
3. その他		•
演題名	発表年・月	講演
ナノ粒子による分子イメージング	2017年2月	第14回0MIC事業推進セミナー
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
1992年~現在 日本薬学会会員		
1997年~現在 日本薬物動態学会会員		
1997年~現在 日本核医学会会員		

2000年~現在	Society of Nuclear Medicine会員
2005年4月~2010年3月	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験における放射薬学関連問題に対する検討WG 九州・中国・四国支部担当委員
2006年~現在	日本分子イメージング学会会員
2007年~現在	日本癌学会会員
2008年10月~2009年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会 専門医試験小委員会委員
2009年~現在	Society of Radiopharmaceutical Sciences会員
2009年10月~2013年9月	日本核医学会 専門医・教育審査委員会委員
2011年~現在	日本アイソトープ協会会員
2011年5月~現在	日本薬学会近畿(関西)支部委員
2012年~現在	日本DDS学会会員
2013年1月~2015年3月	日本薬学会物理系薬学部会世話人
2013年2月~現在	日本薬学会代議員
2013年4月~現在	日本薬剤学会会員
2014年9月~現在	日本がん分子標的治療学会会員
2015年5月~現在	金属の関与する生体関連反応シンポジウム (SRM) 評議員
2016年4月~現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 薬剤師国家試験問題WG委員
2016年11月~現在	日本核医学会分科会 放射性薬品科学研究会 運営委員
2017年10月~2019年9月	日本核医学会評議員
2019年4月~現在	薬学教育協議会放射薬学教科担当教員会議 会長
2019年4月~現在	日本薬学会関西支部幹事

所属 病態生化学研究室 耶	職名 教授	氏名 加藤 郁夫				
I 教育活動						
教育実践	践上の主な業績	年月日		概		要
1 教育内容・方法の工夫	ミ (授業評価等を含む)					
(1)薬学部学生に対する教育				科大学3年次生の「内 ₂ よび「臨床生化学実習		療学 I」、「薬物治療学
(2)大学院修士、博士課程学	生に対する教育	2013年4月~現在	して、 む) に ポイン	「病態解析治療学特論 対しては、「病態薬理 トを用いて解説を行っ	論」を、また博士課程 担生化学特論」を担当 っている。また、博□	土会人、聴講生を含む)に対 呈学生(社会人、聴講生を含 当:プリントを配布しパワー 上課程においては、最終時間 行わせ討論を行っている。
2 作成した教科書、教材	才、参考書					
(1)講義資料の作成				自のプリントを作成、		および「薬物治療学 II」で 甚礎から臨床に至る内容を講
3 教育方法・教育実践に	工関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記	さすべき事項					
(1) CBT対策委員会委員		2013年4月~2014年3月	CBT対策	長の実施。		
(2) 実務実習運営委員会委	員	2013年4月~2016年3月	実務実	習の円滑なる実施。		
(3) 学生就職委員会委員		2014年4月~2016年3月	学生生	活や就職活動の支援。		
(4) 国家試験対策委員会委	員	2014年4月~2016年3月	国家試	験対策の実施。		
(5) 共同研究委員会委員		2015年4月~2021年3月	共同研	究の円滑なる実施。		

(6) 教務委員会委員	2016年4月~2018年3月	教務関係の円滑なる運営。
(7) 研究設備等充実委員会委員	2017年4月~2019年3月	研究設備等の整備・充実(2018年3月~2019年4月:委員長)。
(8) 入試委員会委員	2018年4月~2020年3月	入学試験等の円滑なる実施。
(9) 中央分析委員会委員	2019年4月~2021年3月	中央分析機器の運営管理
(10) 教務委員会委員	2020年4月~現在	教務関係の円滑なる運営。
(11) 図書選定委員会委員	2020年4月~現在	図書選定の実施。

Ⅱ 研究活動

1. 著書・論文等

氏名	種別	内容
Kaji I, Akiba Y, Kato I, Maruta K, Kuwahara A, Kaunitz JD.	論文	J Pharmacol Exp Ther. 2017;361(1):151-161.; Xenin augments duodenal anion secretion via activation ofafferent neural pathways.
Słupecka-Ziemilska M, Grzesiak P, Jank M, Majewska A, Rak A, Kowalczyk P, Kato I, Kuwahara A, Woliński J.	論文	PLoS One. 2018;13(10):e0205994.; Small intestinal development in suckling rats after enteral obestatin administration.
Kuwahara A, Kuwahara Y, Kato I, Kawaguchi K, Harata D, Asano S, Inui T, Marunaka Y.	論文	Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol. 2019;316(6):G785-G796.; Xenin-25 induces anion secretion by activating noncholinergic secretomotor neurons in the rat ileum.
Maruta K, Takajo T, Akiba Y, Said H, Irie E, Kato I, Kuwahara A, Kaunitz JD.	論文	Dig Dis Sci. 2020;65(9):2605-2618.; GLP-2 acutely prevents endotoxin-related increased intestinal paracellular permeability in rats.
Kuwahara Y, Kato I, Inui T, Marunaka Y, Kuwahara A.	論文	Physiol Rep. 2021;9(4):e14752.; The effect of Xenin25 on spontaneous circular muscle contractions of rat distal colon in vitro
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

急性拘束ストレス負荷マウスにおけるRubiscolin-6の抗うつ効果		2018年11月	日本薬学会北陸支部第130回例会;佐藤玲菜、多河典子、加藤郁夫、 光本泰秀。	
Potent Antibacterial Activity of Peptides Designed from Salusin- β and HIV-1 Tat (49-57)		2018年12月	10th International Peptide Symposium / The 55th Japanese Peptide Symposium. ; M Kimura, K Kosuge, Y Ko, N Tagawa, I Kato and Y Uchida.	
Neurogenic relaxation of Xenin on spontaneous circular muscle contractions in rat distal colon		2019年3月	The 9th Congress of Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies. ; Y Kuwahara, I Kato, A Kuwahara, Y Marunaka.	
Secretory reflex pathway of Xenin-25 in the rat ileum		2019年3月	The 9th Congress of Federation of Asian and Oceanian Physiological Societies.; A Kuwahara, Y Kuwahara, I Kato, T Inui, Y Marunaka.	
腸管ペプチドxeninのELISA法の確立と	腸管ペプチドxeninのELISA法の確立とマウス小腸組織での定量		第60回日本臨床化学会年次学術集会;多河典子、浅野真司、中張隆司、桑原厚和、丸中良典、加藤郁夫。	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動			
1984年1月~現在	日本薬学会会員			
1986年8月~現在 日本ペプチド学会会員				
2006年5月~現在	日本内分泌学会会員			
2014年5月~現在 日本肥満学会会員				
2016年7月~現在	2016年7月~現在 日本神経内分泌学会会員			

所属 微生物化学研究室 耳	職名 教授	氏名 小西 守周					
I 教育活動							
教育実践	浅上の主な業績	年月日		概		要	
1 教育内容・方法の工芸		微生物学 I II 2009年~ 免疫学 I II 2012年と2013年度 免疫学 2014年~ 生物学系Ⅲ実習 2009年~2013年度 生物学系Ⅱ実習 2014年~2016年度 微生物学実習 2016年~ アクティブラボ 2015年~	講に用関で剤をる20視か行担た更やくこ感をるるりる国む生年し分たす名で術間実対の強いのようはないのでで発	I I II	、ず授、内もをた、むや 生、き験 度避 講れ業復容加心講がます 物とでといる にけてては限るようい。 系生だ果 コる が兼してて行のよう 実の学も ナ要が はける が発してい行う講集に かりにに 何が がましてい行う講集に かりにに 何が がましていてのよう 実の学も ナ要が があるようも力題 ら扱考行 状っ	をてる問最れまに動をな 微いえう 況考も。を新たた努画維ど 生にる考 でらい知義いて利し配 学すとに 施明に変 実る生学を間れるしすし 習実推す 間 時間 かんしん に習奨る を	イけ系のり中講 講より 名内し指 短り表義と維、内と たをを さく知的 な講試 変大り比 たい ないないに したがない したの特薬容す 。細 れ変識多 たたん かけ から
2 作成した教科書、教材	材、参考書	2015年		対科書の執筆に関わっ 負域の微生物学・免疫		書店)	
3 教育方法・教育実践に	こ関する発表、講演等	該当無し					

I		
4 その他教育活動上特記すべき事項	該当無し	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Razali N, Hohjoh H, Inazumi T, Maharjan BD, Nakagawa K, Konishi M, Sugimoto Y, Hasegawa H.	論文	Biol Pharm Bull. 2020, 43(4):649-662. doi: 10.1248/bpb.b19-00838. "Induced Prostanoid Synthesis Regulates the Balance between Th1- and Th2-Producing Inflammatory Cytokines in the Thymus of Diet-Restricted Mice"
Satoh A, Han SI, Araki M, Nakagawa Y, Ohno H, Mizunoe Y, Kumagai K, Murayama Y, Osaki Y, Iwasaki H, Sekiya M, Konishi M, Itoh N, Matsuzaka T, Sone H, Shimano H.	論文	iScience, 2020 23(3):100930. doi: 10.1016/j.isci.2020.100930. "CREBH Improves Diet-Induced Obesity, Insulin Resistance, and Metabolic Disturbances by FGF21-Dependent and FGF21-Independent Mechanisms"
Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.	論文	Int. immunopharmacol. 2019, 67:408-416 "Maturation of dendritic cells by maitake α -glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination."
Yuan X, Tsujimoto K, Hashimoto K, Kawahori K, Hanzawa N, Hamaguchi M, Seki T, Nawa M, Ehara T, Kitamura Y, Hatada I, Konishi M, Itoh N, Nakagawa Y, Shimano H, Takai-Igarashi T, Kamei Y, Ogawa Y.	論文	Nat. Commun. 2018, 9(1):636.doi: 10.1038/s41467-018-03038-w. "Epigenetic modulation of Fgf21 in the perinatal mouse liver ameliorates diet-induced obesity in adulthood."
Nakayama Y., Masuda Y., Ohta H., Tanaka T., Washida M., Nabeshima Y., Miyake A., Itho N, Konishi M.	論文	Sci. Rep. 2017, 7:330. doi: 10.1038/s41598-017-00349-8. "Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
分泌型へムタンパク質Neudesin遺伝子欠損マウスは赤血球代謝亢進と貯蔵鉄減少を示す	2018年11月	分子生物学会年会
Refeeding時の肝臓におけるFgf21の意義	2019年5月	第73回日本栄養・食糧学会大会

分泌型へムタンパク質Neudesinによる赤血球代謝調節機構の 解析		2019年6月	第20回Pharmaco-Hematologyシンポジウム
分泌因子Neudesin のがん免疫抑制作用について		2020年3月	日本薬学会 第139年会
Fgf21の胸腺樹状細胞を介した免疫寛容維持機構		2020年10月	第70 回 日本薬学会関西支部総会・大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
2018年4月~2020年3月	BPB編集委員		
1999年4月~現在に至る	日本分子生物学会会員		
2006年4月~現在に至る	日本肥満学会会員		
2006年4月~現在に至る	日本薬学会会員		

所属 医療薬学研究室 職名 教授	氏名 力武 良行					
教育実践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
総合薬学講座	2015年11月~	国家試験	対策のポイントを示しながら	ら、分かりやすく講義した。		
実務実習事前教育	2015年9月~	医師とし	ての視点からの内容も含めた	た実習とした。		
合同初期体験実習	2016年9月~	チュータ	ーとして実習に参画した。			
IPW演習	2016年12月~	本学実習	目担当者及びチューターとして	て、企画~演習の実施に参画した。		
処方解析 I	2018年4月~	病態・薬	医物治療に関して、最新の知り	見・薬物も交えて講義した。		
処方解析 Ⅱ	2018年9月~	病態・薬	医物治療に関して、最新の知り	見・薬物も交えて講義した。		
薬物治療学 I	2017年4月~	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。				
薬物治療学Ⅲ	2017年9月~	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。				
薬物治療学Ⅳ	2018年9月~	病態・薬物治療に関して、最新の知見・薬物も交えて講義した。				
がん薬物療法論	2020年4月~	大腸がんの薬物治療治療及びがんゲノム医療における最新情報を講				
2 作成した教科書、教材、参考書						
図解 腫瘍薬学 (川西正祐/賀川義之/大井一弥編集、南山堂)	2020年8月出版	消化器がんについて執筆した。				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
臨床・基礎薬学連携シンポジウム	2018年10月21日	薬学教育に関する講演を行った。				
『神戸薬科大学研究論集Libra』第18号	2018年12月21日	本学にお	おけるTBLトライアルに関して	報告した。		
4 その他教育活動上特記すべき事項						
がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン	2017年4月~	実習コー	-ディネーターとして、事業達	遂行に参画した。		
Ⅱ 研究活動						

1. 著書・論文等				
氏名	種別	内容		
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	J Neurochem 2018, 147(4), 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α -syntrophin in aquaporin-4 expression."		
Tagashira T, Fukuda T, Miyata M, Nakamura K, Fujita H, Takai Y, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Arterioscler Thromb Vasc Biol 2018, 38(5), 1159-1169. "Afadin Facilitates Vascular Endothelial Growth Factor-Induced Network Formation and Migration of Vascular Endothelial Cells by Inactivating Rho-Associated Kinase Through ArhGAP29."		
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	BMC Cancer 2018, 18(1), 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."		
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Scientific Reports. 2019, 9(1), 8065. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."		
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Exp Cell Res. 2019, 374(2), 333-341. "A novel in vitro coculture model to examine contact formation between astrocyt processes and cerebral vessels."		
2. 学会発表				
演題名	発表年・月	学会名		
脳血管内皮細胞老化からのSASPを介したミクログリアの活性 化	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会(福岡)		
シスプラチン耐性獲得機構におけるミトコンドリアDNA変異の 役割	2019年12月	第42回日本分子生物学会年会(福岡)		

Overexpression of cytotoxic T-lymphocyte-associated antigen-4 (CTLA-4) protects against abdominal aortic aneurysm (AAA) formation in mice.		2019年9月	European Society of Cardiology Congress (Paris, France)	
Pharmacological blockade of C-C chemokine receptor 4 exacerbates atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice.		2019年11月	The 91th AHA Scientific Sessions (Philadelphia, USA)	
Nectin-Like Molecules as Novel Regulators in Angiogenesis and Atherosclerosis.		2019年3月	9th FAOPS2019 (Kobe)	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動			
1992年5月~	日本内科学会(総合内科専門医、認定内科医)			
1992年5月~	日本循環器学会(循環器	器専門医)		
2010年9月~	日本血管生物医学会(記	評議員)		
2011年6月~	日本分子生物学会			
2011年7月~	日本動脈硬化学会			
2011年9月~	日本生化学会(JB誌編集委員)			
2016年2月~	日本薬学会			

所属 衛生化学研究室	職名 教授	氏名 長谷川 潤	氏名 長谷川 潤					
I 教育活動								
教育実践	践上の主な業績	年月日			概	要		
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)							
衛生薬学 I , Ⅱ		2016年4月~	衛生関連4教科については、主教材として独自のプリントを作成 た。穴埋め形式にすることで重要なポイントが明確になるように		イントが明確になるように工夫した。ま			
衛生薬学Ⅲ		2020年9月~	試験を意 研究リラ	授業の中で国家試験の過去問(抜粋)にも触れることで、早いうちな験を意識できるようにした。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・				
環境衛生学		2017年4月~	で、授業のコンセプトを再想起・理解できるようにした。 授業評価は、衛生薬学 I /環境衛生学に関しては2018年度、衛生 て2019年度に行われ、おおむね良好な評価を得ている。		こ関しては2018年度、衛生薬学Ⅱに関し 平価を得ている。			
研究リテラシー		2020年4月~	実習に関しては、講義との関連を意識させるような実習講義を行 最終日に討論とプレゼンテーションのコマを設け、思考力の育成 質的な知識の醸成を試みている。 (コロナ禍のため、討論とプレンは中止中。)			コマを設け、思考力の育成と統合的/実		
衛生薬学実習		2016年4月~						
2 作成した教科書、教	材、参考書							
メディカルサイエンス臨床	化学検査学	2014年1月	近代出版	艾				
MY衛生薬学		2017年11月	株式会社	ヒテコム(2021年	3月 改訂第2版	反)		
授業用プリント		2016年4月~2020年10月	月 上記授業の全てで用いる授業の補助プリントを自作した。		リントを自作した。			
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等							
4 その他教育活動上特	記すべき事項							
Ⅱ 研究活動			-					

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Hirono J, Sanaki H, Kitada K, Sada H, Suzuki A, Lie LK, Segi-Nishida E, Nakagawa K, Hasegawa H.	論文	Neuroreport. 2018, 29, 174 "Expression of tissue inhibitor of metalloproteinases and matrix metalloproteinases in the ischemic brain of photothrombosis model mice."
Razali N, Horikawa I, Hohjoh H, Yoshikawa C, Hasegawa H.	論文	BPB Reports. 2019, 2, 39-47 "Prostaglandin-Modulated Interaction of Thymic Progenitor Cells with Blood Vessels during Estradiol-Induced Thymic Involution."
Hohjoh H, Horikawa I, Nakagawa K, Segi-Nishida E, Hasegawa H.	論文	Neurosci Lett. 2020, 739, 135406. "Induced mRNA expression of matrix metalloproteinases Mmp-3, Mmp-12, and Mmp-13 in the infarct cerebral cortex of photothrombosis model mice."
Hasegawa H, Kondo M, Hohjoh H, Nakayama K, Segi-Nishida E.	論文	BPB Reports. 2020, 3, 208-215. "C-C chemokine receptor 5 (CCR5) expression in the infarct brain of the photothrombosis mouse model."
Razali N, Hohjoh H, Inazumi T, Maharjan BD, Nakagawa K, Konishi M, Sugimoto Y, Hasegawa H.	論文	Biol Pharm Bull. 2020, 43, 649-662 "Induced Prostanoid Synthesis Regulates the Balance between Th1- and Th2-Producing Inflammatory Cytokines in the Thymus of Diet-Restricted Mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
組織の老化に伴う血管新生とその制御	2017年12月	2017年度生命科学系学会合同年次大会(ConBio2017)
生体ストレスが誘導する血管系リモデリング	2019年3月	日本薬学会第139年会

妊娠初期のフタル酸エステル摂取による子宮の組織化学的変 化		2019年9月	第92回日本生化学会大会
デキサメタゾン誘導性の胸腺退縮における未熟胸腺T細胞の分 極化		2020年6月	第47回 日本毒性学会学術年会
光血栓性脳梗塞モデルにおけるMmp-3, -12, -13の発現誘導		2020年9月	フォーラム2020 衛生薬学・環境トキシコロジー
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動		
1995年10月~現在		竟・衛生部会 2017年〜2018年 19年〜現在 学術誌編集委員)	財務委員,2017年~現在 研究戦略委員,2018年~現在 総務委員,
1995年12月~現在	日本生化学会会員	(2013年 関東支部例会 実行委	· []
2002年2月~現在	日本神経科学学会会員		
2008年2月~現在	日本細胞生物学会会員		
2008年3月~現在	日本脂質生化学会会員		
2017年1月~現在	老化促進モデルマウス	(SAM) 学会会員	
2017年5月~現在	日本毒性学会会員		
2019年8月~現在 日本神経化学会会員			
2021年4月~現在	BPB Reports誌編集委員	l	

所属 製剤学研究室	職名 教授	氏名 坂根 稔康			
I 教育活動			-		
教育実践	 関上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) (1) 学部学生に対する教育			国家試験た、授業	過去問題をまとめたプリント	を記入できるように工夫したプリント、 を作製して、学生に配布している。ま 可能なものに関しては購入し、製剤の実
		2017年~ 2017年~ 2017年~2019年 2020年~	香粧品学 臨床薬剤	R薬剤学(3年生前期) :(4年生前期) 学Ⅰ(4年生前期) 学Ⅱ(6年生前期)	
(2) 大学院生への教育		2016年~ 2016年~	囲で、外薬剤学特	究テーマや成果に触れることで、部の研究者を招聘し、講演を聴い論 (大学院修士課程) 学特論 (大学院修士課程)	知識・見識を深めてもらうために、可能な範ってもらっている。
(3) 他大学での講義		2017年~	薬物治療学特論(神戸大学大学院医学研究科) 修士課程の学生約20名を対象に、自分が得た研究結果を中心に解説してい		
2 作成した教科書、教	材、参考書				
(1) 「演習で理解する生	物薬剤学」(廣川書店)	2009年2月15日	第2章 薬執筆した		章 薬物動態の解析(pp.189 - pp.240)を
(2) ベーシック薬学教科 「薬	∤書シリーズ18 物動態学」(化学同人)	2010年4月1日	第3章 薬	物の分布 (pp.55 - pp.80)を執筆	した。
(3)「物理薬剤学・製剤学	と ー計算の解法-」(廣川書店)	2012年1月10日		するとともに、第6章 粉体のf pp.87)を執筆した。	生質(pp.29 - pp.53), 第9章 製剤試験法

(4) 「製剤学(改訂第7版)」(南江堂)	2017年4月10日	第6章 薬物の生体内動態 6-2 薬物の分布(pp.290 - pp.308)を執筆した。
(5) 「製剤学・物理薬剤学」(廣川書店)	2017年5月10日	共同編集するとともに、第4章「粉体」(pp.53-pp.74)、第5章「界面現象と分散系」 (pp.75 - pp.97)、第6章 レオロジーと高分子」(pp.99-pp.113)を執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
	2008年6月 ~ 2012年8月	「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ in 近畿」に、タスクフォースとして参加した。
	2017年4月 ~	教務委員会委員
	2019年4月 ~	教務部長
The side and the second		

Ⅱ 研究活動

1. 著書・論文等

氏名	種別	内容
Satoru Matsuura, Hidemasa Katsumi, Hiroe Suzukia, Natsuko Hirai, Hidetaka Hayashi, Kazuhiro Koshino, Takahiro Higuchi, Yusuke Yagi, Hiroyuki Kimura, Toshiyasu Sakane, and Akira Yamamoto		Proc. Natl. Acad. Sci. USA, 2018, 115, 10511-10516. "L-Serine-modified polyamidoamine dendrimer as a highly potent renal targeting drug carrier"
Tomohiro Umeda, Akiko Tanaka, Ayumi Sakai, Akira Yamamoto, Toshiyasu Sakane, Takami Tomiyama	論文	Alzheimer's & Dementia, 2018, 4, 304-313. "Intranasal rifampicin for Alzheimer's disease prevention"
Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kaeko Araki, Mai Yoshizumi, Masakazu Enomura, Daisuke Inoue, Tomoyuki Furubayashi, Reiko Yutani, Reiko Teraoka, Akiko Tanaka, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Katsumi Iga, Toshiyasu Sakane	論文	Eur. J. Pharm. Biopharm., 2018, 122, 1-5. "Novel strategy for improving the bioavailability of curcumin based on a new membrane transport mechanism that directly involves solid particles"
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Mari Arai, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"
Toshiyasu Sakane, Sachi Okabayashi, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Akiko Tanaka and Tomoyuki Furubayashi	論文	Pharmaceutics, 2020, 12, 1227-1234. "Brain and Nasal Cavity Anatomy of the Cynomolgus Monkey: Species Dierences from the Viewpoint of Direct Delivery from the Nose to the"

2016年4月 ~

2. 学会発表 演題名 発表年・月 学会名 鼻腔内投与による Catalytide の脳内送達 第32回バイオメディカル分析科学シンポジウム 2019年8月 新規生体膜透過機構の基づくシプロフロキサシン粉末吸入製 2020年3月 日本薬学会第140年会 剤化に関する検討 -in vivo ラット体内動態評価-ヒトiPS細胞由来三次元培養皮膚を用いた薬物の経皮吸収性 日本薬学会第140年会 2020年3月 及び毒性の評価 鼻腔内投与により脳内に直接移行したOxytocinの脳内動態 2020年5月 日本薬剤学会第35年会 鼻腔から脳への直接的薬物送達 ~ 直接移行後の脳内薬物動 第36回日本DDS学会学術集会 2020年8月 態と脳・鼻腔の種差~ Ⅲ 学会等および社会における主な活動 日本薬学会会委員(現在に至る) 1985年2月~ 日本DDS学会会員(現在に至る) 1989年4月 ~ 日本薬剤学会会員(現在に至る) 1992年4月~

日本薬学会近畿支部委員

所属 薬化学研究室	職名 教授	氏名 奥田 健介				
I 教育活動						
教育実	践上の主な業績	年月日			概	要
1 教育内容・方法の工 有機化学I 有機化学III 生有機化化学V 有機化化学学 有成薬機化品化薬薬 有基礎で 主 を 有基と 一 を 一 を 一 の 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	夫(授業評価等を含む)	2016年4月 - 9月 2017年4月 - 2017年9月 - 2017年4月 - 2019年9月 2020年4月 - 2016年4月 - 2017年1月 - 2016年9月 - 2016年4月 - 2017年4月 -	適もる 行補 携 た のる 任批 イ堂や 薬でプ薬る機デ合容 業持的合いをする 乗りののでしている。 かっている では、 かっている。 では、 かっている。 かっている。	では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	程度を確認も	を巡回して実技指導を行っている。ま 深めている。 一)においては、有機化学・生薬学系 検対策・CBT対策の講義を行ってい を涵養するべく、実験研究に対して責 また研究に関連する原著論文を選んで 设けている。 おいては最新の創薬化学・ケミカルバ 必ずしも本分野を専門としない学生
2 作成した教科書、教 有機化学実習書	材、参考書				ご学の内容を取り入れ 0年度に改訂を行った	ιた有機化学実習書の作成を行い、 ≿。
3 教育方法・教育実践 特になし	に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特 他大学学生への教育 高等学校生徒への教育	記すべき事項	2016年4月—6月 2016年8月、2018年8月				「創薬合成化学」演習を行った。 ける講義を行った。

他大学学生への教育	2019年7月,12月	中京大学にて薬学関連領域に関する「法学」および「日本国憲法」講義を行った。
Ⅱ 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
K. Hattori, K. Koike, K. Okuda, T. Hirayama, M. Ebihara, M. Takenaka, H. Nagasawa	論文	Org. Biomol. Chem. 14(6), 2090-2111 (2016). "Solution-Phase Synthesis and Biological Evaluation of Triostin A and its Analogues"
S. Fukuda, K. Okuda, G. Kishino, S. Hoshi, I. Kawano, M. Fukuda, T. Yamashita, S. Beheregaray, M. Nagano, O. Ohneda, H. Nagasawa, T. Oshika	論文	Graefes Arch. Clin. Exp. Ophthalmol. 254 (12), 2373–2385 (2016). "In vivo Retinal and Choroidal Hypoxia Imaging Using a Novel Activatable Hypoxia-Selective Near-Infrared Fluorescent Probe"
T. Hirayama, H. Tsuboi, M. Niwa, S. Kadota, A. Miki, K. Okuda, H. Nagasawa	論文	Chem. Sci. 8(7), 4858-4866 (2017). "A universal fluorogenic switch for Fe(II) ion based on N-oxide chemistry permits the visualization of intracellular redox equilibrium shift towards labile iron in hypoxic tumor cells"
K. Okuda, B. G. M. Youssif, R. Sakai, T. Ueno, T. Sakai, T. Kadonosono, Y. Okabe, O. I. A. R. Salem, A. M. Hayallah, M. A. Hussein, S. Kizaka-Kondoh, H. Nagasawa	論文	Heterocycles 101(2), 559-579 (2020). "Development of Near-infrared Fluorescent Probes with large Stokes shift for Non-Invasive Imaging of Tumor Hypoxia"
I. Takashima, Y. Inoue, N. Matsumoto, A. Takagi, K. Okuda	論文	Chem. Commun. 56(87), 13327-13330 (2020). "A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がんのストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究	2016年7月	第22回癌治療増感研究会
Development of Drugs for Modulating Endoplasmic Reticulum Stress Response	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress

がんの低酸素イメージング		2019年10月	第79回日本癌学会学術総会			
(±)-uvaridacol L の合成研究		2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会			
細胞内亜鉛イオンの高感度検出プロ	ーブの開発	2020年11月 生命金属に関する合同年会 (ConMetal 2020)				
3. その他						
演題名		発表年・月	行事名			
ガス状シグナル分子のクロストーク解明を可能とするマルチ カラー蛍光イメージングプローブの開発		2018年3月	東京生化学研究会平成29年度助成研究報告会			
がんのストレス応答系に関するケミカルバイオロジー研究		2018年3月	平成29年度 神戸薬科大学・武庫川女子大学薬学部 研究合同発表会			
がんのストレス応答系を標的とする 究	ケミカルバイオロジー研	2019年2月	神戸大学×神戸薬科大学 合同シンポジウム			
がん微小環境ならびにストレス応答 オロジー研究	系に関するケミカルバイ	2019年7月	第17回関西バイオ創薬研究会			
Ⅲ 学会等および社会における主な	活動					
1995年12月~現在	日本薬学会会員					
2009年2月~現在	日本がん分子標的治療等	学会会員				
2011年10月~現在	日本分子イメージング	学会会員				
2012年1月~現在 国際癌治療增感研究協会会員						
2016年5月~現在	日本薬学会近畿支部委員					

2018年7月~現在	日本薬剤師会および兵庫県薬剤師会会員
2020年4月~現在	国際癌治療増感研究協会理事

所属 医薬細胞生物学研究室	電 職名 教授	氏名 士反 伸和				
I 教育活動	•					
教育	実践上の主な業績	年月日		概		要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		2009年~2016年	析、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のいいのいのでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは、生物のでは	薬の確認試験や純度 業・習得させること イントで解説すると した。さらに、得ら;	試験など、生薬に を行った。実習で ともに、実験作業 れた結果から考察	当し、天然物の抽出や分に関する基礎的な事柄を見ての手技などについてパいて各学生に細やかいて名のでである。 その手技などについていた。 はについて各学生に細やからについては、 できる部分については、 できるで考察力を高める
		2010年~2015年	医薬品がイラストを	原料についてなど、薬 を使用し視覚的にわか を把握し、小テストや前	用となる資源の講乳 りやすくするとともん	この植物の器官から得られ 養を行った。 パワーポイント に、講義中の学生への質問 適宜復習を促すなどの工夫
		2014年~2016年	薬効、そ視覚的は	の生合成経路などの こわかりやすくするとと	講義を行った。パワもに、講義中の学生	から得られる化合物の構造 フーポイントでイラストを使用 生への質問で理解度を把握 すなどの工夫を行った。
		2015年~2016年	義を行った、概念	った。パワーポイントで	イラストを使用し視り よどについて教科書	巻となる概念などについて、 覚的にわかりやすくするとと ∳を中心として読み進めるこ

	細胞に ワーポー 2017年~現在 視覚的 生への		Eに対し「基礎生命科学」を担当し、細胞内小器官やアポトーシスなど関する基礎的な内容の理解と定着とを目指して講義を行っている。パントでイラストを使用するとともに、Youtubeなどのムービーも紹介してこわかりやすくすることを心がけて取り組んでいる。また、講義中の学質問で理解度を把握し、小テストや確認問題で適宜復習を促すなどの「テっている。
	2017年~現在	用成分はまた遺伝	に対し選択科目として「薬用資源学」を前半の6回、担当している。薬の生合成について、反応機構や生合成に関係する細胞生物学など、 云子組み換え植物と医薬品生産などを、パワーポイントでイラストを使 の講義をしている。
		織の観り見せるな	に対し「細胞生物学実習」を担当し、細胞分裂や植物組織、動物組 察などの修得を目指して行っている。マウスの解剖などではムービーを よどもし、顕微鏡観察では重要な点を説明しつつスケッチを促すなどの テっている。
2 作成した教科書、教材、参考書			基礎から学ぶ植物代謝生化学 1-328(2018)羊土社 E治、士反 伸和、杉山 暁史(編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
	2019. 09. 17	インター	-ネットを活用した講義改善の取り組み(神戸薬科大学 FD研修会)
	2020. 07. 20	オンライ	ン講義に役立つ様々なツールやサイトの紹介 (神戸薬科大学 FD研修会)
4 その他教育活動上特記すべき事項			
Ⅱ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
Yamada Y., Nishida S., Shitan N., Sato F.	論文		Sci. Rep., 2020, 10(1), 18066. doi: 10.1038/s41598-020-75069-7. "Genome-wide identification of AP2/ERF transcription factorencoding genes in California poppy (Eschsholzia californica) and their expression profiles in response to methyl jasmonate."

Shitan N, Yazaki K.	☆公∃ 台	Biochimica et Biophysica Acta - Biomembranes, 2019, 15: 183127. doi: 10.1016/j.bbamem.2019.183127 "Dynamism of vacuoles toward survival strategy in plants"
Nakanishi-Masuno T, Shitan N, Sugiyama A, Takanashi K, Inaba S, Kaneko S, Yazaki K.	論文	Int J Phytoremediation. 2018, 20(14):1427-1437. doi: 10.1080/15226514.2018.1501333 "The Crotalaria juncea metal transporter CjNRAMP1 has a high Fe uptake activity, even in an environment with high Cd contamination."
Amano I., Kitajima S., Suzuki H., Koeduka T., Shitan N.	論文	PloS One, 2018, 13(6), e0198936. doi: 10.1371/journal.pone.0198936."Transcriptome analysis of Petunia axillaris flowers reveals genes involved in morphological differentiation and metabolite transport"
Shitan N.		Biosci. Biotechnol. Biochem. 2016, 80(7):1283-93 "Secondary metabolites in plants: transport and self-tolerance mechanisms."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
スチロピン生産性ピキア酵母への輸送体導入と生産性変化の 検討	2020年3月	第61回日本植物生理学会年会
ジャスモン酸誘導性タバコ輸送体NtNCS1の機能解析	2019年10月	第13回メタボロームシンポジウム
Transporters of secondary metabolites -Identification, characterization, and possible application to synthetic biology-	2019年3月	岩手生物工学研究センター 第240回公開セミナー
二次代謝産物の輸送体研究 ~これまでとこれから~	2019年3月	第60回日本植物生理学会年会

植物二次代謝産物の輸送機構の解明		2018年3月	岩手生物工学研究センター 第240回公開セミナー	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動]			
1999年4月~現在に至る	日本農芸化学会会員			
2000年4月~現在に至る 目	日本分子生物学会会員			
2000年4月~現在に至る 目	日本植物バイオテクノロ	コジー学会会員		
2020年9月~現在に至る 目	日本植物バイオテクノロジー学会代議員			
2003年4月~現在に至る 目	日本植物生理学会会員			
2007年4月~現在に至る	トランスポーター研究会	会会員		
2011年4月~2016年7月	トランスポーター研究会	会世話人		
2016年7月~現在に至る	トランスポーター研究会	全顧問		
2009年4月~現在に至る	日本生薬学会会員			
2014年4月~現在に至る	日本生薬学会 代議員、	関西支部委員		
2020年4月~現在に至る F	日本生薬学会 関西支部支部長			
2009年4月~現在に至る	日本薬学会会員			
2017年4月~現在に至る	ファルマシア 編集委員			
2019年4月~現在に至る F	日本薬学会学術誌 編集	集委員		

所属	薬理学研究室	職名 教授	氏名 小山 豊				
I 教	数 育活動		I				
	教育実	践上の主な業績	年月日		概	要	
1			薬理学Ⅲ 2017年~ 薬理学Ⅳ 2018年~				
2	2 作成した教科書、教材、参考書		総合薬学講座2017年~ 2015年 10月	『日本薬学会編 スタンダード薬学シリーズⅡ医療薬学Ⅰ-薬の作用と体化および 薬理・病態・薬物治療』 東京化学同人 赤池昭紀、小澤孝一郎小山 豊 望月眞弓、山元俊憲 編集			
			2018年 3月 2018年 12月	309 南 『薬物治	江堂 岩崎克典、徳山尚 台療総論/症候・臨床検査	盾環器内科領域の疾患に用いる薬物 p 255− 吾 編集 /個別化医療(臨床薬学テキストシリーズ)』 中山書店 乾 賢一 監修 赤池昭紀 編集	
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					
4	その他教育活動上特	記すべき事項					
Ⅱ 荷	I 研究活動						
1. 津	香書・論文等						
		氏名	種別		内容		

Michinaga S, Kimura A, Hatanaka S, Minami S, Asano A, Ikushima Y, Matsui S, Toriyama Y, Fujii M, Koyama Y.	論文	Delayed administration of BQ788, an ETB antagonist, after experimental traumatic brain injury promotes recovery of blood-brain barrier function and a reduction of cerebral edema in mice. J Neurotrauma. 2018 35:1481-1494.		
Michinaga S, Koyama Y.	論文	Dual roles of astrocyte-derived factors in regulation of blood-brain barrier function after brain damage. Int J Mol Sci. 2019 20:571		
Koyama Y, Sumie S, Nakano Y, Nagao T, Tokumaru S, Michinaga S.	論文	Endothelin-1 stimulates expression of cyclin D1 and S-phase kinase-associated protein 2 by activating the transcription factor STAT3 in cultured rat astrocytes. J Biol Chem. 2019. 294:3920-3933.		
Michinaga S, Inoue A, Yamamoto H, Ryu R, Inoue A, Mizuguchi H, Koyama Y.	論文	Endothelin receptor antagonists alleviate blood-brain barrier disruption and cerebral edema in a mouse model of traumatic brain injury: A comparison between bosentan and ambrisentan. Neuropharmacology. 2020 175:108182.		
Michinaga S, Tanabe A, Nakaya R, Fukutome C, Inoue A, Iwane A, Minato Y, Tujiuchi Y, Miyake D, Mizuguchi H, Koyama Y.	論文	Angiopoietin-1/Tie-2 signal after focal traumatic brain injury is potentiated by BQ788, an ETB receptor antagonist, in the mouse cerebrum: Involvement in recovery of blood-brain barrier function. J Neurochem. 2020 154:330-348.		
2. 学会発表				
演題名	発表年・月	学会名		
Blockade of endothelin ETB receptor ameliorates blood- brain barrier disruption through increase of angiopoietin-1 after traumatic brain injury in mice	2018年 7月3日	The 18th World Congress of Basical and Clinical Pharmacology		
Recovery of blood-brain barrier disruption and reduction of brain edema by BQ788, an ETB receptor antagonist, after traumatic brain injury in mice	2018年 9月16日	第12回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム		
アストログリアを標的とした脳機能改善薬の開発:BBB保護と 脳浮腫の抑制	2019年 3月13日	(社)予防薬理学研究所キックオフシンポジウム		

エンドセリンによるStat3活性化を介したアスロトサイトの cyclin D1およびSkp2の転写促進		2019年 3月14日	第92回 日本薬理学会年会	
Bosentan, an endothelin receptor antagonist ameliorates vasogenic edema after traumatic brain injury in mice		2019年 9月22日	The Sixteenth International Conference on Endothelin	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
2010年12月~2014年12月	公益社団法人 日本薬	学会代議員		
2011年 ~現在	Neurochemistry Inter	national誌 Editorial Advisory Board		
2011年4月~2017年3月	厚生労働省 薬剤師国	家試験委員		
2012年 ~現在	The Journal of Pharma	acological Sciences誌 Advisor	y Board	
2012年3月~2018年2月	2012年3月~2018年2月 厚生労働省 医道審議会薬剤師分科会 薬剤師国家試験K·V部会委員			
2012年4月~2014年3月	公益社団法人 日本薬理学会企画教育委員			
2016年1月~2017年12月	公益社団法人 薬学教	公益社団法人 薬学教育協議会 薬理学関連教科担当教員会議 副委員長		
2015年10月~現在	公益社団法人 日本薬	理学会代議員		

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 國正 淳一					
I 教育活動						
教育実践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2018年4月〜現在に至る		生の地域医療・プライマリケア論 ・ト並びにパワーポイントを利用し	の講義を担当している。毎回配布す している。		
	2017年7月〜現在に至る	5年次の卒業研究Ⅰ並びに6年次の卒業研究Ⅱを担当している。現場あるいは薬局において臨床研究を実施している。臨床研究施設での実際を研究することにより、問題発見能力及びその解決能力の醸成を図って加えて、社会人としてのコミュニケーション能力の養成も併せて育成で				
	2017年9月〜現在に至る	6年次生の処方解析学,処方解析演習を担当している。処方解析学では配え するプリント並びにパワーポイントを利用している。処方解析演習では演習 題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。				
2 作成した教科書、教材、参考書						
薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト2018年版(薬 ゼミファーマブック)	2018年3月 新人薬剤		師・薬学生のための教科書の作成	えに加わった。		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
4 での他教育位勤工行品が、さず快	2017年7月~現在に至る	7月~現在に至る 神戸薬科大学 生涯研修企画・運営委員会委員				
Ⅲ 研究活動	1	1				
1. 著書・論文等						
氏名	種別			内容		
中村一仁, 浦野公彦, 田中万祐子, 西口加那子, 堺 陽子, 片野貴大, 鍋倉智裕, 山村恵子, 國正淳一	論文		保険薬局における残薬の確認に伴 効果の検討,医療薬学,2016,40	う疑義照会が及ぼす調剤医療費削減), 522-529		

堺陽子,岩尾岳洋,國正淳一,松永民秀		論文	薬物動態および毒性試験への応用を目指したヒトiPS細胞由来肝細胞の作製とその培養技術,愛知学院大学薬学会誌,2016,8,7-14		
國正淳一,堺陽子,浦野公彦		論文	国内における危険ドラッグの実態と対策,愛知学院大学薬学会誌, 2017,9,8-14		
辰見 明俊、 前川 裕希、小森 由理子、山本 克己、 濵 口 常男、高橋 一栄、國正 淳一		論文	ニボルマブによる重篤な免疫関連有害事象の発現予測因子としての好中球・リンパ球比および血小板・リンパ球比の有用性 医療薬学 2020, 46, 331-339		
Urano K., Ishibashi M., Matsumoto T Y., Iwamoto T., Kunimasa J., Okuda I		論文	Impact of physician-pharmacist collaborative protocol-based pharmacotherapy management for HIV outpatients. J Pharm Health Care Sci. 2020, 6, 9-15		
2. 学会発表					
演題名		発表年・月	学会名		
神戸大学・神戸薬科大学薬剤師レジデントにおける教育関連 業務		2020年3月	第9回日本薬剤師レジデントフォーラム		
薬剤師によるTDMオーダーと注射仮登録	の有用性評価	2020年3月	第9回日本薬剤師レジデントフォーラム		
人工弁置換術後のワルファリン導入にま 時間国際標準比推移の現状と課題	おけるプロトロンビン	2020年3月	第9回日本薬剤師レジデントフォーラム		
経口抗がん薬を含む術後補助化学療法に の有用性	こおける薬薬協働支援	2020年3月	第9回日本薬剤師レジデントフォーラム		
薬剤師による抗菌薬血中濃度測定オータ	で一登録と注射薬仮登録	2020年10月	第30回日本医療薬学会年会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	b				
2003年4月~現在に至る	1月~現在に至る 日本医療薬学会認定指導薬剤師				
2005年4月~現在に至る	日本医療薬学会評議員				
2014年6月~現在に至る	日本中毒学会評議員				

所属	英語第二研究室	職名 教授	氏名 玉巻 欣子					
I	教育活動							
	教育実践	践上の主な業績	年月日			概	要	
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)	2014年4月〜現在に至る	英文法を	基礎から学ばせる	る授業を実施してい	、大学生として知っ いる。パワーポイン 法授業を心がけてい	トのスライド等
			2015年4月〜現在に至る	る」とい にそって	うテーマでゼミ? 「闘病記を読み、?	を行っている。学 それを土台に各自 [*]	「闘病記から医療を 生はナラティブ・メ テーマを見つけて研 考力を高める授業を	ディスンの枠組 究し、発表する
			2012年4月〜現在に至る	る。病院 た実習先 急インス	ど・薬局訪問のサス 病院・薬局への打 トラクター」と	ポート、第三施設 挨拶など、円滑なれ して学生の救急救行	科目「早期体験学習 訪問の付添、発表会 受業運営を目指して 命講習の指導も行っ 訪問、救命救急講習	のサポート、ま いる。「救命救 ている。(2021
			2012年4月〜現在に至る	学英語語 している	彙・表現の習得、 。2013年度から/	医療系英文読解 は、e-ラーニング	、薬学生が最低限知・速読力の向上を目 を取り入れた授業を 業を展開している。	指す授業を実施
			2013年4月~現在に至る		選択英語】「実用 [点を置いた授業を		e-ラーニング自己等	学習によるTOEIC
			2015年4月〜現在に至る	考える」 みに基づ	というテーマで いて闘病記を読み	ゼミを展開してい み、テーマを設定	「患者体験記・闘病 る。ナラティブ・メ し、SGD、プレゼンラ ての考察を深めさせ	ディスンの枠組 テーション、レ

	2012年4月〜現在に至る	【4年次選択英語】「実用薬学英語」において、外国人患者に対する英語での 服薬指導に必要な医学・薬学英語の語彙・表現を学ぶ授業を実施している。学 生同士のロールプレイ、英文での家庭医学書読解、薬剤師会話のリスニングな ど、多角的な方法で医療系英語力増強に努めている。2012年度学生評価による ベストティーチャー賞受賞。
	2013年4月〜現在に至る	【海外薬学研修】当該研修の事前講義と現地での指導を担当している。2021年度は新型コロナ感染症拡大のためボストン研修が中止となった。その代替案として、ボストンのMCPHS大学教授によるオンライン講義、タイ・台湾の薬剤師によるビデオ講義を実施した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
平成24年度私立大学教育研究活性化設備整備事業申請担当	2012年	「e-ラーニング教材利用による薬学生の総合的英語力向上」というプロジェクトにて文科省への申請を行い、採択された。PC51台が導入され、e-ラーニング教材ソフトであるALC NetAcademy2 「医学英語<基礎>コース」、「スーパースタンダードコース」等を導入し、英語授業で活用している。
平成24年度ベストティーチャー賞受賞	2013年6月	2012年度「実用薬学英語I」学生評価によるベストティーチャー賞受賞。
神戸大学医学部医学科での医学英語教育	1999年4月~2018年3月	神戸大学医学部医学科5年次「臨床英語」担当(非常勤講師)
日本薬学会平成27年度文部科学省委託事業「薬学教育の改善・充実に関する調査研究」	2016年1月~2018年3月	「海外の薬学教育との比較調査委員会 改訂コアカリ英訳作業部会」 メンバーとして改訂コアカリ英訳を行っている。文部科学省 平成28年度 大 学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業「薬学教育の改善・ 充実に関する調査研究」報告書(平成29年3月)p. 156
2017-2018年度ベストティーチャー賞受賞	2017年	2017-2018年度学生評価によるベストティーチャー賞受賞
Ⅱ 研究活動		

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
入交重雄、川越栄子、相見良成、濱西和子、長谷川仁志、岩田淳、守屋利佳、平野美津子、黒住和彦、Baoul Breugelmans、高田淳、 <u>玉巻欣子</u> 、福沢嘉孝、森茂、五十嵐裕章、服部しのぶ、陰山幾男、James Hobbs、平孝臣、鈴木光代、一杉正仁、安藤千春、塩田充、芦田ルリ(掲載順)	著書	日本医学英語教育学会編『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 1』 6. Chest Pain (pp.60-71).(2016) (メジカルビュー社)
平井清子、金子利雄、堀内正子(責任者)、齋藤弘明、板垣 正、河野享子、金澤洋子、 <u>玉巻欣子(編著者)</u> 、田沢恭子、 山田惠、井原久美子、和治元義博、日本薬学英語研究会編	著書	『薬学生のための英語1』Unit 8, Unit 14 (pp. 55-62, 102-109). Listening & Speaking. Unit 1~16.(2017) (成美堂)
黒住和彦、小島多香子、永山正雄、濱西和子、高田淳、 <u>玉巻</u> <u>欣子</u> 、五十嵐裕章、服部しのぶ、福沢嘉孝、森茂、入交重 雄、川越栄子、相見良成、平野美津子、守屋利佳、大下晴 美、亀岡淳一、鈴木光代、青木洋介、芦田ルリ、塩田充、松 本珠希、一杉正仁、安藤千春、(掲載順) Clive Langham、 Timothy Minton.日本医学英語教育学会編	著書	『医学・医療系学生のための総合医学英語テキストStep 2』 3. Acute myocardial Infarction. pp.31-44.(2017) (メジカルビュー社)
金子利雄、堀内正子(責任者)、 <u>玉巻欣子(編著者)</u> 、エリック・スカイヤー、板垣正、井原久美子、河野享子、齋藤 弘明、高橋和子、竹内典子、田沢恭子、平井清子、吉澤小百 合、日本薬学英語研究会編	著書	『薬学生のための英語2』 pp.85-91 (Unit 13). Pharmaceutical Terminology. Units 1~16.(2019) (成美堂)
2野口ジュディー(監)、天ケ瀬葉子、神前陽子、スミス朋子、 <u>玉巻欣子</u> 、堀朋子、村木美紀子	著書	『これからの薬学英語』 pp. 26-33 (Lesson 5). (2019) (講談社サイエンティフィク)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
<u>玉巻欣子</u> 「外国人模擬患者を利用した薬学英語教育―4年次 「実用医療英語」実践報告―」	2016年8月27-28日	第1回日本薬学教育学会(京都)講演要旨集 p. 138 (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> 「ナラティブ・メディスンを意識した薬学部教養教育の試み―神戸薬科大学2年次『総合文化演習』玉巻ゼミでの取り組み―」		第2回日本薬学教育学会(名古屋)講演要旨集p. 123. (ポスター発表)
<u>玉巻欣子</u> ,田内義彦「米国の薬局でのフィールドワーク実践報告―アクティブラーニングを取り入れた海外薬学研修に向けた試み―」	2017年9月23-24日	日本社会薬学会第36年会(大阪)『社会薬学 (Jpn. j. Soc. Pharm.)』 Vol. 36. Suppl. 2017. p. 51.

<u>玉巻欣子</u> , 田内義彦「神戸薬科大学にお 修プログラムの構築と検証―米国薬学 ションと薬局フィールドワークの取り約	部でのプレゼンテー	2018年9月1-2日	第3回日本薬学教育学会(東京)講演要旨集p. 123. ポスター発表		
<u>玉巻欣子</u> , 田内義彦「米国薬学生から見 プレゼンテーション」	た日本人薬学生の英語	2019年9月16日	日本社会薬学会第38年会(松山)ポスター発表		
3. その他			·		
演題名		発表年・月	学会名		
<u>玉巻欣子</u> 「医療系学部における英語教育	育」(招待講演)	2018年10月7日	日本大学私立大学ブランディング事業「スポーツ日大によるアンチ・ドーピング教育研究拠点確立とポストオリンピックへの展開」体育の日イベント		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動				
2008年4月~2012年3月	大学英語教育学会研究	企画委員			
2010年4月~2015年3月	大学英語教育学会社員				
2015年4月~現在	大学英語教育学会会員				
2014年7月~2018年6月	日本医学英語教育学会	評議員、医学英語検定試験制	度委員		
2009年7月~2014年6月 2018年7月~現在	日本医学英語教育学会理	日本医学英語教育学会理事、医学英語検定試験制度委員			
2015年6月~現在	日本社会薬学会会員	3本社会薬学会会員			
2016年~現在	日本薬学会会員				

所属 薬品化学研究室 職名 教授	氏名 上田 昌史				
I 教育活動					
教育実践上の主な業績	年月日			概	要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)					
薬学入門、有機化学系の実習、演習および講義を担当した	2001年度~現在	実習を実た。医薬	施した。また、未	知検体の構造決定を化 解させるために、スモー	実習では、医薬品を実際に合成する 学反応や確認試験を利用して行っ -ルグループデスカッションを通して
	2009年度~2015年12月			習では、復習を兼ねた小 『解答解説を行った。	、テストを毎回行い、学生の理解度の
	2010年度~2012年度	機化学の能基につ)内容を大学レベ	ルの視点から解説し、有らに、習熟度を考慮しな	学の講義を行った。高校で学んだ有 「機化合物の性質に影響を及ぼす官 よがら、医薬品の開発過程や最新の
	2012年度~2014年度	機化学が	び生命現象の理解		を化学系薬学の観点から講義し、有 えした。また、スモールグループディス りについて説いた。
	2012年度~現在	性につい	て解説し、薬学に	こおける有機化学の重要	では、医薬品構造と薬理作用の関連 受性について説いた。また、高学年に 有機化学を徹底して説いた。
	2014年度~2016年11月	薬品に多		ニル基の反応を、生体に	誘導体の反応につて講義した。医 内での反応や医薬品の反応を例に
	2017年4月~現在	義した。		であるので、反応機構を	よびアルキンの性質や反応につて講 丁寧に何度も繰り返し説明し、学生
	2018年8月~現在	関連分野	予の知識の定着と	応用力の醸成のため、複	旦当した。これまで学修した有機化学 複雑な化合物の合成経路の立案をS 組み入れた評価を行った。
2 作成した教科書、教材、参考書	2001年(毎年改訂)	有機化学	ビ系II実習書		

	2015年	スタンダ [・] の性質と	ード薬学シリーズⅡ 3 日本薬学会編 化学系薬学 I.化学物質 反応、東京化学同人、SB023
	2015年		と薬理作用 医薬品を化学的に読む 、中枢神経興奮薬、脳循環・代謝改善薬
	2017年		一医薬品化学 第3章 複素環化合物、複素環関連医薬品
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
Ⅱ 研究活動		I	
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
Ito Y., Ueda M., Takeda N., Miyata O.	論文		hem. Eur. J., 2016, 22(8), 2616 – 2619. "tert-Butyl Iodide- dediated Reductive Fischer Indolization of Conjugated Hydrazones"
Sugita S., Takeda N., Tohnai N., Miyata M., Miyata O. Ueda M.	論文]	ngew. Chem. Int. Ed., 2017, 56(9), 2469–2472. "Gold-Catalyzed 3+2]/Retro-[3+2]/[3+2] Cycloaddition Cascade Reaction of N-lkoxyazomethine Ylides"
Nishida Y., Takeda N., Matsuno K., Miyata O., Ueda M.	論文		ur. J. Org. Chem. 2018, 3928-3935. "Acylative Coupling of Amine nd Indole Using Chloroform as a Carbonyl Group"
Konishi K., Takeda N., Yasui M., Matsuzaki H., Miyata O., Ueda M.	論文	C	. Org. Chem. 2019, 84(21), 14320—14329. "Copper—Catalyzed ycloisomerization of Cyclopropenylimine for Synthesis of yrroles"
Konishi K., Yasui M., Okuhira H., Takeda N., Ueda M.	論文	C	rg. Lett., 2020, 22(17), 6852-6857. "Copper-Catalyzed Sequential yclization/Migration of Alkynyl Hydrazides for Construction of ing-Expanded N-N Fused Pyrazolones"
2. 学会発表			
演題名	発表年・月		学会名

Aminocarbonylation of homoallylic amine with chloroform 2017年・7月 18th Tetrahedron Symposium Asia Edition オキシムエーテルを有するシクロプロペン類を基質としたビ 2018年・8月 第38回有機合成者手セミナー 2018年・8月 第38回有機合成者手セミナー 57th Enternational Society of Beterocyclic Chemistry Congress addition/cyclization/aromatization sequence 2019年・9月 7th International Society of Beterocyclic Chemistry Congress addition/cyclization/aromatization sequence 2020年・10月 第70同日本素学会関西支部大会 3.その他						
### 2018年・8月 第38回有機合成若手セミナー 2018年・8月 第38回有機合成若手セミナー 2018年・8月 第38回有機合成若手セミナー 2018年・8月 第38回有機合成若手セミナー 2019年・9月 7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress addition/cyclization/aromatization sequence 2019年・9月 7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress addition/cyclization/aromatization sequence 2020年・10月 第70回日本薬学会関西文部大会 3. その他 液理名 発表年・月 学会名 空素原子上にヘテロ原子をもつイミンおよびアミドの特性を 2018年・1月 近畿化学協会へテロ原子部会第3回懇話会(依頼公演) 連続するヘテロ原子を活用した複素環合成 2019年・2月 第11回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演) 111回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演) 111回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演) 111年・現在に至る 在郷学会会員 2011年・現在に至る 在郷学会会員 2011年・現在に至る 在郷合成化学協会会員 2011年2月~現在に至る 有機合成化学協会院西支部幹事 日本薬学会 ファルマシアトビックス専門小委員 111年・11日・11日・11日・11日・11日・11日・11日・11日・11日	Nーアルコキシプロピルアミド類の閉境 キサゾール合成		2016年・9月	第46回複素環化学討論会		
ロール類の新規合成法の開発	Aminocarbonylation of homoallylic	amine with chloroform	2017年・7月	18th Tetrahedron Symposium Asia Edition		
through acid-promoted β-protonation/nucleophilic addition/cyclization/aromatization sequence 2019年・9月 7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress addition/cyclization/aromatization sequence 2020年・10月 第70回日本薬学会関西支部大会 3. その他	オキシムエーテルを有するシクロプロペン類を基質としたピ ロール類の新規合成法の開発		2018年・8月	第38回有機合成若手セミナー		
3. その他	through acid-promoted β -protonati	nrough acid-promoted β -protonation/nucleophilic		7th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress		
演題名 発表年・月 学会名 学会名 2018年・1月 近畿化学協会へテロ原子部会第3回懇話会(依頼公演) 連続するヘテロ原子を活用した複素環合成 2019年・2月 第11回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演) 1999年~現在に至る 日本薬学会会員 2000年~現在に至る 有機合成化学協会会員 2011年~現在に至る 近畿化学協会会員 2011年2月~現在に至る 有機合成化学協会会員 2009年4月~2011年3月 日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	連続的閉環-開環反応によるイソキサ	連続的閉環-開環反応によるイソキサゾロン合成法の開発		第70回日本薬学会関西支部大会		
2018年・1月 近畿化学協会へテロ原子をもつイミンおよびアミドの特性を 2018年・1月 近畿化学協会へテロ原子部会第3回懇話会(依頼公演) 連続するヘテロ原子を活用した複素環合成 2019年・2月 第11回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演) 1999年~現在に至る 日本薬学会会員 2000年~現在に至る 有機合成化学協会会員 2011年~現在に至る 近畿化学協会会員 2011年~現在に至る 有機合成化学協会会員 2011年2月~現在に至る 有機合成化学協会関西支部幹事 1009年4月~2011年3月 日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	3. その他					
活用したヘテロ環合成 連続するヘテロ原子を活用した複素環合成 2019年・2月 第11回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演) Ⅲ 学会等および社会における主な活動 1999年~現在に至る	演題名		発表年・月	学会名		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動 1999年~現在に至る 日本薬学会会員 2000年~現在に至る 有機合成化学協会会員 2011年~現在に至る 近畿化学協会会員 2011年2月~現在に至る 有機合成化学協会関西支部幹事 2009年4月~2011年3月 日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	窒素原子上にヘテロ原子をもつイミン 活用したヘテロ環合成	およびアミドの特性を	2018年・1月	近畿化学協会ヘテロ原子部会第3回懇話会(依頼公演)		
1999年~現在に至る日本薬学会会員2000年~現在に至る有機合成化学協会会員2011年~現在に至る近畿化学協会会員2011年2月~現在に至る有機合成化学協会関西支部幹事2009年4月~2011年3月日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	連続するヘテロ原子を活用した複素環	合成	2019年・2月	第11回徳島文理大学薬学部学術講演会(依頼公演)		
2000年~現在に至る 有機合成化学協会会員 2011年~現在に至る 近畿化学協会会員 2011年2月~現在に至る 有機合成化学協会関西支部幹事 2009年4月~2011年3月 日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	Ⅲ 学会等および社会における主な活	<u></u> 動				
2011年~現在に至る近畿化学協会会員2011年2月~現在に至る有機合成化学協会関西支部幹事2009年4月~2011年3月日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	1999年~現在に至る	日本薬学会会員				
2011年2月~現在に至る 有機合成化学協会関西支部幹事 2009年4月~2011年3月 日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	2000年~現在に至る	有機合成化学協会会員				
2009年4月~2011年3月 日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員	2011年~現在に至る	近畿化学協会会員				
	2011年2月~現在に至る	有機合成化学協会関西多	支部幹事			
2011年5月~2016年5月 次世代を担う有機化学シンポジウム世話人	2009年4月~2011年3月	日本薬学会 ファルマミ	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員			
	2011年5月~2016年5月	次世代を担う有機化学ジ	は世代を担う有機化学シンポジウム世話人			

2017年5月~2021年3月	日本薬学会広報委員
2017年8月~現在に至る	アメリカ化学会会員
2019年4月~現在に至る	日本薬学会 学術誌編集委員
2020年4月~現在に至る	日本薬学会 化学系薬学部会役員

所属 薬剤学研究室	職名 教授	氏名 大河原 賢一				
I 教育活動						
教育実践		年月日		概	要	
1 教育内容・方法の工元 (1) 学部学生への教育	夫(授業評価等を含む)	2018年~ 2018年~ 2020年~	答て、薬物薬の一葉になって、薬物薬では、薬物薬では、薬物薬では、薬物薬では、薬物薬では、薬物薬のは、薬物・薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬の、薬	議義内容に関連する演習問 を行うことで、復習を促 学1 (3年次前期) 学I (4年次前期) プラボ (1~3年次通年) 製剤学実習 (3年次後期) 学II (6年次前期) 講座 (6年次通年)	とすと共に、遅刻の抑止力	
(2) 大学院生への教育		· ·	柄(主に と期待し 薬剤学特	・ピックを取り入れると共 上失敗談)を披露すること とている。 評論(大学院修士課程) 日学特論(大学院博士課程	で、受講生のモチベーシ	
(3) 他大学での講義			岡山大学	英学部「薬剤学」(3年生 大学院自然科学研究科「薬 大学院薬学研究科にて特	薬の体内動態とその解析手	法について」集中講義
2 作成した教科書、教材						
『創薬科学-ゲノム創薬が拓	「く未来−』(裳華房,2017)	2017年	「薬物の)送達システム」(pp. 24	42-268)を執筆	
図解 腫瘍薬学 (川西正祐/資	賀川義之/大井一弥編集、南山堂)	2020年	「マイク	ロRNAを用いた次世代がA	ん診断」を分担執筆	
3 教育方法・教育実践に	こ関する発表、講演等					

	該当なし	
4 その他教育活動上特記すべき事項	該当なし	
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
K. Ogawara, Y. Fukuoka, Y. Yoshizawa, T. Kimura, and K. Higaki	原著論文	J. Pharm. Sci., 2017, 106, 1143-1148. "Development of safe and potent 0/W emulsion of paclitaxel to treat peritoneal dissemination"
K. Ogawara and K. Higaki	総説	Chem. Pharm. Bull., 2017, 65, 637-641. "Nanoparticle-Based Photodynamic Therapy: Current Status and Future Application to Improve Outcomes of Cancer Treatment"
M. Hosokawa, S. Tanaka, K. Ueda, S. Iwakawa, K. Ogawara	原著論文	Biochem. Biophys. Res. Commun., 2019, 509, 249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells with intrinsic resistance to decitabine"
H. Iida, R. Fujikawa, R. Kozaki, R. Harada, Y. Hosokawa, K. Ogawara, T. Ohno	原著論文	J. Pharmacol. Exp. Ther., 2020, 373(3), 361-369. "Pharmacokinetic-Pharmacodynamic-Efficacy Modeling of ONO-7579, a Novel Pan-TRK Inhibitor, in a Murine Xenograft Tumor Model"
K. Ueda, T. Nakamura, S. Tanaka, M. Hosokawa, S. Iwakawa, K. Ogawara	原著論文	DMPK, 2020, 35, 124-130. "Incorporation of a bidirectional first-order kinetic parameter for ENT1 transport and Michaelis-Menten parameters for subsequent phosphorylation"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
(シンポジウム、招待講演)Optimization of cancer treatment with nano-DDS formulations	2016年9月	International seminar on pharmacology and clinical pharmacy: Current trend of molecular pharmacology in the drug development and clinical use (Hotel Harris, Bandong, Indonesia)

光増感剤内封ポリマーナノ粒子を用いる抗腫瘍効果決定因子の解析	た光線力学療法におけ 2017年7月 第33回日本DDS学会(みやこめっせ、京都)				
乳癌由来細胞FM3A固形がんモデルマウ 害剤SU5416前 投与によるパクリタキセ 腫瘍効果への影響		2018年5月	第33回日本薬剤学会(グランシップ、静岡)		
(シンポジウム、招待講演)Optimizat treatment with nano-DDS formulation tumor vasculatures to make things v	ns: Knowledge of		The 2nd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceutics (Sookmyung Women's University, Seoul, Korea)		
光増感剤内封ポリマーナノ粒子製剤を 抗腫瘍効果に及ぼす血管新生阻害剤前		2019年3月	日本薬学会第139年会(幕張メッセ、千葉)		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動				
2011年4月~	日本薬剤学会 FG世話人	(2015年より副リーダー, 2019年	F よりリーダー)		
2011年4月~	日本薬剤学会 代議員				
2014年4月~	日本DDS学会 評議員				
2017年4月~	日本薬物動態学会 評議	本薬物動態学会 評議員			
2018年4月~	日本薬学会 近畿支部委				

所属	生命有機化学研究室	職名 教授	氏名 波多野 学				
Ι	教育活動						
	教育実	践上の主な業績	年月日		概		要
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)					
			2020年4月~現在	する基本	「有機化学II」を指導 的事項を習得させる 『などに触れ、学生に	。解説や演習では、	合物の構造・性質・反応に関 生体内の反応や生物活性物質) 取り組んでいる。
			2020年4月~現在	物質の気		本的事項を修得させ	機化合物の分析を目的とする たる。PLQの実施や積極的な議
2	作成した教科書、教	材、参考書	2019年12月~(執筆中)		文化学協会編「現代有 「尾佳亮,中野幸司)」	機合成のための触媒	其反応(編集 檜山爲次郎,野崎
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					
4	その他教育活動上特	記すべき事項	2020年3月		所校の大学訪問を研究 景紹介、簡単な体験実		最新の研究と有機化学の研究
П	研究活動						
1.	著書・論文等						
		氏名	種別			内容	
Manal	bu Hatano, Kohei Toh	n, Kazuaki Ishihara	論文			by Chiral C1-Symm	Reaction of Indoles and metric Bis(phosphoric -9620.

Manabu Hatano, Xue Zhao, Takuya Mochizuki, Kyogo Maeda, Ken Motokura, Kazuaki Ishihara	論文	Reusable Silica-Supported Ammonium BINSate Catalysts for Enantio- and Diastereoselective Friedel-Crafts-Type Double Aminoalkylation of N-Alkylpyrroles with Aldimines. Asian J. Org. Chem. 2021, 10(2), 360-365.
Jie Qi Ng, Hiro Arima, Takuya Mochizuki, Kohei Toh, Kai Matsui, Manussada Ratanasak, Jun-Ya Hasegawa, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Chemoselective Transesterification of Methyl (Meth)acrylates Catalyzed by Sodium(I) or Magnesium(II) Aryloxides. ACS Catal. 2021, 11(1), 199-207.
Hiroyuki Hayashi, Shotaro Yasukochi, Tatsuhiro Sakamoto, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Insight into the Mechanism of the Acylation of Alcohols with Acid Anhydrides Catalyzed by Phosphoric Acid Derivatives. J. Org. Chem. 2021, 86(7), 5917-5212.
Hideyuki Ishihara, Jianhao Huang, Takuya Mochizuki, Manabu Hatano, Kazuaki Ishihara	論文	Enantio- and Diastereoselective Carbonyl-Ene Cyclization-Acetalization Tandem Reaction Catalyzed by Tris(pentafluorophenyl)borane-Assisted Chiral Phosphoric Acids. ACS Catal. 2021, 11(10), 6121-6127.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Multiselective Diels-Alder Reaction Induced by Chiral Supramolecular Lewis Acid Catalysts	2017年・9月	The 8th International Meeting on Halogen Chemistry(HALCHEM VIII)(招待講演)
高活性第四級アンモニウム塩触媒を用いるエステル交換反応	2017年・12月	日本プロセス化学会2017ウィンターシンポジウム (受賞講演)
Development of Chiral Supramolecular Catalysts for		
Multiselective Diels-Alder Reaction	2019年・3月	Asian International Symposium – Organic and Green Chemistry, The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演)
	2019年・3月 2019年・9月	
Multiselective Diels-Alder Reaction Chiral Macrocyclic O-Shaped Catalysts for Enantioselective Addition of Lithium Acetylides to		The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演) The 14th International Conference on Cutting-Edge Organic
Multiselective Diels-Alder Reaction Chiral Macrocyclic O-Shaped Catalysts for Enantioselective Addition of Lithium Acetylides to Simple Ketones マルチ選択的反応を制御するキラル酸塩基協奏型触媒の精密	2019年・9月	The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演) The 14th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (招待講演) 有機合成化学協会関西支部・有機合成夏期セミナー「明日の有機化学
Multiselective Diels-Alder Reaction Chiral Macrocyclic O-Shaped Catalysts for Enantioselective Addition of Lithium Acetylides to Simple Ketones マルチ選択的反応を制御するキラル酸塩基協奏型触媒の精密 設計	2019年・9月	The 99th CSJ Annual Meeting (招待講演) The 14th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (招待講演) 有機合成化学協会関西支部・有機合成夏期セミナー「明日の有機化学

Lanthanum(III) Catalysts for Hi Chemoselective Transesterificat		2016年・6月	International Symposium on Organometallic Chemistry of Rare Earths (招待講演)			
高次選択的Diels-Alder反応を制御 開発	するキラル超分子触媒の	2016年・11月	分子研研究会「若い世代が創る次世代型分子触媒の開発とその展望」 (招待講演)			
Multiselective Diels-Alder Reac Supramolecular Lewis Acid Catal		2016年・12月	The 1st M&M SYNTECH Unit International Meeting 2016 (招待講演)			
Ⅲ 学会等および社会における主力	定活動					
1998年4月~現在に至る	日本化学会会員	日本化学会会員				
2000年4月~現在に至る	有機合成化学協会会員	有機合成化学協会会員				
2000年4月~現在に至る	近畿化学協会会員	近畿化学協会会員				
2003年4月~現在に至る	日本プロセス化学会会員	日本プロセス化学会会員				
2007年4月~現在に至る	アメリカ化学会会員					
2017年4月~2020年3月	先端錯体工学研究会会員	Į				
2010年4月~2012年3月	日本化学会東海支部化学	教育協議会委員				
2012年4月~2016年3月	日本化学会東海支部代議	員				
2015年4月~2018年3月	有機合成化学協会東海支	有機合成化学協会東海支部庶務幹事				
2016年4月~2020年3月	日本プロセス化学会東海	日本プロセス化学会東海支部幹事				
2016年4月~現在に至る	産学研究協力委員会「分	産学研究協力委員会「分子性触媒による高度分子変換技術」第194委員会・メンバー				
2017年4月~2020年3月	有機合成化学協会東海支	有機合成化学協会東海支部幹事				

所属 機能性分子化学研究室 職名 教授	氏名 田中 将史					
I 教育活動						
教育実践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2018年~現在	基礎化學	生実習(1年次後期)			
	2020年~現在	基礎化學	竺(1年次前期、兼担)			
	2016年~現在	物理化学	ዾⅢ(2年次後期、兼担)			
	2017年~現在	生物物理	里化学(3年次前期)			
	2008年~2019年	薬学英語	F入門I(3年次前期)			
	2014年~2016年	物理化学IV (3年次前期)				
	2019年・21年	物理系創薬学特論(大学院博士)				
	2014年・16年	物理系表	基礎創薬学特論(大学院修士)			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
II 研究活動		•				
1. 著書・論文等						
氏名	種別		内名	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		

Takase H., Tanaka M.*, Yamamoto A., Watanabe S., Takahashi S., Nadanaka S., Kitagawa H., Yamada T., Mukai T.	論文	Amyloid 2016, 23 (2): 67–75. "Structural Requirements of Glycosaminoglycans for Facilitating Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
Tanaka M.*, Nishimura A., Takeshita H., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2017, 202: 6–12. "Effect of Lipid Environment on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A"
Tanaka M.*, Kawakami T., Okino N., Sasaki K., Nakanishi K., Takase H., Yamada T., Mukai T.	論文	Arch. Biochem. Biophys. 2018, 639: 9-15. "Acceleration of Amyloid Fibril Formation by Carboxyl-Terminal Truncation of Human Serum Amyloid A"
Takase H., Tanaka M.*, Nakamura Y., Morita S., Yamada T., Mukai T.	論文	Chem. Phys. Lipids 2019, 221: 8–14. "Effects of Lipid Composition on the Structural Properties of Human Serum Amyloid A in Reconstituted High-Density Lipoprotein Particles"
Tanaka M.*, Miyake H., Oka S., Maeda S., Iwasaki K., Mukai T.	論文	Biochim. Biophys. Acta 2020, 1862 (5): 183209. "Effects of Charged Lipids on the Physicochemical and Biological Properties of Lipid-Styrene Maleic Acid Copolymer Discoidal Particles"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
合成高分子を用いたディスク型脂質ナノ粒子の作製と物性評 価	2016年3月	日本薬学会第136年会
AAアミロイドーシス発症に及ぼすグリコサミノグリカン硫酸 基の影響	2016年5月	第63回日本生化学会近畿支部例会
合成高分子を用いたHDL模倣ナノ粒子の作製と生体イメージン グ応用の検討	2016年7月	第26回バイオ・高分子シンポジウム

田中将史

Effect of Carboxyl-Terminal Truncation on Amyloid Fibril Formation of Human Serum Amyloid A		2018年3月	16th International Symposium on Amyloidosis		
AAアミロイドーシス発症の分子基盤の解明		2019年4月	AASAA(AAアミロイドーシスと血清アミロイドA)研究会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1999年3月~現在	日本薬学会正会員	日本薬学会正会員			
2005年8月~現在	日本生化学会正会員	日本生化学会正会員			
2007年2月~現在	日本膜学会正会員				
2007年8月~現在	日本ペプチド学会正会員				
2015年3月~現在	AAアミロイドーシスと」	血清アミロイドA(AASAA)研究会	幹事		

所属	総合教育研究センター	職名 教授	氏名 白木 孝			
Ι	教育活動					
	教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1	1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		2010年9月~2018年2月	ケーショ 棟での初 なか理解	ンに関する実習を行った。 回面談や服薬指導などが実 しにくい部分が多いので、	E次学生に対して、医療現場でのコミュニ 作成した模擬実例課題を用いて、薬局、病 医践できるようにした。教科書などではなか 病院などでの実際の自分の経験を基に、学 た際に役に立つように実習を行った。
			2013年4月~2021年7月	め2012年 1年次学 らが経験	度入学2年次学生も同時開 生が医療倫理について考え むしてきた具体的な事例を多	※次学生(2013年度はカリキュラム変更のた 講)に対して、医療倫理の講義を行った。 る必要性を理解できるよう、臨床現場で自 く紹介し、実際に医療現場で起きているこ まえてみることができるように講義を行っ
			2014年4月~2021年2月	行った。 用されて	6年次学生対象の科目で実 いる機能性食品を具体的に	E次学生に対して、機能性食品学の講義を E務実習も終了しているので、実際によく使 E取り上げ、また臨床現場で問題となり得る とし、より実践的な講義を行った。
			2016年4月~2021年7月	処方箋の 体的な内	見方から始まり、調剤の基	※次学生に対して、調剤学の講義を行った。 ※本的な流れや注意すべき点等について、具 模擬薬局実習を受けるために必要な基本的 た。

	2018年9月~2021年1月	模擬薬原 た。作品 が実践で、病院	3大学薬学部医療薬学科4年次学生に対して、臨床準備教育に相当する 高実習において、医療現場でのコミュニケーションに関する実習を行っ 成した模擬実例課題を用いて、薬局、病棟での初回面談や服薬指導など きるようにした。教科書などではなかなか理解しにくい部分が多いの になどでの実際の自分の経験を基に、学生が病院や薬局での実務実習に そに役に立つように実習を行った。
	2018年12月~2019年12月	行った。 ルスに対	多大学薬学部医療薬学科6年次学生に対して、先端薬物療法論の講義を 肝移植後の薬物療法について、免疫抑制剤などの使用法や、肝炎ウイ けする薬物治療など、現場で実際に行われている薬物療法を、病院での 経験に基づいて講義を行い、学生にとっても臨場感のあるものとなるよ うた。
2 作成した教科書、教材、参考書			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項			
Ⅲ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
2. 学会発表			
演題名	発表年・月		学会名
簡易懸濁法適用が難しい抗HIV薬の懸濁液の調製について	2019年11月		日本医療薬学会第29回年会

Ⅲ 学会等および社会における主な	活動
2013年4月~現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員
2014年4月~現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員
2016年6月~2018年5月	兵庫県薬剤師会理事
2017年6月~現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構運営委員、事務局長補佐
2018年6月~現在	兵庫県薬剤師会薬学教育部副委員長
2018年8月~現在	病院・薬局実務実習近畿地区調整機構 WEBシステム検討作業部会委員

所属 薬学部	職名	教授	氏名 岩川 精吾				
I 教育活動			1				
教育実	践上の主な	業績	年月日		概		要
1 教育内容・方法の工	夫(授業評	革価等を含む)					
実習テキスト(実務実習事前	方教育、薬剤	学・製剤学実習)の改訂	2009年4月~2018年3月	実務実習	事前教育(-13年まで)	、薬剤学・製剤学実	習(14年-) 実習書の毎年改訂
大学院特論プリントの毎年の)改訂		2006年4月~2018年3月	最新の学	術知見を盛り込んで講	奏用プリントを毎年 身	更新
2 作成した教科書、教	材、参考書	1					
3 教育方法・教育実践	 に関する発	表、講演等					
4 その他教育活動上特	記すべき事	項					
神戸薬科大学教務部長			2006年4月~2010年3月				
神戸薬科大学大学院薬学研	究科主幹		2010年4月~2013年3月				
神戸薬科大学副学長			2013年4月~2018年3月				
兵庫県立大学看護学部で臨	床薬理学を	講義	2006年10月~2020年12月	月 看護学専攻学生に薬物治療について安全性面を含めて講義			めて講義
兵庫県立大学看護学部で薬	理学を講義	a de la companya de l	2018年4月~2020年9月	看護学專	厚攻学生に薬理学を講義		
甲南女子大学医療栄養学部	で薬理学を	講義	2018年4月~2020年9月	医療栄養	長学専攻学生に薬理学を	講義	
Ⅱ 研究活動							
1. 著書・論文等							
	氏名		種別			内容	
Hosokawa M., Goto K., T Ogawara K.I.	anaka S.,	Ueda K., Iwakawa S.,	論文			for hydrophilic n	3-1237. "Optimization of nucleic acids using mixed- rl columns."

Hosokawa M., Tanaka S., Ueda K., Iwakawa S., Ogawara K.I.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2019, 509(1), 249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells with intrinsic resistance to decitabine."
Tatsumi A., Inoue S., Hamaguchi T., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41 (2) , 277-284. "The effect of ethanol on the hydrolysis of ester-type drugs by human serum albumin."
Ueda K., Masuda A., Fukuda M., Tanaka S., Hosokawa M., Iwakawa S.	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017, 32(6), 301-310, "Monophospholylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells"
Hosokawa M., Tanaka S., Ueda K., Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40 (12), 2199-204. "Different schedule-depedent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
デシタビンとオキサリプラチン併用効果の増強におけるDNA損傷 応答経路の関与	2020年3月	日本薬学会第140年会
大腸がん細胞におけるオキサリプラチン感受性に及ぼすボリノス タットの影響	2020年3月	日本薬学会第140年会
神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基 づく研修プログラム受講者の調査	2019年3月	日本薬学会第139年会
DNAメチル基転移酵素阻害剤デシタビンに対する耐性を改善する物質の探索	2019年3月	日本薬学会第139年会
ヒト大腸がん細胞におけるオキサリプラチン感受性を決定する microRNAの探索	2019年3月	日本薬学会第139年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

岩川

2000年4月~2017年12月	日本薬学会近畿支部委員
2005年4月~2018年12月	日本医療薬学会委嘱指導薬剤師

所属 薬学部	職名 教授	氏名 畑 公也				
I 教育活動						
教育実	年月日		;	概	要	
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)					
ドイツ語		1981年〜現在に至る	「読む」「書く」「聞く」「話す」の総合的なドイツ語運用能力の養成を 授業中にできるだけ多くの口頭、筆記による練習を行うことによって技能 図っている。			
教養リテラシー		2006年〜現在に至る	総合文化演習のプレトレーニングとして、日本語の読み書き能力の涵 グループによるディスカッションとプレゼンテーションの訓練を行っ			
総合文化演習		1995年〜現在に至る	ている。		レポート作成に際	ーマに小グループによる演習を行っ そし、学生の自発性を尊重し、積極性
講義「現代の音楽」		2006年~2019年	アンケートやインタビューによって学生の意見を聞き、その結果を授業に反せることにより、双方向的な教育を行っている。			
早期体験学習		2008年~現在に至る	新入生の)薬学学習に対する	モチベーションを高	Sめるための実習を指導している。
2 作成した教科書、教	材、参考書					

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			小山淳子、中平典子、畑公也、児玉典子「神戸薬科大学図書館における 学習支援に向けた活動について」(Libra 2015, 15, 95-107)			
			于自义12	友(こlg)() /こf白野/(こ フV・C] (LID	11a 2015, 15, 55 101)	
4 その他教育活動上特記すべき事項		2012年~2016年 図書館長]書館長の業務に従事。		
Ⅲ 研究活動			1.			
1. 著書・論文等						
氏名		種別			内容	
畑 公也		研究ノート		Libra 2016, 16,1-17(3月発行) 楽』」	「『環境音楽』、または『環境』と『音	
2. 学会発表						
演題名		発表年・月			学会名	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動					
1978年~現在に至る	日本独文学会会員					
1978年~2019年	阪神ドイツ文学会会員					
1978年~現在に至る	大阪大学ドイツ文学会会員					
1978年~現在に至る	オーストリア文学会会員					
2007年~現在に至る	日本ポピュラー音楽学会会員					

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 濵口 常男	
I 教育活動		<u> </u>
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2010年4月~現在に至る	4年次生の薬事関係法規・薬事制度の講義を担当している。毎回配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。
	2010年4月〜現在に至る	4年次生の実務実習事前教育実習を担当している。実習開始時での講義では、実習テキスト及びパワーポイントを利用し、医療人として醸成すべき態度、実習の目的及びその内容を説明している。SDGを組み入れた実習では、病院・薬局の指導薬剤師をタスクとして参加させて、医療における薬剤師業務の重要性の理解を深めさせるようにしている。また、調剤実習では、調剤技能の習得の徹底を図るため、病院・薬局の指導薬剤師に参加してもらい、医療現場の臨場感と緊張性のある実習を目指している。また、各調剤台を頻繁に見回り、調剤の手技が正しく適正に行われるように点検している。調剤技能の評価については、実習生2人づつのグループで実習を行い、互いに相手の調剤技能を評価させることにより、調剤技能の確実な習得を目指している。
	2010年10月~現在に至る	4年次生の安全管理医療の講義を担当している。プリントを配布し、適時パワーポイント及びDVDを利用している。
	2011年4月〜現在に至る	6年次生の処方解析学、処方解析演習を担当している。処方解析学では配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。処方解析演習では演習問題を配布し、その解説はパワーポイントを利用している。
	2011年10月〜現在に至る	6年次生の薬学総合講座を担当している。薬学総合講座では法規・制度の講義を担当し、教科書および薬剤師国家試験過去問題のプリントを利用している。
	2012年4月〜現在に至る	6年次生の薬学総合講座(再履修生)を担当している。薬学総合講座では法規・制度の講義を担当し、教科書および薬剤師国家試験過去問題のプリントを利用している。
	2018年10月〜現在に至る	4年次生の処方解析Ⅱを担当している。配布するプリント並びに適時パワーポイントを利用している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
病院・薬局実務実習 I 病院・薬局に共通な薬剤師業務	2007年4月	医薬品情報の収集、分析、評価、加工及び提供について解説した。 (東京化学同人,日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会・日本医療薬学会 編)

計算実践トレーニング帳	2009年1月	OSCEおよび臨床実習に対応した計算能力の向上について解説書した。 化学同人,前田初男 編)			
わかりやすい薬事関係法規・制度第5版	2021年4月	薬事関係法規・制度について解説した。 (廣川書店, 神村英利, 田中大三 編)			
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
一般市民講座	2010年4月24日	神戸薬科	斗大学市民公開講座		
一般市民講座	2012年3月6日	神戸市港	芝眼大学		
4 その他教育活動上特記すべき事項					
なし					
Ⅱ 研究活動		•			
1. 著書・論文等					
氏名	種別		内容		
Akitoshi Tatsumi, Masaya Okada, Yoshihiro Inagaki, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文		Biol. Pharm. Bull., 2016, 39(8), 1364–1369. "Differences in Esterase Activity to Aspirin and p-Nitrophenyl Acetate among Human Serum Albumin Preparations"		
竹下治範, 井上知美, 高瀬尚武, 波多江 崇, 室井延之, 濵口常男	論文		医薬品情報学,2017, 18,270-276. 「副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価」		
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濵口常男	論文		医薬品情報学, 2018, 20, 98-103.「PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響」		
Akitoshi Tatsumi, Sachiyo Inoue, Tsuneo Hamaguchi, Seigo Iwakawa	論文		Biol. Pharm. Bull., 2018, 41 (2), 277-280. "The Effect of Ethanol on the Hydrolysis of Ester-Type Drugs by Human Serum Albumin"		
濵口常男	著書		廣川書店, 2021, 3-5.「わかりやすい薬事関係法規・制度第5版(神村英 利, 田中大三 編)」		
2. 学会発表					
演題名	発表年・月	月 学会名			
エルロチニブによる間質性肺疾患発症メカニズムの解明	2016年3月		日本薬学会第136年会		

			·		
PTP 包装からの錠剤の押し	出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会		
有害事象自発報告データベ 炎(NASH)の原因薬剤の探索	ースを用いた非アルコール性脂肪肝	2016年3月	日本薬学会第136年会		
PTP包装からの錠剤の押し 膜厚の影響	出し力に及ぼすフィルムの素材及び	2018年3月	日本薬学会第138年会		
高湿度下における市販錠剤 違について	の重量と硬度に及ぼす包装素材の相	2019年3月	日本薬学会第139年会		
■ 学会等および社会にお	ける主な活動				
2002年4月~2004年3月	兵庫県病院薬剤師会理事				
2003年1月~2007年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第03-018	85号			
2004年4月~2010年3月	兵庫県病院薬剤師会常任理事				
2006年4月~2012年3月	兵庫県薬剤師会理事				
2006年4月~2010年1月	日本病院薬剤師会代議員				
2008年1月~2012年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第08-03-	-0185号			
2008年1月~2012年12月	日本医療薬学会認定薬剤師制度 指導	尊薬剤師 第08-08-1013号			
2008年4月~2010年1月	日本病院薬剤師会代議員会議事運営	委員			
2008年4月~2010年3月	日本病院薬剤師会近畿ブロック薬剤	業務委員会委員			
2008年4月~2012年6月	日本病院薬剤師会近畿ブロック事務				
2010年3月~現在に至る	薬学教育協議会病院・薬局実務実	習近畿地区調整機構委員会委員			
2010年4月~2012年3月	兵庫県病院薬剤師会理事				
2012年4月~現在に至る	兵庫県病院薬剤師会監事				
2012年4月~2019年3月	兵庫県薬剤師会薬学教育部委員				
2013年1月~2017年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第13-03-0185号				
2013年1月~2017年12月	日本医療薬学会認定薬剤師制度 指導	尊薬剤師 第13−08−1014号			
2016年4月~2018年3月	兵庫県薬剤師会大学支部長				

濵口

2018年1月~2022年12月	日本医療薬学会認定薬剤師 第18-03-0185号		
2018年1月~2022年12月	日本医療薬学会認定薬剤師制度 指導薬剤師 第18-08-1014号		
2019年4月~現在に至る	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習近畿地区調整機構委員会委員長		
2019年5月~現在に至る	薬学教育協議会 WEBシステム検討委員会委員		
2019年7月~現在に至る	薬学教育協議会 病院・薬局実務実習中央調整機構委員会委員		

所属	薬学部	職名	教授	氏名 松家 次朗					
I \$	教育活動	Į.							
	教育実	践上の主な	2業績	年月日			概	要	
1	1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		2002年4月~2010年3月	景と考え	14 47 74 17 11 1		を担当し、生命倫理 里についても講義を行	. ,,,	
				2002年4月~2020年3月		生医学系大学院にお 生を講義する。(え		寺論」を担当し、主に	医療専門職
				2006年4月~	命につ2015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015年度 1015	他の基本的な考え大 に講義を行う。(た により新カリに移行 が規範の基本的構造 はの問題)を取り が種々の倫理的・社 2020年3月で終了 25年度より「総合	7を論じ、さらに、B ただし、2013年4月。 テし、廃止)「現代を きを具体的問題(201 り上げながら講義する 社会的問題(2015年月)を取り上げながら 文化演習」に名称変	背景と基本的な事例を 医療専門職として別の薬 より「社会薬学」Ⅱの 社会論」では、定常化 5年度からな、定常化 5。「医療と人間」で 度からは、生命倫理学 講義を行う。「総合ご 更)では、現代医療行	剤師の倫理 神の構義におまれる は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、
				2008年4月~	りあげ、 (平成20	・	-も援用しながら講	侖理における主要問題 毚を行う。「総合文化 侖理的問題をテーマと う。	演習」Ⅱ
				2010年4月~	大学院修	芸士課程において医	薬品研究開発特論共	:同担当し、講義を行う。	
				2012月4月~	/ - 4 1/ -/1	経学研究科薬学専攻 命倫理について講	*, *	薬学研究基盤形成」(オ	ムニバス形

	2013年4月~	み方、論	ラシー」において発表、調査、レポートの書き方(2015年度からは主に本の読点のまとめ、キーワード探索等の)指導を行う。神戸大学医学部(医学科・保との合同初期体験実習の指導を行う。(初期体験実習は、2020年3月まで)
	2016年4月~2020年3が~	社会科学	学研究室ゼミ(卒業研究 I・II・III)の指導を始める。
	2016年9月~2020年3月	2年生後	期科目として医療コミュニケーション演習を始める。
	2017年9月~	3年生後	期科目として医療倫理学演習を始める。SGDによるケーススタディ。
2 作成した教科書、教材、参考書	2015年3月	共著	『薬剤師になる人のための生命倫理と社会薬学』(法律文化社)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005年4月~2007年4月	早期体験 指導する	学習の担当委員の一人となり新入生全員を対象とした早期体験学習を
	2013年4月~		(同上)
	2015年3月17日		早期体験の一環として救命救急講習が組み込まれたため、神戸市の応 及員(救急インストラクター)の認定を受ける。
Ⅱ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
松家次朗	翻訳		ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義(承前)(神戸薬 科大学研究論集Libra第16号、2016年3月)

松家次朗	翻訳	改訳:クリスティアン・ヴォルフ「哲学一般についての予備的叙説」山本 道雄著『ドイツ啓蒙の哲学者クリスティアン・ヴォルフのハレ追放顛末記 ードイツ啓蒙思想の一潮流 2―』所収。Pp. 129-255. (晃洋書房、2016 年8月)
松家次朗	翻訳	ジョン・グレゴリー「医師の義務と資格にかんする講義(承前) (神戸薬 科大学研究論集Libra第17号、2017年3月)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		1

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 奥川 斉	
I 教育活動		
教育実践上の主な業績	年月日	概 要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		4年次の実務実習事前学習 漢方医学
		5年次の学外実務実習
		6年次のIPW実習
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年6月27日	自然と漢方 健康サポートセミナー (神戸) 講演
	2016年10月23日	漢方 up to date 東洋医学会関西支部例会 (神戸) 講演
	2017年1月24日	漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ (西宮)講演
	2017年2月12日	高齢者と漢方 神戸薬科大学同窓会京都支部講演会 (京都) 講演
	2017年7月2日	がん医療と漢方 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会 (徳島)講演
	2017年7月23日	高齢者と漢方 京都女子薬剤師会講演会 (京都)講演
	2018年1月24日	漢方の不思議であたりまえのこと シニアカレッジ (西宮)講演
	2018年7月8日	小児における漢方薬神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会 (徳島)講演
	2018年10月1日	漢方と養生 第13回健康サポートセミナー (神戸) 講演
	2019年1月23日	漢方と養生 シニアカレッジ (西宮)講演
	2019年6月23日	夏かぜ・夏バテと漢方 神戸薬科大学同窓会山口支部講演会 (山口)講演
	2019年7月28日	痛みと漢方薬 神戸薬科大学同窓会徳島支部講演会 (徳島)講演
	2020年1月14日	漢方と養生 シニアカレッジ (宝塚)講演
	2021年1月12日	漢方と養生 シニアカレッジ (宝塚)講演
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月~現在	エクステンションセンター 健康食品講座企画委員

II 研究活動							
1. 著書・論文等							
氏名		種別		内容			
2. 学会発表							
演題名		発表年・月		学会名			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動						
1973年4月~現在	日本東洋医学会会員						
1973年5月~現在	日本生薬学会員						
1980年4月~現在	980年4月~現在 日本薬学会会員						
2011年3月~現在 日本臨床腫瘍学会会員							
2017年10月~現在 兵庫県立こども病院 治験審査委員会外部委員							
2020年2月~現在	兵庫県薬事審議会委員						

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 河本 由紀子				
I 教育活動					
教育実践上の主な業績	年月日	年月日			要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2016年4月~	実務実習事前学習			
		学外実務	務実習		
		総合薬学	芦		
	2018年4月~	早期体験	食学習		
2 作成した教科書、教材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
Ⅱ 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名	種別			内容	

2. 学会発表					
演題名		発表年・月	学会名		
兵庫県中小病診対策部活動報告	兵庫県中小病診対策部活動報告		第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会		
神戸市立医療センター中央市民病院におけるトレーシングレポート運用の現状と課題		2019年1月	第40回日本病院薬剤師会近畿学術大会		
薬学実務実習生における薬剤師連携の学習としての服薬情報 提供書(トレーシングレポート)に関する検討		2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会		
兵庫県中小病診対策部活動報告		2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会		
トレーシングレポートを介した双方向は 師連携のアウトカム検証	の情報提供による薬剤	2020年10月	日本医療薬学会年会第30回年会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動		•		
2000年4月~2016年3月	日本病院薬剤師会代議員	<u> </u>			
2004年4月~2016年3月	兵庫県薬剤師会病診支部長				
2004年4月~2020年5月	兵庫県病院薬剤師会副会				
2012年4月~2016年3月 日本病院薬剤師会療養病床委員会委員					
2012年4月~2020年5月	兵庫県薬事協会理事				
2014年4月~2020年5月	日本病院薬剤師会近畿	ブロック中小病診委員会委員			

所属 地域連携サテライトセンター	職名 教授	氏名 高尾 宜久			
I 教育活動					
教育実	年月日		概	要	
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)	2018年4月~現在	4年生を	対象に「地域医療・プライマ」	リケア論」を担当している。
		2018年4月~現在	4年生を	対象に「在宅医療」を担当して	ている。
		2019年4月~現在	5年生を	対象に「在宅医療演習」を担当	当している。
2 作成した教科書、教	材、参考書				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特	記すべき事項	2007年6月~2013年7月	認定実務	5実習指導薬剤師養成ワークシ	ョップタスクフォース
				ンションセンター事業統括委	員会委員
				f企画委員会委員 	
		2017年4月~現在に至る	生涯研修	等事業委員会委員	
Ⅱ 研究活動					
1. 著書・論文等					
	氏名	種別			内容
髙尾宜久、麻生美樹、増本	憲生、南幸栄、岩川精吾	論文	日本医療マネジメント学会雑誌第17巻第3号,2016.「転倒転落 論文 の新たな予測指標としての夜間12時間活動量と日中歩数との比 討」		

2. 学会発表				
演題名		発表年・月	学会名	
神戸薬科大学地域連携サテライトセンターにおける健康サポートセミナー		2018年3月	日本薬学会 第138年会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動 •			
1995年6月~2012年3月	日本病院薬剤師会 生活	王教育認定薬剤師		
1999年4月~現在に至る	日本薬剤師研修センター	- 認定薬剤師		
1999年5月~現在に至る	神戸市応急手当普及員	(救急インストラクター)		
2003年12月~現在に至る	日本医療薬学会会員			
2004年5月~2006年5月	兵庫県病院薬剤師会評詞	義員		
2004年12月~現在に至る	日本医療マネジメント学会会員			
2007年10月~2010年5月	兵庫県病院薬剤師会伊州	丹支部支部長		
2008年11月~2016年3月	日本病院薬剤師会 実績	务実習指導薬剤師認定		
2008年4月~2010年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	F		
2010年3月~現在に至る	日本薬剤師研修センター	- 認定実務実習指導薬剤師		
2010年4月~2016年3月	兵庫県病院薬剤師会常何	壬 理事		
2010年4月~2016年3月	兵庫県薬剤師会 医療保険部委員			
2010年4月~2017年3月	武庫川女子大学非常勤講師			
2012年3月~現在に至る	公認スポーツファーマシスト			
2014年4月~現在に至る	一般社団法人薬学教育評価機構 評価実施員			
2015年12月~現在に至る	日本アンガーマネジメントファシリテーター			

2016年2月~現在に至る	日本老年薬学会会員	
2016年2月~現在に至る	キャラバンメイト・認知症サポーター	
2016年3月~現在に至る	ユマニチュード入門研修終了者	
2017年4月~現在に至る	東灘区薬剤師会理事	
2017年2月~現在に至る	日本アンガーマネジメントキッズトレーナー	
2017年9月~現在に至る	禁煙指導認定薬剤師	
2018年5月~現在に至る	神戸市薬剤師会理事	
2018年5月~現在に至る	コグニサイズ指導者	
2021年4月~現在に至る	社会福祉法人すこやか会幼保連携型認定こども園甲南すこやかこども園 学校薬剤師	
2021年4月~現在に至る	一般社団法人日本口腔ケア学会 薬剤師部会委員・評議員	

	metals for the local	r b = 11. ++-				
所属 総合教育研究センター	職名 教授	氏名 福井 英二				
I 教育活動						
教育実践	浅上の主な業績	年月日		概	要	
1 教育内容・方法の工	夫 (授業評価等を含む)	2017年4月~現在に至る	4年次生	の実務実習事前教育		
		2017年4月~現在に至る	5年次生	の学外実務実習		
		2017年12月~現在に至る	6年次生	の総合薬学講座		
		2018年4月~現在に至る	1年次生	の早期体験学習		
		2019年10月~現在に至る	5年次生	DIPW演習		
		2020年4月~現在に至る	6年次生	のがん薬物療法論		
2 作成した教科書、教	材、参考書					
3 教育方法・教育実践(に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特		2019年4月〜現在に至る	がん専門	医療人材(がんプロフェッ	ショナル)養成プラン	実習コーディネーター
Ⅱ 研究活動						
1. 著書・論文等			_			_
	氏名	種別			内容	

2. 学会発表			
演題名		発表年・月	学会名
薬剤師が入院前常用薬の有害事象を検	討する重要性	2016年・5月	第19回日本臨床救急医学会総会・学術集会2016
認知症・せん妄サポートチームの現状 ついて	と薬剤師の取り組みに	2016年・9月	第26回日本医療薬学会年会
Successful management of treatment- with Daikenchuto during the anti-ca in a patient with Down syndrome		2016年・12月	第58回日本小児血液・がん学会学術集会
ニボルマブの糖尿病・内分泌系疾患検 調査(後視的コホート研究)	査状況に関する単施設	2016年・12月	第57回日本肺癌学会学術集会
直接作用型経口抗凝固薬(DOAC)の適正	使用状況調査	2017年・3月	第81回日本循環器学会学術集会
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
1981年5月~現在に至る	日本病院薬剤師会会員		
1998年9月~現在に至る	日本医療薬学会会員		
2000年2月~現在に至る	日本臨床栄養代謝学会会		
2003年3月~現在に至る	日本クリニカルパス学会	会員	
2004年11月~現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員		
2005年8月~現在に至る	日本癌治療学会会員		
2012年4月~2016年5月	兵庫県病院薬剤師会理事		
2013年5月~現在に至る	日本薬剤師会会員		
2014年4月~2016年3月	日本病院薬剤師近畿ブロック薬事制度委員会委員		
2014年6月~2016年5月	兵庫県薬剤師会薬局経営部委員		

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 山本 克己					
I 教育活動						
教育実践上の主な業績	年月日	概 要				
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)	2017年4月~現在	4年次の実務実習事前教育				
	2017年4月~現在	5年次の学外実務実習				
	2017年4月~現在	6年次の総合薬学講座				
	2018年4月~現在	5年次・6年次の病院(2施設)における卒業研究を担当				
	2019年4月~現在	4年次の処方解析学Ⅱ並びに6年次処方解析学を担当				
2 作成した教科書、教材、参考書						
薬学生のための病院・薬局実務実習テキスト 2010年版 〜2018年版(各年改訂)(じほう)	2010年~2018年	「計数・計量調剤」の項を執筆				
研究倫理審査申請準備ガイド (日本薬剤師会 臨床・疫学研究推進準備委員会)	2018年3月	研究計画書の記載方法について監修				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 臨床・基礎薬学連携シンボジウム(主催 神戸薬科大 学) 「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育のあり方」	2018年10月	演題:「臨床から基礎までをつなぐ新しい薬学教育を目指して」				
4 その他教育活動上特記すべき事項						
大阪薬科大学 特任・招聘教授	2009年4月~2015年3月	病院実習導入講義(注射剤混合調製)				
近畿大学薬学部 実務実習評価連絡会議 委員	2010年4月~2016年3月	病院・薬局実務実習指導者による評価の妥当性の検証				
Ⅱ 研究活動						
1. 著書・論文等						

氏名	種別	内容
村田久枝, 寺本有里, 秋田幸子, 北口剛吉, 大井美和, 藤尾みどり, 山本克己	論文	新しい注射剤調剤・供給システムにおける調剤済み注射剤の返却減少 効果の評価,大阪警察病院医学雑誌(査読あり),32,26-34(2016)
小林政彦,但馬重俊,山本克己,村田久枝,石倉久美子,真 常美紀,吉良俊彦,谷本祐子,木下里紗,辻井佳代,堀越博 一,守島繁昭,前田恵治,隠岐尚吾	論文	大阪市天王寺区における5病院と保険薬局の連携〜疑義照会項目における統一の効果と課題〜、日本薬剤師会雑誌、70(3)、27-32、(2018)
辰見明俊,前川裕希,小森由理子,山本克己,濵口常男,高 橋一栄,國正淳一	論文	ニボルブマブによる重篤な免疫関連有害事象の発現予測因子としての 好中球・リンパ球比および血小板・リンパ球比の有用性, 医療薬学、 46(6), 331-339, (2020)
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
"間違わせない仕組み"の導入による医療安全強化と業務の 効率化	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
採用薬剤の適正使用に関わる電子カルテ薬剤マスタ管理の重 要性	2017年2月	第38回日本病院薬剤師会 近畿学術大会
高齢者の睡眠導入剤投与における転倒・転落事故対策とクリ ニカルパス活用効果	2017年3月	第10回日本医療マネジメント学会 大阪支部学術集会
大阪警察病院におけるクレーム対応について〜当院における コードホワイト〜	2017年3月	第10回日本医療マネジメント学会 大阪支部学術集会
免疫チェックポイント阻害剤ニボルマブによる免疫関連有害 事象発現予測因子の探索	2019年6月	日本医療薬学会 第3回フレッシャーズ・カンファランス
3. その他		
講演名	発表年・月	会の名称
学校薬剤師の研究活動における今後について	2018年3月	平成29年度第2回大阪府薬剤師会学薬部会 学校薬剤師研修会
無菌調製の基礎知識	2019年9月	令和元年度 大阪府薬剤師会 無菌調剤室利用者研修会 I
ポリファーマシーに関する対策について	2020年1月	高槻市薬剤師会 『薬薬連携を通してポリファーマシー!』研修会
薬剤師における臨床研究の実際	2020年2月	大阪府薬剤師会 令和元年度学術研究倫理に関する研修会

薬物療法の現状と展望-薬剤の分類	薬効、副作用など- 2020年2月 日本臨床衛生検査技師会 令和元年度認定認知症領域検査技師日臨技指 定講習会					
Ⅲ 学会等および社会における主な活動						
2008年4月~現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 理事 (2010年4月~2016年6月 副会長)					
2018年6月~現在	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 顧問					
2017年6月~現在	公益社団法人 臨床心臓病学教育研究会(JECCS) 理事					
2017年6月~現在	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会 審査委員					
2011年7月~現在	大阪府献血推進協議会 適正使用対策部会 委員					
2016年9月~現在	公益社団法人 日本薬剤師会 臨床·疫学研究推進委員会 委員					
2017年3月~現在	一般社団法人 大阪府薬剤師会 学術研究倫理審査委員会 委員長					
2008年4月~2016年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 理事(2010年4月~2016年6月 副会長)					
2016年7月~2018年6月	一般社団法人 大阪府病院薬剤師会 監事					
2008年4月~2018年3月	公益社団法人 日本薬剤師会 代議員					
2010年4月~2014年3月	一般社団法人 日本病院薬剤師会 代議員					
2011年5月~2017年3月	大阪府社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会選考協議会 委員					
2015年8月~2018年5月	大阪府地域職域連携推進協議会 NCD対策検討部会 委員					
1980年~現在	日本薬学会 会員					
2006年~現在	日本医療薬学会 会員					
2020年~現在	日本医薬品情報学会 会員					

所属 総合教育研究センター 職名 教授	氏名 國東 ゆかり					
I 教育活動						
教育実践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2021年4月~現在	1年次の				
		4年次の	実務実習事前学習,処方解析1			
			学外実務実習			
		6年次€	総合薬学講座			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
Ⅲ 研究活動						
1. 著書・論文等						
氏名	種別		内容	容		
垣尾尚美 ,植木 彩 ,鹿島彩絵 ,瀬川和子 ,今村真也 , 足立厚子 ,鈴木拓也 ,	論文		メシル酸イマチニブにより紅斑型薬 感作療法にて継続が可能となった巨 医療薬学雑誌,42(6),453-459, (201	大直腸GISTの1例		

2. 学会発表					
演題名		発表年・月	学会名		
ブリナツモマブを安全に投与するため	のレジメン登録	2019年10月	第57回日本癌治療学会学術集会		
HIV 感染品胎妊婦の母子感染予防にジ した経験	ドブジン注射剤を使用	2019年11月	第29回日本医療薬学会年会		
乳がん患者 EC 療法におけるアプレピ の副作用予防効果の比較	タントとオランザピン	2020年2月	第41回日本病院薬剤師会近畿学術大会		
心不全チームと緩和ケアチーム連携後の末期心不全患者にお ける呼吸困難緩和に対するモルヒネの使用実態調査		2020年7月	第84回日本循環器学会学術集会		
薬剤師によるirAE対策の遵守確認介入前後におけるフォロー 件数の単施設後視的比較検討		2020年10月	第30回日本医療薬学会年会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活	 動		•		
1983年4月~現在に至る	日本病院薬剤師会会員				
1983年4月~現在に至る	日本薬剤師会会員				
2008年8月~現在に至る	日本臨床腫瘍学会会員				
2008年8月~現在に至る	日本癌治療学会会員				
2008年8月~現在に至る	日本医療薬学会会員				
2011年2月~現在に至る	日本臨床腫瘍薬学会会員				
2017年4月~2021年3月	兵庫県病院薬剤師会理事	<u>.</u>			

所属 総合教育研究センター 職	名 准教授	氏名 山野 由美子				
I 教育活動						
教育実践」	上の主な業績	年月日		根	光	要
1 教育内容・方法の工夫	(授業評価等を含む)	1985年4月~現在に至る				り理解を深められるよう討議? 介して解説している。
		1985年4月~2021年6月	仕方、研	研究の進め方、文献の 告書を作成させ、卒	の読み方など、基本だ	実験操作法、実験ノート作成のからの指導を行った。また、デントを用いて口頭発表を行わけ
		2004年4月〜現在に至る	り化学反			を行っている。電子の動きに。 に、電子の動きを中心に冊子に
		2007年10月~2019年	理解度をり、スラ	アチェックできるよ	う工夫した。2019年 を行った。削減できる	た。練習問題を解かせ、学生/ 度は、スライドプリントを配 た黒板に書く時間分を、反応셔
		2017年10月~現在に至る	所を教科 2020年度	斗書から抜き出し、 をからは、生物有機(プリントに要点をま	ときれていない重要と思われるとめて、講義を行った。 とめて、講義を行った。 。生体成分の性質や反応を化学
		2009年10月~2017年3月	化学VIIと 習った有 とを意識	: 称した)の講義を行 育機化学がどのように 戦し、基本的な反応:	行っていた。医薬品で に応用されているかり	合成化学」(2016年度まで有材 合成を例として、これまでに 解説した。CBT受験前であるこ めた。また、教材冊子の中に た。

	2009年10月~2015年3月	体成分 <i>0</i> を書き、	Eに対する授業科目として、「生物有機化学」の講義を行っていた。生 D性質と反応を有機化学的に理解できるよう、黒板にできるだけ構造式 どの官能基がどのように反応するのか解説した。また、要点をまとめ E作成し、教科書のページ数も記載して、自主学習しやすいよう工夫し
2 作成した教科書、教材、参考書	2009年~2015年		有機化学」の教材作成:生体成分の性質と反応を有機化学的に理解でき 要点にまとめた。
	2009年~2018年		有機合成化学」の教材作成:これまでに習った有機化学の知識で理解で 薬品合成例と、スペクトルを冊子にまとめた。
	2009年~2019年	「有機们	上学系Ⅲ実習書」の作成
	2020年~現在	「合成们	と学1」の教材作成
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
神戸薬科大学FD	2020年10月	る	、た入学試験並びに修学状況のIR分析結果の報告と前期遠隔授業に対す 、ケートの集計結果について
4 その他教育活動上特記すべき事項 なし			
Ⅱ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
Yamano Y., Nishiyama Y, Aoki A., Maoka T., Wada A.	論文		Tetrahedron 2017, 73, 2043-2052. "Total synthesis of lycopene-5,6-diol and gamma-carotene-5',6'-diol stereoisomers and their HPLC separation"
Yamano Y., Sasaki H., Wada A.	論文		Chem. Pharm. Bull. 2017, 65, 940–944. "Versatile Amine-Promoted Mild Methanolysis of 3,5-Dinitrobenzoates and Its Application to the Synthesis of Colorado Potato Beetle Pheromone"

Yamano, Y., Masumoto, M., Takaichi, S., Wada, A.	論文	Tetrahedron 2018, 74, 1533-1539. "Total synthesis of myxol and deoxymyxol stereoisomers and their application to determining the absolute configurations of the natural products"
Takatani, N., Kono, Y., Beppu, F., Okamatsu-Ogura, Y., Yamano, Y., Miyashita, K., Hosokawa, M.	論文	Bichem. Biophys. Res. Commun. 2020, 528, 305-310. "Fucoxanthin inhibits hepatic oxidative stress, inflammation, and fibrosis in diet-induced nonalcoholic steatohepatitis model mice"
Tsuboi, M., Iwasaki, H., Kaya, K., Wada, A., Yamano, Y.	特許	Jpn. Tokkyo Koho (2020), JP 6696060 B1 20200520. "Vitamin A derivative and method for the preparation thereof"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
3,5-ジニトロベンゾイル基のアミンによる温和なメタノリシ スとCBP-フェロモン合成への応用	2018年3月	日本薬学会第138年会
Siphonaxanthinおよびloroxanthinの全合成	2019年9月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム
光学活性 α-カロテンの合成とHPLCによるエナンチオマー分離 条件の確立	2019年9月	第33回カロテノイド研究談話会
Fucoxanthin酸化代謝物の合成と抗炎症効果	2020年3月	日本薬学会第140年会
β-Carotene由来アポカロテノイドによる炎症抑制機構	2020年11月	日本油化学会第59回年会
3. その他		•
ヒドロキシメチルカロテノイドの全合成研究	2020年12月	大阪市立大学 人工光合成研究拠点共同利用・共同研究成果報告会 での 講演
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		•

1983年1月~現在に至る	日本薬学会会員
1986年1月~2020年12月	日本ビタミン学会会員
1995年1月~現在に至る	日本カロテノイド研究会会員
2002年4月~現在に至る	有機合成化学協会会員
2014年10月~2020年12月	近畿化学協会会員

所属	中央分析室	職名 准教授	氏名 竹内 敦子				
I 孝							
	教育実施	践上の主な業績	年月日			概	要
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)					
			2018年8月~2020年12月	析も演習	形式で行い、理解	翼を深める講義を行った	
			2017年9月~2020年12月	分析化学 ために必	:III(新カリ)(三要な分析法を習	分担)を担当した。薬: ぬさせることを目的とし	学研究で生体分子を解析する て講義を行った。
				門IIの講解析する た。3年 然科学の	議を担当した。5 方法としての質量 欠前期で担当する 9分野で必要とされ	分析化学III(旧カリ)・ 量分析法を習熟させるこ 薬学英語入門Ⅰでは、医	薬学英語入門I、薬学英語入 -構造解析学では、生体分子を とを目的として講義を行っ - 療や薬学などを中心とする自 域を修得し,同時に理系英語の : して講義を行った。
			2002年4月~2010年12月	まで有機 自ら作成	化学系III実習を したポスターを使	担当した。質量分析計	条系実習II、2008年度から現在の前での測定を実演したり、 5理解を深めるための努力をす
				の目的、 けて指導 手に伝 <i>え</i>	実験結果の考えが を行った。また、 るかをポイントに	ラを把握し, さらなるの プレゼンテーションに	った。質量分析を通して、研究 F究意欲を培わせることを心がこついても、わかりやすく聞き にに講義では、学生が研究に応いて講義した。
2	作成した教科書、教	材、参考書			法の原理や基礎的を作成した。	内容を学習するための)図式化などを取り入れたプリ
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					

4 その他教育活動上特記すべき事項		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takarada T, Rochmah MA, Harahap NIF, Shinohara M, Saito T, Saito K, Lai PS, Bouike Y, Takeshima Y, Awano H, Morioka I, Iijima K, Nishio H, Takeuchi A	論文	Brain Dev. 2017 "SMA mutations in SMN Tudor and C-terminal domains destabilize the protein."
Sato K., Yamashita T., Ohuchi H., Takeuchi A., Gotoh H., Ono K., Mizuno M., Mizutani Y., Tomonari S., Sakai K., Imamoto Y., Wada A., Shichida Y.	論文	Nat. Commun., 2018, 9(1), 1255. doi: 10.1038/s41467-018-03603-3. "Opn5L1 is a retinal receptor that behaves as a reverse and self-regenerating photoreceptor"
Katsuda T, Matsuzaki J, Yamaguchi T, Yamada Y, Prieto- Vila M, Hosaka K, Takeuchi A, Saito Y, Ochiya T.	論文	Elife. 2019 Aug 8;8. pii: e47313. "Generation of human hepatic progenitor cells with regenerative and metabolic capacities from primary hepatocytes."
Takaoka Y, Takeuchi A, Sugano A, Miura K, Ohta M, Suzuki T, Kobayashi D, Kimura T, Sato J, Ban N, Nishio H, Sakaeda T.	論文	PLoS One. 2019 Nov 15;14(11):e0225244. "Establishment of the experimental procedure for prediction of conjugation capacity in mutant UGT1A1."
Rochmah M.A., Wijaya Y.O.S., Harahap N.I.F., Tode C., Takeuchi A., Ohuchi K., Shimazawa M., Hara H., Funato M., Saito T., Saito K., Lai P.S., Awano H., Shinohara M., Nishio H., Wijaya E.T.E.	論文	Kobe J Med Sci. 2020, 66(1), E1-E11. "Phosphoethanolamine elevation in plasma of Spinal Muscular Atrophy Type 1 Patients."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Resveratrolの安定性評価と細胞内での代謝物解析	2018. 5	日本質量分析学会・日本プロテオーム学会2018年合同大会
Evaluation of UDP-glucuronosyltransferase 1A1 activity towards bilirubin	2018. 8	22nd International Mass Spectrometry Conference

濾紙血DNA を用いた新生児スクリーニ	ングシステムの開発	2019. 3	日本薬学会第139年会			
マウス採尿法によるプロスタグランジ について	ン代謝物の定量操作の工夫	2019. 5	第67回質量分析総合討論会			
第45回日本医用マススペクトル学会年	会	2020. 9	第45回日本医用マススペクトル学会年会			
Ⅲ 学会等および社会における主な	活動					
1981年~2009年	日本ビタミン学会会員					
1981年~	日本薬学会会員					
2001年~	日本質量分析学会会員	日本質量分析学会会員				
2004年~	日本医用マススペクトル	ル学会会員				
2005年~2017年	American Society for	Mass Spectrometry会員				
2006年7月	第33回BMS(Biological	Mass Spectrometry)コンファレン	ノス実行委員			
2010年7月	第37回BMS(Biological	Mass Spectrometry)コンファレン	ノス実行委員			
2013年7月	第40回BMS(Biological	第40回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員長				
2013年~	BMS研究会世話人	BMS研究会世話人				
2014年~	日本医用マススペクトル	日本医用マススペクトル学会評議員				
2015年7月	第42回BMS(Biological	第42回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員				
2017年7月	第44回BMS(Biological	第44回BMS(Biological Mass Spectrometry)コンファレンス実行委員				

所属 英語第一研究室	職名 准教授	氏名 赤井 朋子				
I 教育活動						
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要	
1 教育内容・方法のエ	夫(授業評価等を含む)					
英語		1992年〜現在に至る	う。 用トてなた。 2013年に 2013年に VI」)る III」に目や生に が生に	たが、中でも自然科学にから積極的に使用してカラスの人数が約80人とにビデオ教材など視聴がある。 では、大きないでは、病院での簡単では、病院では、病院が行われている。 では、方にでいる。 では、方にでいる。 では、でいる。 では、でいる。 では、でいる。 では、、でいる。 では、、でいる。 では、、でいる。 では、、でいる。 では、、でいる。 でいては、、でいる。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいる。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいている。 でいないる。 でいないる。 でいないる。 でいないる。 でいないる。 でいないる。 でいないないない。 でいないないない。 でいない。 でいないないないない。 でいないないないないないないないないないないないないないないないないないないな	時期によって異なり、 的な内容(医療や健康、 きた。また、4年制の きた。また、4年制の きた。また、4年制の きがったため、 覚教材の使い方を様々 修制の英語の授業(24 単な英会(1年次生「発 英語を得向的な長に あの類解決をした受業機 に活用している。 は、回収率がかなり高	教科書も様々なものを使環境問題等)のテキス時代(~2005年)におい人数が多くても遜色がに工夫して授業を行っ 下次生「英語V」「英語関する英文の講読を英文の講話と「英語I」「英語II」「英語はかりやすいよいがけている。いずれの会において、ペア・ワーいにもかかわらず、学内
総合文化演習		1995年〜現在に至る	化をスす劇い、ルので、一で、大きない。 ので 東ので 大きな こので 現在この	るゼミを担当。作品に その上で、学生の研究 ・グループ・ディスカ 学生がディスカッショ を通して人間や文化に で多様性に対する寛容 を尊重しながら問題解 が習得できるように心 科目は、学生による授 去にアンケートを取っ	関するディスカッショ発表とレポート作成をッション方式も取り入いに参加できるように対する理解を深め、グ性を養うことも視野に決けている。 業評価アンケートの対	関するゼミとイギリス文 ンや文献購読などの演習 指導する。2002年度から れ、特定の課題について エ夫している。また、せな ローバル社会に欠かて 入れている。そして取り方 ターションの取り方 象科目からはずされてい 物よりかなり高い評価を

早期体験学習	2005年〜現在に至る	新入生の早期体験学習が円滑に行われるように様々な形で学生のサポートを行っている。特に、2005年度(早期体験学習トライアル)、2009年度、2013年度、2017年度、2021年度には新入生の担任としてクラス授業を行い、体験学習後のプレゼンテーションの指導や、報告書原稿の添削等を行っている。また、学生の学習先である病院や薬局を訪問したり、学生の引率を行ったりもしている。
2 作成した教科書、教材、参考書		
授業のプリントを作成	2013年〜現在に至る	英語V、VIにおいて、学生が予習しやすいように、各章毎に予習プリントを作成し配布している。薬学に特化した市販の教科書が比較的少ないため、既存の教科書を本学の学生向けにカスタマイズして使用している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
入学予定者のための英語教育	2003年~現在に至る	2020年度までは、推薦入試による入学予定者に、あらかじめ問題集を送付し、返送されてきた学生の解答に目を通した上で、2月にそれに関する解説の授業を行った。2021年度は入学予定者に対して実施された試験とその評価にかかわる業務を行った。
クラス担任	2005年~現在に至る	クラス担任として、種々の関係業務に従事。
習熟度別英語科目のとりまとめ役	2013年〜現在に至る	習熟度別英語科目である「英語II」「英語IV」において、担当の先生方(非常 勤講師)と、毎年、テキスト選定や授業の運営等についてミーティングを重ね ている。本学の場合、学生間で英語の学力に大きな差が見られるので、教員同 士の連携やコミュニケーションをはかることにより、多様な学生への効果的な 対応に取り組んでいる。
Ⅱ 研究活動	•	•
1. 著書・論文等		

氏名	種別	内容
赤井 朋子	著書 (共著)	『演劇と音楽』(森話社、2020年)223-241.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
「1910年代の英国演劇と坪内士行」(口頭発表)	2016年6月	英米文化学会比較文学分科会
"Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Imitation and Adaptation of Musical Revue in 1920s Japan" (口頭発表)	2017年8月	Association for Asian Performance 17th Annual Conference
"Cultural Transfer between London and Takarazuka: the Translation and Adaptation of Western Comedies in Late 1910s-1920s Japan" (口頭発表)	2018年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2018
"The Takarazuka Girls' Opera and the Urban-Rural Boundary" (口頭発表)	2019年7月	International Federation for Theatre Research World Congress 2019
「ヴィクトリア劇場とEmily of Emerald Hill」(口頭発表)	2020年9月	アジア・パシフィック劇場文化分科会
3. その他		
「交差するまなざし-外国(人)が見つけた日本、日本(人)が見つけた日本をめぐって-」(ワークショップ)	2018年9月	第36回英米文化学会大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		

1992年4月~現在	日本英文学会、日本シェイクスピア協会会員	
2000年4月~現在	日本演劇学会会員	
2004年4月~現在	日本比較文化学会会員	
2004年6月~2008年6月	日本演劇学会幹事	
2006年8月~現在	国際演劇学会(IFTR)会員	
2010年4月~2011年8月	IFTR Osaka実行委員	
2011年8月~現在	英米文化学会会員	
2017年3月~現在	Association for Asian Performance会員	

所属 総合教育研究センター 職名 准教授	氏名 竹仲 由希子							
教育実践上の主な業績	年月日			概		要	11.0	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
有機化学実習の講義と実験指導	2002年1月~2017年	メージし	易くしてい	る。			講義で詳しく	
基礎化学実習の講義と実験指導	2020年9月~現在に至る	基礎的な で詳しく	☆実験操作を 説明し、イ	写真や動画 メージし』	画を挿入した 易くしている	たパワーポク る。	イントを用い	た事前の講義
有機化学演習の講義	2006年4月~現在に至る	毎回小デ	ニストをおこ	ない、学生	上の理解度 を	を確認しなれ	がら進めてい	る。
有機化学Iの講義	2008年10月~2016年							理し易くして 認識させる。
生薬化学の講義	2017年4月~現在に至る	いる。諱		薬学や有格	幾化学で学ん	しだことの行		/トを配布して :がら、色々な
構造解析学IIの講義	2018年8月~現在に至る	手法を請	義した後、 て、スペク	実際のNMR	チャートを	使用し構造	決定の練習	た構造解析の をさせる。 1の化合物の構
2 作成した教科書、教材、参考書								
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4 その他教育活動上特記すべき事項								
チューター学生に対する指導	2005年4月~2008年3月							
6年生に対する国家試験勉強の指導	2017年4月~現在に至る							
Ⅱ 研究活動		•						

1. 著書・論文等						
氏名	種別	内容				
Takefumi Onodera, Yukiko Takenaka, Sachiko Kozaki, Takao Tanahashi, and Yoshiyuki Mizushina	論文	Int. J. Oncol. 2016, 48 (3), 1145-1154. "Screening of Mammalian DNA Polymerase and Topoisomerase Inhibitors from Garcinia mangostana L. and Analysis of Human Cancer Cell Proliferation and Apoptosis"				
Duy Hoang Le, Katsumi Nishimura, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	J. Nat. Prod. 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of Garcinia schomburgkiana"				
Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Nobuo Hamada, Takao Tanahashi	論文	Heterocycles 2017, 94 (9), 1728-1735, doi:10.3987/com-17-13704. "A cyctotoxic pyranonaphthoquinone from cultured lichen mycobionts of Haematomma sp."				
Yukiko Takenaka, Takao Tanahashi	論文	Phytochemistry Letters, 2018, 26 , 64-67. "Biosynthetic origin of alkylated decaline-type polyketides and induction of a new metabolite by addition of benzoate in cultured mycobionts of Pyrenula sp."				
Duy Hoang Le, Yukiko Takenaka, Yoshiyuki Mizushina, Takao Tanahashi	論文	Vietnam J. Chem., 2019, 57 (1), 112-115, doi:10.1002/vjch.201960018. "Evaluation of DNA polymerase inhibitory activities of depsidones, depsides and diaryl ethers from the Vietnamese lichen Rimelia clavulifera"				
2. 学会発表						
演題名	発表年・月	学会名				
Fraxinus rhynchophyllaの果実の成分研究	2016年3月	日本薬学会第136回年会				
Garcinia mangostanaの葉部の成分研究	2016年3月	日本薬学会第136回年会				
ベトナム産地衣類より単離培養した地衣菌の代謝物の多様性	2016年7月	日本地衣学会第15回大会				
Ⅲ 学会等および社会における主な活動						
2010年1月~2011年12月 日本地衣学会評議員						

2014年1月~2015年12月	日本地衣学会監事、評議員
2016年1月~2017年12月	日本地衣学会庶務幹事

所属	医療薬学研究室	職名 准教授	氏名 佐々木 直人							
I 考	I 教育活動									
	教育実	践上の主な業績	年月日		概	要				
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)								
			2016年10月~2017年3月	3年次生の 行った。	の薬物治療学Ⅱを担当した。	臨床医としての経験を生かした講義を				
			2018年9月~現在	3年次生の を行って		る。臨床医としての経験を生かした講義				
			2018年4月~現在		の処方解析Ⅰ・処方解析Ⅱをテ 「の知見・薬物も交えて講義し	担当している。病態・薬物治療に関し、ている。				
			2016年10月~現在		の実務実習事前教育を担当し っている。	ている。臨床医としての経験を生かした				
		2017年11月~現在	6年次生の総合薬学講座を担当している。国家試験対策のポイントを示し ら、分かりやすく講義している。							
			2016年10月~2020年3月		の処方解析学・処方解析演習 1見・薬物も交えて講義した。	を担当した。病態・薬物治療に関して、				
			2016年10月~現在		る。また、学生自身が目的意	実験ノート作成、研究発表などの指導を 意識をもって研究を進められるように指導				
			2017年4月~現在	大学院修士課程において病態解析治療学特論の講義を行っている。						
			2018年4月~現在	大学院博	i 士課程において疾患解析治療	学特論の講義を行っている。				
2	作成した教科書、教	材、参考書								
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等								
4	その他教育活動上特	記すべき事項								

I	1	
Ⅱ 研究活動	_	
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Sasaki N, Yamashita T, Kasahara K, Fukunaga A, Yamaguchi T, Emoto T, Yodoi K, Matsumoto T, Nakajima K, Kita T, Takeda M, Mizoguchi T, Hayashi T, Sasaki Y, Hatakeyama M, Taguchi K, Washio K, Sakaguchi S, Malissen B, Nishigori C, Hirata K.	論文	Arterioscler Thromb Vasc Biol. 37:66-74, 2017. "UVB exposure prevents atherosclerosis by regulating immunoinflammatory responses."
Hayashi T, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Emoto T, Amin HZ, Yodoi K, Matsumoto T, Kasahara K, Yoshida N, Tabata T, Kitano N, Fukunaga A, Nishigori C, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	J Am Heart Assoc. 6(9):e007024, 2017. "Ultraviolet B Exposure Inhibits Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice by Expanding CD4+Foxp3+ Regulatory T Cells."
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Scientific Reports. 9(1):8065, 2019. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
Emoto T, Sasaki N, Yamashita T, Fukunaga A, Masaki T, Nishigori C, Hirata KI.	論文	Photomedicine and Photobiology. 40:17-22, 2019. "Possible beneficial effects of narrow-band UVB therapy on hypertension and vitamin D levels in patients with cutaneous disease."
Amin HZ, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Circ Rep. 2:339-342, 2020. "Cytotoxic T Lymphocyte-Associated Antigen-4 Protects Against Angiotensin II-Induced Kidney Injury in Mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ケモカイン受容体CCR4の阻害薬投与による動脈硬化モデルマウスの病変形成の促進	2020年3月	日本薬学会第140年会
動脈硬化モデルマウスにおける病変形成抑制に有効な紫外線B 波の波長の特定	2020年3月	日本薬学会第140年会
Protective T-cell Immunity as an Attractive Therapeutic Target for Atherosclerotic Disease.	2020年7月	第52回日本動脈硬化学会総会

Salactive C-C chamokine re	ecentor A inhibition			
Selective C-C chemokine receptor 4 inhibition aggravates atherosclerosis in apolipoprotein E-deficient mice.		2020年7月	第84回日本循環器学会学術集会	
Pharmacological inhibition of C-C chemokine receptor 4 aggravates atherosclerosis through prevention of regulatory T cell recruitment to the lesions.		2020年9月	European Society of Cardiology Congress, 2020	
Ⅲ 学会等および社会におけ	る主な活動			
2000年5月~現在	日本内科学会会員(200	日本内科学会会員(2005年9月~現在:日本内科学会認定内科医、2015年12月~現在:日本内科学会総合内科専門医)		
2000年5月~現在	日本循環器学会会員(2	日本循環器学会会員(2008年4月~現在:日本循環器学会認定循環器専門医)		
2008年6月~現在	日本動脈硬化学会会員	日本動脈硬化学会会員(2019年7月~現在:評議員)		
2008年12月~現在	日本免疫学会会員	日本免疫学会会員		
2012年5月~現在	American Heart Associ	American Heart Association会員		
2015年5月~現在	日本臨床免疫学会会員	日本臨床免疫学会会員		
2016年11月~現在	日本薬学会会員	日本薬学会会員		
2017年6月~現在	日本光医学・光生物学会	日本光医学・光生物学会		

所属	薬理学研究室	職名 准教授	氏名 八巻 耕也				
I 参	教育活動						
	教育実	践上の主な業績	年月日			概	要
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)	2002. 4. 1 - 2003. 4. 1 - 2006. 3. 31 2006. 4. 1 - 2011. 3. 31 2016. 4. 1 - 2020. 3. 31 2018. 4. 1 - 2007. 4. 1 - 2007. 4. 1 - 2013. 4. 1 - 2014. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2018. 4. 1 - 2020. 3. 31 2020. 4. 1 -	情薬臨ア病薬薬基薬医高在海医講深行20世界世界の熊理学礎学薬齢宅外薬義まごの8年の19世界の19世界の19世界の19世界の19世界の19世界の19世界の19世界	(兼担) 型学特論(兼担) ブラボ(兼担) 講座(兼担) 講座(兼担) 強性学(兼担) 強性学(兼担) 経済習(兼担) 経済で(兼担) を研修(兼担) を研修(兼担) のに努力した。 はいていまた はいまた。 はないまた。 はない変理学Ⅱ、201	・ (兼担) (リントやプレゼンテ 、講義中も適宜、学生 を理解しているかを把	ーションを作成し、学生の理解が Eに反応を確認したり、問いかけを 型握するように努めた。 講義では、授業評価を基にした
2	作成した教科書、教	材、参考書					

		講義を行	テうにあたり、自作のプリントやプレゼンテーションを作成し利用した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		池田 宏武田 糸薬学雑誌	#也,上田 昌史,上田 久美子,江本 憲昭,水谷 暢明, 三二,八木 敬子,田中 将史,土生 康司,中山 喜明, 己彦,森脇 健介,北河 修治 5.,2016,136,1051-1064. いら臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の
		武田 新薬学雑誌 "分野榜	て 井也,池田 宏二,上田 久美子,土生 康司,中山 喜明, 己彦,森脇 健介,和田 昭盛,小山 淳子,児玉 典子,北河 修治 長,2017,137,1285-1299. 貴断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導入が 一学習意欲と学習効果"
4 その他教育活動上特記すべき事項	2005. 4. 1 -	高校での)出張講義
	2006. 4. 1 - 2007. 3. 31	チュータ	7 ー(成績不良な学生への学習支援)
	2007.4.1 - 2020.3.31 実務実習		習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース
		高校、大参画して	マ学(正規の講義以外)、卒後の薬剤師のための教育にも可能なかぎり こいる。
II 研究活動		•	
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
Yamaki K, Terashi M, Ogura S, Inoue S, Naka N, Nakagaki T, Oka N, Koyama Y	i 論文		Pharmazie. 2020, 75, 7, 339-343. "Anti-allergic effect of the Src family kinase inhibitor saracatinib."
Yamaki K., Yoshino S.	論文		Immunopharmacol Immunotoxicol. 2016, 38,131-44. "IgA directly inhibits antigen-dependent B cell activation following distinctive distribution of the antigen in mice."

Yamaki K., Yoshino S.	論文	J. Immunol. Methods, 2016, 428, 58-68. "A new, rapid in vivo method to evaluate allergic responses through distinctive distribution of a fluorescent-labeled immune complex: Potenti investigate anti-allergic effects of compounds administered esystemically or topically to the skin."	
2. 学会発表			
演題名	発表年・月	学会名	
IgA の抗原特異的な感作抑制作用	2017 年 3 月	日本薬学会 第 137 年会	
皮膚への免疫複合体の斑点状の分布を指標とした IgG 依存的 アレルギーモデル (G-ASDIS) の確立とそれを利用した抗アレ ルギー物質の探索	2018 年 3 月	日本薬学会 第 138 年会	
Src family kinase 阻害薬 saracatinib の抗アレルギー作用	2019 年 3 月	日本薬学会 第 139 年会	
IgA は抗原分布および B 細胞の活性化を制御し、認識抗原に対する感作を抑制する	2020 年 3 月	日本薬学会 第 140 年会	
IgG 依存性アレルギーモデル G-ASDIS の確立とその誘導に関 与する細胞及び分子の探索	2021 年 3 月	日本薬学会 第 141 年会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		·	
特になし			

所属 総合教育研究センター 職名 准教授	氏名 児玉 典子			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2009年~現在に至る	重要ポイ	学講座)Zoomと対面授業: ントの説明と、間違いやす 問題を解く方略を示した。	い問題をピックアップし、基本知識を活用
	2009年〜現在に至る	スライト		会: 引して丁寧に説明した。基本問題と応用問題 とてもらい、その解答と解説を行った。
	2020年~現在に至る	院内感染	できた。また、病原体、配	後: こから抽出して、薬剤耐性菌の発現メカニズ 対性機構、治療薬、臨床の場での課題などを
	2008年~現在に至る	生命の誕 (先生と		るために、他の先生と協力してQ&A形式 生に授業内容の理解と専門知識の復習や新
	2008年~現在に至る	一方通行 ディスカ		他の先生と協力してQ&A形式に加えて、 授業を行い、高血圧の発症のメカニズムな
	2009年~現在に至る	理解度チ		eフォームの活用と補講を行った。授業では ら、生体における糖の重要性を理解しても
	2008年~現在に至る			:。学力レベルの向上を目指し、予習・復習 ※を実施した。
	2009年~現在に至る	学習カウ	ンセリングを対面の他、Zo	oom、メール、電話を活用して行った。

	2018年~現在に至る	新入生対象(希望者)のリメディアル化学勉強会を開催し、オリジナルテキストを用いて学生の勉強方法の改善と知識の定着を目指す補習授業を、Zoomを活用して実施した。
2 作成した教科書、教材、参考書	2012年3月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease-
	2016年3月	HUMAN READER 生命科学英語 -life and disease- 改訂版
	2018年9月	感染制御学 病原微生物との共存と戦い 初版
	2020年3月	ホッコリする化学計算 リメディアル化学 vol.1 -化学計算の基礎- 第1版 (企画・編集)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年10月~現在	キャリアカウンセラー資格取得 (CCE, Inc. 認定 GCDF-Japan)
	2017年8月~現在	キャリアコンサルタント資格取得 (キャリアコンサルティング協議会 認定)
	2010年10月~現在	ゲシュタルト療法研修修了資格(日本心理療法士協会)
	2010年12月~2014年12月	TA心理カウンセラー2級資格取得(日本心理療法協会)
	2012年 4月~現在	認定心理士資格取得(日本心理学会)
	2013年9月	睡眠健康指導士上級 (日本睡眠教育機構認定)

Ⅱ 研究活動

1. 著書・論文等

氏名	種別	内容
児玉典子,小山淳子		Libra, 2017, 17, 1-14. "初年次教育における反転授業とジグソー法を組み合わせたアクティブ・ラーニングの試み"
児玉典子,小山淳子	研究ノート	Libra, 2018, 18, 45-57. "チーム基盤型学習におけるピア評価の重要性 の認識及び関連因子の探索"
児玉 典子, 細川 美香, 藤波 綾, 小山 淳子, 竹内 敦子	論文	薬学教育,2018,2,167-174. "薬学英語学習の過程で生じる正感情と影響要因の検討 一動機づけ予測に関連した感情の観点からの考察―"
児玉典子,小山淳子,安岡由美	研究ノート	Libra, 2019, 19, 1-9. "Audience response system (ARS) の学習意欲に 及ぼす影響因子について―学習意欲を向上させる双方向性授業を目指して ―"
児玉典子、内田吉昭、川西和子、安岡由美、西村克己、小山 淳子、佐子綾香、和田昭盛	研究ノート	Libra, 2020, 20, 1-8. "研修会前後における気分・感情・意欲の変化― 意欲向上の予測因子について―"

2. 学会発表				
演題名	発表年・月	学会名		
ジグソー法を用いた薬学英語学習に関する学力層別学習意識 調査結果について	2018年3月	日本薬学会(第138年会)ポスター発表		
クリッカーを活用した研修会参加前後における気分と意欲の 変化及び関連性	2018年9月	日本薬学教育学会(第3回)ポスター発表		
薬学英語学習者の達成関連感情と学習方略及び自己効力感と の関連について	2019年3月	日本薬学会(第139年会)ポスター発表		
クリッカーを用いた双方向性授業の実践例と学生の意識調査	2019年8月	日本薬学教育学会(第4回)ポスター発表		
薬学英語学習者の予習の自己効力感を促す個人的要因の探索	2020年3月	日本薬学会(第140年会)ポスター発表		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				

所属 生化学研究室 職名 准教授	氏名 攤中 里美			
I 教育活動	•			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
(1) 本学薬学部学生への教育	2008年4月-現在に至る	学部学生	に分子生物学の講義を行っている	5.
		たすよう いる事項	に努めながら、講義に関連する内	で、講義担当のコアカリの SBOs を満 N容における最近の発見や注目されて P病因の解明など)についてプリント
		に関連す		导する課目であるが、できるだけ医療 床系の科目の理解につながる基盤をつ
]の講義では、なるべくテーマを約 : うに心掛けている	交り、1つのテーマに関して単回で終
		らうため	に、過去に出題された国家試験の	Oように出題されているかを知っても O問題を10〜20問選んでプリントで配 したものを定期試験に出題している。
		いる。ま		こ、文章問題を演習として取り入れて る能力を養うため、定期試験ではマー 種を出題している。
	2007年4月-現在に至る	学部学生	:に生物学系の実習指導を行ってV	` る。
		内容が医	※学・薬学の領域で実際に活用されまた、コンパクトにまとめて30	に基礎知識を復習するとともに、実習 れていることが想像できるように努め)分以内で説明が終了するように心掛

			時間後に学生個々にレポートを作成してもらい、その日に行った実習 きるようにしている。
	2007年4月-現在に至る	学部学生	に卒業研究の指導を行っている。
		いけるよ ベルに合 計画をい とってでき	「身の講義と違い、参加型の実習であるので、学生自身が問題解決して こうなトレーニングを行えるよう心掛けている。具体的には、学生のレース こった課題を与え、実験目的や方法を説明した後は、各自で日常の実験 こててもらい、学生自身の力で課題を解決していくようなスタイルを いる。学生だけでは目標到達が難しい場合はサポートするが、目標をクーない場合においても、答えのない課題に対してアプローチしていくプー経験してもらうように心掛けている。
			!的な考え方や表現力が身に付くように、定期的に研究内容を学生にまた、発表するためのサポートを行っている。
			研究I, II で行った研究活動の成果をまとめる卒業論文の作成、およ 果を発表する際のプレゼンテーションの指導を行っている。
(2) 本学大学院生への教育	2007年4月-現在に至る		論(生化学特論)の講義を担当している。研究活動を通して知り得た 職を講義で紹介できるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2011年4月-現在に至る	生物学系	II実習(生化学実習)テキスト
	2020年4月-現在に至る	薬学生化	之学 (分子生物学II)教科書(廣川書店)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし	
4 その他教育活動上特記すべき事項		特になし	•
Ⅱ 研究活動	•	•	
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容

Sakamoto, K., Ozaki, T., Ko, YC., Tsai, CF., Gong, Y., Morozumi, M., Ishikawa, Y., Uchimura, K., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Zulueta, M. M. L., Bandaru, A., Tamura, J., Hung, SC., and Kadomatsu, K.	論文	Nature Chem. Biol. (2019) 15, 699-709. doi.org/10.1038/s41589-019-0274-x Glycan sulfating patterns define autophagy flux at axon tip via PTPR σ -cortactin axis.
Nadanaka, S., and Kitagawa, H.	総説	Glycoforum (2019) 22 (3), A8. doi:10.32285/glycoforum.22A8 Insight into the key roles of chondroitin sulfate proteoglycans in cancer biology
Nadanaka, S., Hashiguchi, T., and Kitagawa, H.	論文	FASEB J., (2020) 34 (6), 8385-8401. doi.org/10.1096/fj.201902076R Aberrant glycosaminoglycan biosynthesis by tumor suppressor EXTL2 deficiency promotes liver inflammation and tumorigenesis through Toll-like 4 receptor signaling.
Akasaka-Manya, K., Manya, H., Nadanaka, S., Kitagawa, H., Kondo, Y., Ishigami, A., and Endo, T.	論文	J. Biochem., (2020) 167 (5), 483-493. doi.org/10.1093/jb/mvz113 Decreased ADAM17 expression in the lungs of a-Klotho reduced mouse.
Nadanaka, S., Miyata, S., Yaqiang, B., Tamura, J. and Kitagawa, H.	論文	Biomolecules (2020) 10, 1499. doi.org/10.3390/biom10111499 Reconsideration of the Semaphorin-3A Binding Motif Found in Chondroitin Sulfate Using Galnac4s-6st-Knockout Mice.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
がん細胞の増殖や浸潤シグナルを制御するグリコサミノグリカン Insights into the key roles of glycosaminoglycan signaling in cancer biology	2019. 09. 18-20	第92回日本生化学会大会
Chondroitin sulfate-mediated N-cadherin/beta-catenin signaling is associated with basal-like breast cancer cell invasion	2019. 09. 29- 10. 03	11th International Conference on Proteoglycans
神経可塑性に関わるセマフォリン3Aが認識する糖鎖構造の解析	2019. 08. 19 - 21	第38回日本糖質学会年会

グリコサミノグリカンの合成異常に着目したAAアミロイドーシ ス発症制御因子の解明		誌上開催 2020. 11. 21- 11. 23	第39回日本糖質学会年会
グリコサミノグリカンの合成異常による肝細胞がん発生メカニ ズムの解析		誌上開催 2020.11.21-11.23	第39回日本糖質学会年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活			
2001年~現在	日本分子生物学会会員		
1994年~現在	日本生化学会会員		
2001年~現在	細胞生物学会会員		
1995年~現在	糖質学会会員		

所属	放射線管理室	職名 准教授	氏名 安岡 由美				
I å	数育活動		<u> </u>				
	教育実	践上の主な業績	概		要		
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)	2010年,2014年,2018年 1990年〜現在に至る 1991年〜現在に至る 1991年〜現在に至る	放射線管 早期体験 物理化学 ゼミ生の 放射線業	: : 放射線に関する基 ・理学: 放射線に関す ・学習: 問題意識を持 ・系実習(放射線実習) ・教育: 環境放射能・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	る総合的理解 ち早期体験学習への :放射性物質の安全 公衆衛生 法令を順守と放射性	全取扱い生物質の取り扱い法
2	作成した教科書、教	材、参考書	2007年〜現在に至る	物理化学	:系実習(放射線実習)	テキスト	
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					
4	その他教育活動上特	記すべき事項					

Ⅱ 研究活動						
1.著書・論文等						
氏名	種別	内容				
Tanaka, A., Minami, N., Yasuoka, Y., Iimoto, T., Omori, Y., Nagahama, H., Muto, J., Mukai, T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2017,177, 324-330. "Accurate measurement of indoor radon concentration using a low-effective volume radon monitor."				
Goto, M., Yasuoka, Y., Nagahama, H., Muto, J., Omori, Y., Ihara, H., Mukai, T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2017, 174, 412-418. "Anomalous changes in atmospheric radon concentration before and after the 2011 northern Wakayama Earthquake (Mj 5.5)."				
Iwata, D., Nagahama, H., Muto, J., Yasuoka, Y.	論文	Scientific reports 2018, 8,13028. "Non-parametric detection of atmospheric radon concentration anomalies related to earthquakes."				
Wakabayashi, A., Yasuoka, Y., Janik, M., Nagahama, H., Fukuhori, N., Mori, Y., Arai, Y., Fujii, S., Mukai, T.	論文	Radioisotopes 2019 68 317-329. "Derivation and validity evaluation of calibration factors for activated-charcoal radon collectors."				
Higuchi S., Kamishiro Y., Ishihara M., Yasuoka Y., Mori Y., Hosoda M., Iwaoka K., Tokonami S., Takahashi R., Janik M., Muto J., Nagahama H., Mukai T.	論文	Radiation Protection Dosimetry 2019, 184, 426-429. "Evaluation of a radon air monitor in the measurement of radon concentration in water in comparison with a liquid scintillation counter."				
2. 学会発表						
演題名	発表年・月	学会名				
Validation of radon-film-badge for measurement of radon in water	2018年9月	9th International Conference on High Level Environmental Radiation Areas- For Understanding Chronic Low-Dose-Rate Radiation Exposure Health Effectsand Social Impacts (ICHLERA 2018)				
2018年大阪府北部地震前後の大気中ラドン濃度変動の検討	2019年7月	第56回アイソトープ・放射線研究発表会				

監視モニタによる空気中ラドン濃度測定の検討 一温度依存性の評価—		2019年10月	第69回日本薬学会関西支部大会		
空気用ラドンモニタを用いた水中ラドン濃度測定におけるス クリーニング法の検討		2020年6月	日本保健物理学会第53回研究発表会 Web大会		
排気モニタによる大気中ラドン濃度の推定		2020年6月	日本保健物理学会第53回研究発表会 Web大会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動				
1990年~現在に至る	日本薬学会会員				
1990年~現在に至る	日本アイソトープ協会				
1990年~現在に至る	日本保健物理学会会員				
2001年~現在に至る	日本放射線安全管理学会	会会員			
2002年11月~現在に至る	放射線医学総合研究所	客員協力研究員			
2006年~現在に至る	日本地球化学会会員				
2009年~現在に至る	日本温泉科学会				
2011年9月~現在に至る	日本地震学会				
2011年4月~2012年3月	日本放射線安全管理学	会 メンタルケア委員会 委員			
2011年9月~2013年3月	日本保健物理学会 専門	門研究会「暮らしの放射線Q&A対M	芯委員会委員」		
2011年9月11日	神戸市消防局 感謝状				
2011年11月1日	平成23年度主任者部会年次大会ポスター賞				
2014年7月~現在に至る	岡山県 環境放射線等測定技術委員会委員				
2016年10月~現在に至る	ISO/TC147(水質) /SC3 (放射線測定) 国内審議委員会委員				
2017年10月12日	日本アイソトープ協会 平成29年度放射線安全取扱部会表彰 放射線安全取扱部会功労表彰				

所属 微生物化学研究室 職名 准教授	氏名 中山 喜明						
教育実践上の主な業績	年月日		概		要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) (1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2014年より2016年		÷系Ⅱ実習」(3年次後∮ 連基本的技能などを指導		生物の取扱い、検出、同定に		
	2015年より現在				低学年次の研究室未配属学生 かいて、体験学習を行った。		
	2015年より現在	2144	.門」(1年次前期)を .。SGDやピア評価によ	· > • • · · · · · · · · · · · · · · · ·	薬学に関する基礎的講義を 入を実践した。		
	2016年より現在	F 2 F	7化学実習」(2年次後 基本的技能などを指導	/ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	生物の取扱い、検出、同定に		
	2017年より現在	「免疫学	空」(2年次後期)を分	担した。			
(2) 本学薬学部学生への研究指導	2014年より現在	研究室に	・配属された学部学生を	こ対して、研究指導	を実施した。		
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2013年,2017年, 2019年	「生命科	学特論」を分担。大学	学院生に対して、講	‡義を実施した。		
(4) 他大学での講義	190164	京都大学 した。	大学院薬学研究科「記	基盤生物化学概論・	生命科学概論講義」を分担		
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし	,				

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	池田 宏二,八木 敬子,田中 将史,土生 康司,中山 喜明,武田 紀彦,森脇 健介,北河 修治 薬学雑誌.,2016,136,1051-1064.		#也,上田 昌史,上田 久美子,江本 憲昭,水谷 暢明, 		
		学術論文 八巻 耕也,池田 宏二,上田 久美子,土生 康司,中山 喜明, 武田 紀彦,森脇 健介,和田 昭盛,小山 淳子,児玉 典子,北河 薬学雑誌.,2017,137,1285-1299. "分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー導 生み出す学習意欲と学習効果"			
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年より現在 実務実習		習指導薬剤師養成のためのワークショップのタスクフォース		
	2018年6月14日	兵庫県立	立小野高校への出張授業「薬学とは」		
Ⅱ 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名	種別		内容		
Nakayama, Y., Masuda, Y., Ohta, H., Tanaka, T., Washida, M., Nabeshima, Y., Miyake, A., Itho, N., Konishi, M.	論文		"Fgf21 regulates T-cell development in the neonatal and juvenile thymus." Scientific Reports. 7(1)310. (2017)		
Masuda, Y., Nakayama, Y., Tanaka, A., Naito, K., Konishi, M.			"Antitumor activity of orally administered maitake α -glucan by stimulating antitumor immune response in murine tumor." PLoS One. 12(3)e0173621. (2017)		
Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M	論文		"Maturation of dendritic cells by maitake α-glucan enhances anti-cancer effect of dendritic cell vaccination." International Immunopharmacology. 67;408-406 (2019)		

中山 喜明

2. 学会発表					
演題名		発表年・月	学会名		
不飽和脂肪酸負荷により誘導されるFgf 析	21の脂質代謝機構の解	2016年5月	生化学会近畿支部会		
FGF21は胸腺細胞の成熟化を促進する		2016年5月	生化学会近畿支部会		
分泌型へムタンパク質Neudesin遺伝子欠損マウスは赤血球代謝亢進と貯蔵鉄減少を示す		2018年11月	分子生物学会年会		
分泌型へムタンパク質Neudesinによる赤血球代謝調節機構の 解析		2019年6月	Pharmaco-Hematologyシンポジウム		
腫瘍免疫抑制因子Neudesinの阻害ペプラ	チドの開発	2020年10月	日本薬学会関西支部大会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	 幼				
2004年8月~現在に至る	日本分子生物学会会員				
2012年8月~現在に至る 日本糖質学会会員					
2017年11月~現在に至る	日本薬学会会員				

所属	臨床心理学研究室	職名 准教授	氏名 中島 園美			
Ι	教育活動		•			
	教育実践上の主	な業績	年月日		概	要
1	教育内容・方法の工夫(授業評価等を	含む)	2010年4月〜現在に至る	対人関係を目的と		であった。 日己と他者の考えや行動への理解が深まること いて自己分析を行なうなどし、学生が体験的に
			2012年4月〜現在に至る	目さ死言プの際に、	たソリューション・フォーカスト・アフ 疾患に関連する映画を用いたグループ発 そのあり方について考えを深めた。また毎 自力向上を目指している。プレゼンテーシ 養表、次に個人での発表と段階的にプレセ	うムとして、将来のビジョンを獲得することをプローチを導入した表現療法を実施している。 必表を行い、患者や患者の家族への理解や生と EPOSGDと小レポートを導入し、自己表現力や ション力を高めるために、まず最初に、グルー ジンテーション体験を積めるようにしている。 かに、ルーブリックを作成し、学生自身で達成 の課題を発見することを目指した。
			2015年4月~2017年8月	力にのロ題メントを表うしている。	ために、各疾患毎に心理的特徴を中心に -ム医療の一員として多職種の中で適切な なも解説した。さらに講義内容が医療現場 プレイ、SGDを導入し、最後に自身のロー パートにまとめることを求めた。次回の	に、の共感を基盤としたコミュニケーション能に概説し、望ましい関わり方を提示した。さらなコミュニケーションが発揮できるように連携場で実践できるように、ケースを設定して、ルプレイを振り返り、考察や今後の自身の課い授業にて数名分の小レボートを読み上げてコかたり、より多くの適切な対応例を知ることが
			2015年9月〜現在に至る	全りと習ま患なコ学慮キポー的医理と、やてユのなりをしいした。 はいかい かんしゅう かんしゅん かんしゅん かんしゅん かんしゅん かんしゅん かんしゅん かんしゅん かんしゅん いっぱん かんしゅん いっぱん いんしゅん いんしゅう しょうしゅん いんしゅう しょうしゅん いんしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしゅう しょうしょう しょう	展現場でのコミュニケーション力の基盤を 、2年次の前期で「医療コミュニケーシ 「系的・段階的なカリキュラムとなってい 年次での「人の行動と心理」では、人の では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので では、人ので でし、とし、 でいる。 にない でいる。 にない でいる。 にない でいる。 にない でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる	こ、患者と家族の心理社会的側面を理解した と形成することを目指し、1年次に「人の行動 ョン」、後期で「医療コミュニケーション演

	2016年4月〜現在に至る	「医療コミュニケーション」2020年度はオンデマンド講義であった。 1年次の「人の行動と心理」で学んだことを基盤として、2年次の本授業では、医療人として、患者と患者の家族への共感的なコミュニケーションを実践できるように、各疾患毎の患者の心理的特徴を中心に説明し、望ましい関わり方を提示した。また、患者の家族のストレスも説明し、家族にも配慮やサポートが必要なことを伝えた。さらに、チーム医療の一員として多職種の中で適切なコミュニケーションが発揮できるように連携の留意点も解説した。コミュニケーショントレーニング「アサーション」の「傾聴」ワーを導入している。ゲストスピーカーとして、ホスピスに従事しているチャレンに終末期に関する話をして頂いた。臨床現場の話を聞くことは、医療者としての態度形成に役立つと考えた。
	2016年10月〜現在に至る	「医療コミュニケーション演習」「医療コミュニケーション」で学んだことを基盤とした患者や家族への支援や医療チームのメンバーへの対応する実践力を獲得するために、臨床事例を設定し、小グループで、ロールプレイ、SDGを行った。小グループでの活動を通して、チームでの問題発見・解決能力を養うことも意図している。
	2016年11月〜現在に至る	「医療倫理学演習」医療現場における倫理的問題を有する事例を提示し、SGDをしてワークシートに記入という構成になっている。導入において、学生がテーマに興味をもち、活発なディスカッションが行えるよう、関係する内容の新聞記事や映画などを紹介してから、事例を提示するという工夫を行なっている。
	2018年9月〜現在に至る	「高齢者医療」において、『高齢者の心理と接し方』担当。現代の超高齢社会、医療者として高齢者と円滑にコミュニケーションを取るための基盤となる高齢者の心理的側面を概説した。今後の薬剤師の在宅医療への積極的な参画が求められることから、在宅医療の事例を提示し、患者の立場では、どのように感じるか、どんな医療を求めているかなどワークシートをもとにSGDを行なってもらった。患者の体験を知り、患者の立場で考えられ医療人の態度育成を意図している。
	2019年4月〜現在に至る	「在宅医療演習」において、「高齢者の終末期在宅医療を考える」の講義を担当。高齢者の在宅医療の事例を用いたスモールグループディスカッションを通して、在宅医療を担う医療者の態度育成を目指している。ワークシートを用いて、学生が考えを深めていけるよう工夫した。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2013年9月	「教育プログラムとしてのコラージュ療法-誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した試みー」日本心理臨床学会第32回秋季大会 大会シンポジウム発表 口頭発表 抄録集111. 2013
	2013年10月	「コラージュ療法に認知物語アプローチを導入した教育プログラム開発研究-コラージュ作品を用いてのグループ・ディスカッションの効果-」 日本コラージュ療法学会第5回大会 一般演題 ロ頭発表 抄録集24-25. 2013
	2014年	「コラージュ療法に誘発コラージュ法と認知物語療法を導入した教育プログラム開発研究ーイメージ変化と認知の変化の事例検討ー」コラージュ療法学研究 5(1),59-70. 2014.

2018年9月	「薬学生による「認知症カフェ」の取り組み―メモリーブック作成による認知症患者と家族介護者との交流プログラム―」第3回日本薬学教育学会大会 一般演題 ポスター発表 講演要旨集 222.		
2019年6月	学長裁量経費に基づく教育改革プログラム及び学内研究プログラム成果報告会(2018年度)「『認知症カフェ』における認知症高齢者そして家族介護者との交流活動を通しての薬学生の医療コミュニケーションカの変化―傾聴スキルの向上について」		
2020年3月	「医療系学生への共感力育成教育プログラム導入の効果検証-闘病記を用いた共感ワークー」 日本薬学会第140年会 一般演題 ポスター発表 要旨集 194.		
第70回リカレントセミナー 講演「薬剤師のためのコーチング - コーチング z 者さんとのコミュニケーション力をアップしよう」			
2016年6月	2016年度喫煙者の「禁煙教育」講演「認知行動アプローチで禁煙ワーク」場所:神戸薬科大学		
2016年6月	第1回健康サポートセミナー 講演「幸福へのヒントを得る心理学」場所:東灘区民センター (うはらホール) 8階 会議		
2016年9月	平成28年度 兵庫地区大学月曜懇談会 9 月例会 講演「軽度発達障害の特徴と学生支援」場所:神戸薬科大学		
2018年3月	がん哲学学校 in 神戸 第17回メディカル・カフェ 講演「ストレス・マネジメント」場所:地域連携サテライトセンター		
種別	内容		
発表年・月	学会名		
2018年8月	日本心理臨床学会第37回秋季大会		
2018年9月	第3回日本薬学教育学会大会		
2020年3月	日本薬学会第140年会		
	2019年6月 2020年3月 2015年10月 2016年6月 2016年6月 2016年9月 2018年3月 種別 発表年・月 2018年8月 2018年9月		

コラージュ療法を導入した大学生への発達支援教育プログラム		2020年11月	日本コラージュ療法学会第12回大会	
薬学生への共感性を高める教育的プログラム―Jeffer の効果検証―	rson Scale of Empathyで	2020年9月	第5回日本薬学教育学会大会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
2006年4月~現在に至る	日本心理臨床学会員			
2009年4月~現在に至る	カウンセリング学会員			
2009年4月~2017年11月	地方独立行政法人 大阪 教育入院プログラム「ご	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪はびきの医療センター (旧大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター) 教育入院プログラム「ストレス・マネジメント」心理教育担当、アトピー性皮膚炎患者および家族へのカウンセリング担当		
2013年4月~現在に至る	日本コラージュ療法学会	日本コラージュ療法学会員		
2014年10月15日	帝塚山学園(帝塚山大学	学) 講演 教育セミナー「ス	トレスマネジメント - 対人関係を円滑にするコミュニケーション - 」	
2014年12月		「重症アトピー性皮膚炎患者への長期的支援としての集団コラージュ療法-作品と認知物語療法を通して表現された心的世界の検討-」 京都文教コラージュ療法研究会 講演		
2015年12月~現在に至る	日本心身医学会員			
2016年4月~現在に至る	日本薬学教育学会員	日本薬学教育学会員		
2016年4月~現在に至る	日本薬学会員			
2021年5月~現在に至る	日本在宅医療連合学会員			

所属 製剤学研究室 職名 准教授	氏名 古林 呂	之		
I 教育活動	•			
教育実践上の主な業績	年月	3	概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む 学部学生に対する教育	2018年10 2020年4	『臨床』 き、薬剤 し、配れ 4年次科 を担当し	製剤学Ⅱ』(1コマ)『総合薬学 別師国家試験で取り扱われる内 有している。 目『臨床薬剤学Ⅰ』(3コマ)	『臨床薬剤学 I』(3コマ)、6年次科目 学講座』を担当している。SBOsに基づ 容をできる限り盛り込んだ資料を作成 、6年次科目『臨床薬剤学Ⅱ』(1コマ) 利師国家試験で取り扱われる内容をでき
2 作成した教科書、教材、参考書(1) 製剤化のサイエンス(改訂7版) 寺田勝英/高(2) 「わかりやすい薬物動態計算問題の解き方ディカル)		23日 物」、「Ⅱ 19腎クリ	製剤化」ネオメディカル (pp.174	レアチニンクリアランス(Cockcroft-
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 特になし			11	· ·
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし				
Ⅱ 研究活動				
1. 著書・論文等				
氏名		種別		内容

Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Hidemasa Katsumi, Akira Yamamoto, Ken-ichi Ogawara, Kazutaka Higaki, Akiko Tanaka, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Tomoyuki Furubayashi	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 4462-4469. "Quantitative Estimation of the Effect of Nasal Mucociliary Function on in Vivo Absorption of Norfloxacin after Intranasal Administration to Rats"
Sakane T., Okabayashi S., Kimura S., Inoue D., Tanaka A., Furubayashi T.	論文	Pharmaceutics, 2020, 12, 1227-1234."Brain and Nasal Cavity Anatomy of the Cynomolgus Monkey: Species Differences from the Viewpoint of Direct Delivery from the Nose to the Brain"
Tanaka A., Takayama K., Furubayashi T., Mori K., Takemura Y., Amano M., Maeda C., Inoue D., Kimura S., Kiriyama A., Katsumi H., Miyazato M., Kangawa K., Sakane T., Hayashi Y., Yamamoto A.	論文	Mol. Pharm. 2020, 17, 32-39."Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"
Inoue D., Furubayashi T., Tanaka A., Sakane T., Sugano K.	論文	Eur. J. Pharm. Biopharm., 2020, 149, 145-153."Quantitative estimation of drug permeation through nasal mucosa using in vitro membrane permeability across Calu-3 cell layers for predicting in vivo bioavailability after intranasal administration to rats."
Furubayashi T., Inoue D., Nishiyama N., Tanaka A., Yutani R., Kimura S., Katsumi H., Yamamoto A., Sakane T.	論 文	Pharmaceutics, 2020, 12, 79-92."Comparison of Various Cell Lines and Three-Dimensional Mucociliary Tissue Model Systems to Estimate Drug Permeability Using an In Vitro Transport Study to Predict Nasal Drug Absorption in Rats."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ラマン分光法を利用した粉末状薬物の経鼻吸収性推定法の構築 Ⅲ~培養細胞上での結晶溶解解析~	2019年5月	日本薬剤学会第34年会
α-Galactosylceramideの鼻腔内投与による免疫活性化に関する検討	2019年7月	第35回日本DDS学会学術集会
各種製剤化α-Galactosylceramideの鼻腔内投与による免疫活性化	2020年3月	日本薬学会第140年会
ラマン分光法を利用した粉末状薬物の経鼻吸収性推定法の構築 IV 〜培養細胞上での溶解速度の頭打ちの検出〜	2020年5月	日本薬剤学会第35年会
鼻粘膜を介した薬物の頸部リンパ節送達における動態制御に関す る検討	2020年8月	第36回日本DDS学会学術集会

3. その他					
講演演題名		発表年・月	会名		
点鼻剤の過去・現在・未来~薬物動態学・製剤学から点鼻剤を考える~		2019月10月	第183回神戸西ブロック薬学研修会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1995年9月~ 日本	日本薬物動態学会委員(現在に至る)				
1996年1月~ 日本	日本薬学会会員(現在に至る)				
1997年1月~ 日本	日本薬剤学会会員 (現在に至る)				
2001年7月~ 日本	日本DDS学会会員(現在に至る)				
2008年9月~ 米国	米国薬学会American Association of Pharmaceutical Scientists 会員(現在に至る)				
2013年9月~ 創剤	創剤フォーラム会員(現在に至る)				

所属 薬品物理化学研究室 職名 准教授	氏名 佐野 紘平						
I 教育活動	'						
教育実践上の主な業績	年月日		概	要			
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
(1) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2016年~現在	物理化学	学系実習(2年次後期)				
		GM計数管	管によるβ線の測定、計数の統計的	的変動の理解に関する実習等を担当。			
	2016年~現在	物理化学	≱Ⅲ(2年次後期)(分担、6コマ	•)			
		溶液の性	性質および電気化学に関する講義	を担当、e-ラーニングを実施。			
	2016年~現在	アクティ	ィブラボ (1~3年次通年)				
		1~3年沙	1~3年次の学部学生に対して、物理化学関連の実験指導を実施。				
	2017年~現在	薬学入門(1年次前期)					
		物理系素	物理系薬学に関する基礎的講義を実施。				
	2017年~現在	アイソト	トープ演習(3、4年次前期)(分	7担、6コマ)			
		放射線取扱主任者試験(国家試験)の資格取得を目指し、問題演習を実施。					
		2018年度と2020年度、受講生から第1種放射線取扱主任者試験に1名ずつ合格。					
(2) 本学薬学部学生への教育(講義、実習)	2016年~現在	研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。					
		担当学生	ヒ計4名が学会優秀発表賞を受賞	(計5件)。			
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2016年~現在	大学院生	大学院生に対して、講義および研究指導を実施。 物理系創薬学特論 (大学院博士)				
	2019年	物理系倉					
(4) 他大学での講義	2017年7月14日 京都大学大学院薬学研究科の大学院生にセラノスティックス分子プロリットの 関する講義を実施。			ニセラノスティックス分子プローブに			
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし	,				

4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし					
II 研究活動							
1. 著書・論文等							
氏名	種別	内容					
Kohei Sano, Manami Ohashi, Kengo Kanazaki, Akira Makino, Ning Ding, Jun Deguchi, Yuko Kanada, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	Bioconjugate Chemistry, 28:1024-1030 (2017) Indocyanine green-labeled polysarcosine for in vivo photoacoustic tumor imaging.					
Kohei Sano, Yuko Kanada, Kengo Kanazaki, Ning Ding, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	Journal of Nuclear Medicine, 58:1380-1385 (2017). Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues.					
Kohei Sano, Yuko Kanada, Katsushi Takahashi, Ning Ding, Kengo Kanazaki, Takahiro Mukai, Masahiro Ono, Hideo Saji	論文	Molecular Pharmaceutics, 15:3997-4003 (2018) Enhanced delivery of radiolabeled polyoxazoline into tumors via self-aggregation under hyperthermic conditions.					
Kohei Sano, Ling Bao, Natsuka Suzuno, Kento Kannaka, Toshihide Yamasaki, Masayuki Munekane, Takahiro Mukai	論文	ACS Applied Polymer Materials, 1:953-958 (2019) Development of cancer-targeted single photon emission computed tomography/fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline.					
Kento Kannaka, Kohei Sano, Hiromichi Nakahara, Masayuki Munekane, Masayori Hagimori, Toshihide Yamasaki, Takahiro Mukai	論文	Lanmmuir, 36 :10750-10755 (2020) Inverse electron demand Diels-Alder reactions in the liposomal membrane accelerates release of the encapsulated drugs.					
2. 学会発表		•					
演題名	発表年・月	学会名					
Enhanced delivery of radiolabeld thermoresponsive polymers into tumors under hyperthermic conditions for internal radiotherapy. (Best Poster Award受賞)	2018年・11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences					
Development of SPECT/Fluorescence dual imaging probe based on polyoxazoline derivative for detection of tumors. (Best Poster Award受賞)	2018年・11月	The tenth China-Japan-Korea Symposium on Radiopharmaceutical Sciences					
Internal radiotherapy using radiolabeled polyoxazoline that are thermoresponsively self-aggregated in tumor tissues.	2019年・9月	第78回 日本癌学会学術総会					

熱応答凝集性ポリマー型放射性薬剤を用いる内用療法の開発 研究		2019年・11月	第59回 日本核医学会学術総会	
放射性標識熱応答凝集性ポリマーと光反応性金ナノロッドを 組み合わせたがん治療法の開発		2020年・11月	第60回 日本核医学会学術総会	
3. その他(講演等)				
演題名		発表年・月	学会名	
水溶性ポリマーを母体とするがんの診 開発 (日本薬学会物理系薬学部会奨)		2017年・3月	日本薬学会 第137年会	
Brachytherapy with intratumoral injections of radiometal-labeled polymers that thermo-responsively self-aggregate in tumor tissues. (日本核医学会研究奨励賞(最優秀賞)受賞講演)		2018年・11月	第58回 日本核医学会学術総会	
水溶性高分子の物理化学的特性に基づくがんのセラノスティ クス薬剤の創製 (日本薬学会奨励賞)受賞講演)		2019年・3月	日本薬学会 第139年会	
がんのセラノスティクスを目指した水溶性ポリマーを基盤と するDDS製剤の開発		2020年・8月	第36回 日本DDS学会学術集会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動			
2003年~現在 日本薬学会会員				
2006年~現在	日本分子イメージング			
2008年~現在	日本核医学会会員			
2016年~現在	日本DDS学会会員			
2019年~現在	日本癌学会会員			

所属 社会科学研究室 職名	准教授	氏名 小門 穂						
I 教育活動								
教育実践上の)主な業績	年月日		概		要		
1 教育内容・方法の工夫(持	受業評価等を含む)		ることを	目標とし、医療政策とい	いう制度的な観点か	するための基盤を身につけら医療倫理に関する原則、 用いて自分で考える時間を		
			理学演習	3理学」で医療倫理の原則 引」で事例を用いた個人ワ に、受講生の文献精読、発	フークを行う。「総			
2 作成した教科書、教材、参								
3 教育方法・教育実践に関す	ける発表、講演等							
4 その他教育活動上特記すべ	ヾき事項							
Ⅱ 研究活動	II 研究活動							
1. 著書・論文等	1. 著書・論文等							
氏名	,	種別			内容			

Jungen Koimizu, Minori Kokado, Kazuto Kato		論文	Ethical Perspectives of Japanese Engineers on Ambient Assisted Living Technologies: Semi-structured Interview., Asian Bioethics Review, July 2018, 10(2), 143-155.
小門穂		論文	セクシュアルマイノリティーと生殖補助医療―フランスの動向から、 『上智ヨーロッパ研究』第10号、2018年3月、67-83頁
小門穂		論文	女性の身体の資源化に抗う―代理出産をめぐる日仏の動向、『科学技術社会論研究』17巻、2019年4月、93-103頁
小門穂		論文	フランスにおける性別表記変更の脱医療化―21世紀司法の現代化法のインパクト、『ジェンダー法研究』第6号、2019年12月、157-165頁
Jusaku Minari, Megumu Yokono, Kayo Kokado, Ryuichi Ida, Yutaka Hishiy		論文	Looking back: three key lessons from 20 years of shaping Japanese genome research regulations, Journal of Human Genetics, May 2021, https://doi.org/10.1038/s10038-021-00923-z
2. 学会発表			
演題名		発表年・月	学会名
Gametes Move Across Borders : Forefront of Reproductive Tourism		2019年9月	4S (Society for Social Studies of Science)
生殖ツーリズムと国内法規制―フランス 正から	ス生命倫理法2019年改	2019年11月	第64回日本生殖医学会
How to regulate the use of gene edi human embryos-the Japanese context	ting technology on	2020年8月	4S (Society for Social Studies of Science)
フランス生命倫理法改正と「母親」の変	变容	2020年11月	日本医事法学会第50回研究大会
研究倫理審査と感染症流行の「緊急事態」:海外の主な検討を 題材に		2020年12月	第32回日本生命倫理学会年次大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	助		•
2003年4月~現在に至る	に至る 日本生命倫理学会会員		
2005年9月~現在に至る 科学技術社会論学会会員			

2015年4月~現在に至る	日本医事法学会会員	
2016年12月~現在に至る	日本フランス語教育学会会員	
2017年2月~現在に至る	4S (Society for Social Studies of Science)会員	
2018年1月~現在に至る	日本生命倫理学会第10期・第11期国際交流委員会委員	
2018年1月~2020年12月	日本生命倫理学会第10期編集委員会委員	
2019年4月~現在に至る	京都生命倫理研究会世話人	

所属 臨床薬学研究室	職名 准教授	氏名 原 哲也						
I 教育活動								
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要			
1 教育内容・方法の工	上夫(授業評価等を含む)	2020年7月1日 —	てとをトし試答理題大さZOMをは の味さっていでせかは学れない現でフていいではかは ではないではかいでは ではいいでは ではないでは ではないでは では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 で	これまでの臨床医とに引きがない。 これまでの臨床医とに引きがない。 これをずないない。 これをずれない。 これをがない。 これをできる。 これをできる。 これをできる。 これをできる。 これをできる。 これをできる。 これをできる。 これを といる これを といる これを といる これを といる これを といる これを といる これを	こての経験に基づきのとことを は、エの経験に基づらのできた。 は、エのでは、まないでは、 は、エのでは、まないででは、まないでは、 は、アリン・では、まないでは、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、アリン・では、 は、、 は、、 は、、 は、、 は、、 は、、 は、、	、総合な 生の疾患の病様で一まな との疾患の病様でのように でしまで、 のと、、がして、 ので、よいで、 では、 を習で、 でいるで、 でいるが、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので		
2 作成した教科書、教 β 遮断薬のすべて 第三版		2008年	「β遮陽	r薬の血管、血管内皮に	こ対する作用」 を担当	した。		
3 教育方法・教育実践								
4 その他教育活動上特	f記すべき事項							

Ⅱ 研究活動							
1. 著書・論文等							
氏名	種別	内容					
Okano M, Hara T, Nishimori M, Irino Y, Satomi-Kobayashi S, Shinohara M, Toh R, Jaffer FA, Ishida T, Hirata K.	論文	In Vivo Imaging of Venous Thrombus and Pulmonary Embolism Using Novel Murine Venous Thromboembolism Model JACC Basic Transl Sci.2020;5:344-356.					
Hisamatsu E, Nagao M, Toh R, Irino Y, Iino T, Hara T, Tanaka H, Satomi-Kobayashi S, Ishida T, Hirata KI.	論文	Fibronectin-containing High-Density Lipoprotein is Associated with Cancer Cell Adhesion and Proliferation. Kobe J Med Sci 2020;66:E40-E48.					
Oshita T, Toh R, Nagano Y, Kuroda K, Nagasawa Y, Harada A, Murakami K, Kiriyama M, Yoshikawa K, Miwa K, Kubo T, Iino T, Nagao M, Irino Y, Hara T, Shinohara M, Otake H, Shinke T, Nakajima K, Ishida T, Hirata KI.	論文	Association of cholesterol uptake capacity, a novel indicator for HDL functionality, and coronary plaque properties: An optical coherence tomography-based observational study. Clin Chim Acta. 2020;503:136-144.					
Suzuki M, Tanaka H, Yokota S, Hara T, Ueda Y, Hirata KI.	論文	Multiple cardiac complications associated with collagen disease. J Echocardiogr. 2020, in press.					
Yoshikawa S, Hara T, Suzuki M, Fujioka M, Taniguchi Y, Hirata KI.	論文	Imatinib Dramatically Improved Pulmonary Hypertension Caused by Pulmonary Tumor Thrombotic Microangiopathy (PTTM) Associated with Metastatic Breast Cancer. Int Heart J. 2020;61:624-628.					
Jaffer FA, Hara T.	論文	PET/MR Illumination of Atherosclerosis Pathobiology: How a Nanobody Becomes Somebody. JACC Cardiovasc Imaging. 2019;123:2027-2028.					
2. 学会発表		•					
演題名	発表年・月	学会名					

Real-Time in Vivo Imaging of Thrombosis Initiated by Red Blood Cell Aggregation in Novel Murine Stasis Model of DVT.		2018年7月		日本動脈硬化学会 学術総会	
Establishment of novel deep venous thrombosis model suitable for in vivo imaging.		2018年11月		AHA Scientific Sessions 2018	
新規マウス血栓モデルによるDVT生体イ	メージング	2018年9月		日本腫瘍循環器学会 学術総会	
Establishment of femoral vein ligation model; a new DVT imaging model.		T 2019年4月		Vascular Discovery 2019.	
Novel Deep Venous Thrombosis Model Enabled Visualization of Thrombus Formation and Organization Process in vivo.		2019年3月		日本循環器学会 学術総会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
2002年6月- 日本内科学会		2007年10月-現在	007年10月-現在 日本内科学会認定内科医、2018年12月-現在 日本内科学会総合内科専門		
2002年6月-	日本循環器学会	2009年4月-現在	日本循環器学会	会認定専門医	
2021年6月-	eader				

所属	総合教育研究センター 職名 准教授	氏名 河内 正二			
I	教育活動				
	教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1	教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
		2009年4月~現在	4年次の	「実務実習事前教育」を分担した。	
		2012年4月~現在	4、5年次	(の「海外薬学研修」の講義を分担し	した。
		2012年4月~2020年3月	6年次の	「処方解析学・演習」を分担した。	
		2012年4月~現在	6年次の	「総合薬学講座」を分担した。	
		2014年4月~現在	3年次の	「調剤学Ⅰ」を分担した。	
		2015年4月~現在	1年次の	「早期体験学習(救命救急訓練)」	を分担した。
		2016年4月~現在	4年次の	「安全管理医療」を分担した。	
		2018年4月~現在	4年次の	「処方解析学Ⅰ・Ⅱ」を分担した。	
		2019年4月~現在	5年次の	「在宅医療演習」を分担した。	
		2020年4月~現在	2年次の	「医療コミュニケーション演習」を	分担した。
		2020年4月~現在	6年次の	「感染制御学Ⅱ」を分担した。	
			に使用す	けでの経験を活かして最新の情報を持 る資料は、図表や写真画像および重 が定着するよう努めている。	
2	作成した教科書、教材、参考書				
3	教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4	その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月~現在	神戸大学	 :附属中学校と連携したがん教育プロ	
		2017年4月~現在に至る	タスクラ	'ォースとして、薬剤師のためのワー	ークショップに協力している。
П	研究活動		•		
1.	著書・論文等				

氏名	種別	内容
Kawauchi S, Nakamura T, Horibe S, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Biopharm Drug Dispos. 2016; 37: 522-532. "Down-regulation of hepatic CYP3A1 expression in a rat model of indomethacin-induced small intestinal ulcers"
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata K, Rikitake Y.	論文	J Neurochem. 2018; 147: 495-513. "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α -syntrophin in aquaporin-4 expression"
Horibe S, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochem BiophysRes Commun. 2018; 507 (1-4) :426-432. "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin resistance in human lung cancer A549 cells"
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Mar Drugs. 2019; 17 (2) :104. "Inhibitory effects of sodium alginate on hepatic steatosis in mice induced by a methionine-and choline-deficient diet"
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Exp Cell Res. 2019; 374(2): 333-341. "A novel in vitro coculture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
アドシルカ [®] 錠の粉砕後の安定性に関する試験	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
シルデナフィル製剤の粉砕後の安定性に関する検討	2016年1月	第37回日本病院薬剤師会近畿学術大会
インドメタシン誘発小腸粘膜障害モデルにおける小腸と肝臓 でのCYPsおよびmdr1a の発現変動機序の検討	2017年3月	日本薬学会第137年会

Inhibitory effects of sodium alginacholine-deficient diet-induced hepamice.			10th International Symposium on Cell/Tissue Injury and Cytoprotection /Organoprotection 2018	
肝性脳症患者へのリファキシミン長期投与による有効性と安 全性の調査		2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会	
3. その他				
演題名		発表年・月	学会名	
心臓移植時の不整脈管理が免疫抑制剤の薬物動態に及ぼす 影響		2017年8月	兵庫県薬剤師会・病院薬剤師会連携1周年記念大会 分科会 4 大学と臨床現場とを繋ぐ研究-臨床現場の課題解決を目指して-	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動		•	
2005年4月~現在	日本病院薬剤師会			
2005年4月~現在	日本医療薬学会			
2009年4月~現在	日本薬学会			
2010年4月~現在	日本薬剤師会			
2017年4月~現在	登録販売者試験委員(兵庫県2017-2018、関西広域連合2019-)			

所属 生命分析化学研究室 職名 准教授	氏名 大山 浩之			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
分析化学実習	2010年4月~現在			則などについて実習を通してより理 けるための手法や技術の指導に努めて
分析化学II	2018年4月~現在		での原理およびこれらの応用例を請ってよく出題されるポイントを中心	構義している。医薬品の定量分析では 心に解説している。
卒業研究I, II, III	2010年4月~現在	内外での	位置づけ、今後の発展性や社会は	平易な例を示しつつその重要性や国 こおける有用性を理解させるよう努め ベーション維持させることを心掛けて
2 作成した教科書、教材、参考書				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
II 研究活動				
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Banzono E., Ishii K., Kubo S., Watanabe Y., Hirai A., Kaede C., Ohta M., Kobayashi N.	論文			5. "One-shot in vitro evolution for testing urinary cotinine with nity"

Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(12), 2191-2198. "A single-step breeding generated a diagnostic anti-cortisol antibody fragment with over 30-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Katayama E., Narasaki M., Yokoyama A., Kobayashi N.	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(7), 1062-1070. "Antibodies and engineered antibody fragments agaisnt M13 filamentoous phage to facilitate phage-display-based molecular breeding"
Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Yamamoto C., Higashi Y., Taguchi M., Tagawa T., Enami Y., Takamine Y., Hasegawa H., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Morikawa M., Nakano A., Fujihara W., Inoue Y., Sasaki M., Saijo Y., Kanemoto Y., Murayama K., Baba Y., Takeuchi A., Kobayashi N.	論文	Sci. Rep. 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-througput discovery of affinity-matured antibody mutants"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
抗 Δ^9 –テトラヒドロカンナビノール一本鎖Fvフラグメントの		
が Δ - テトラヒトロガンデビノールー本類Fv ノラクメントの作製と試験管内親和性成熟	2017年7月	日本法中毒学会第36年会
作製と試験管内親和性成熟 高親和力を保持した抗エストラジオールscFv最少変異体調製の試み	2017年7月	日本法中毒学会第36年会日本分析化学会66年会
作製と試験管内親和性成熟 高親和力を保持した抗エストラジオールscFv最少変異体調製		

高感度な発光ELISAを目的とするscFv融合用レポーター酵素の 比較検討		2020年10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
2004年4月~現在	日本薬学会会員		
2006年6月~現在	日本分析化学会会員		
2010年4月~現在	日本臨床化学会会員		
2013年4月~現在	生物化学的測定研究会会員		
2017年6月~現在	日本法中毒学会会員		

所属 病態生化学研究室 職名 講師	氏名 多河 典子]	
I 教育活動	•			
教育実践上の主な業績	年月日		概 要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2006年10月~2016年9月 2009年10月~ 2013年10月~ 2017年4月~ 2009年4月~9月 1987年4月~ 2005年9月~ 2008年~ 1987年4月~ 1987年4月~	学部1年 学部3年 学部4年 学部6 (病態解析 学部4年	注生 臨床生化学 講義 (科目名変更 旧 臨床検査学 I) 注生 早期体験学習指導 -6年生に卒業研究I・II指導 (旧4) 年生 総合薬学講座講義 (2 (1) コマ) 断治療学特論 (病態生化学特論) 1~2コマ (4) 年次生 臨床検査 (臨床化学) 実習指導 主生 臨床検査総論実習指導	
2 作成した教科書、教材、参考書3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2006年10月~ 2009年10月~	臨床生化学(臨床検査学 I) 講義プリント 生化学 I 講義用プリント		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2009年~2011年 2010/11/10 2011/11/11 2014/6/21		学者の宿題作成、質問会で解説を行った。 義 県立明石南高校、県立姫路南高校、県立小野高校	
II 研究活動	•	•		
1. 著書・論文等				
氏名	種別	内容		
Masumoto K, Tagawa N, Kobayashi Y, Kusuda S.	論文		Pediatr Neonatol. 2019;60(5):504-511. "Cortisol product preterm infants with or without late-onset adrenal insufficiency of prematurity: A prospective observationa study."	
Mitsumoto Y, Sato R, Tagawa N, Kato I.	論文		J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 2019;65(2):202-204. "Rubis 6, a δ-Opioid Peptide from Spinach RuBisCO, Exerts Antidepressant-Like Effect in Restraint-Stressed Mice."	scolin-

Kimura M, Kosuge K, Ko Y, Kurosaki N, Tagawa N, Kato I, Uchida Y.	論文	Chem Pharm Bull (Tokyo). 2020 Aug 1;68(8):810-813."Potent Antibacterial Activity of Synthetic Peptides Designed from Salusin- β and HIV-1 Tat(49-57). "			
2. 学会発表					
演題名	発表年・月	学会名			
マウス脂肪組織におけるnesfatin-1の発現・分泌促進について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫 2)、加藤 郁夫1) 1)神戸薬科大学 病態生化学研究室 2)鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科心身内科学分野	2018/4/26	第91回日本内分泌学会学術総会			
肥満モデルマウスの視床下部及び脂肪組織での新規エネルギー代謝関連ペプチドの発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫 2)、加藤 郁夫1) 1)神戸薬大 2)鹿児島大院医歯	2018/8/24	第58回日本臨床化学会年次学術集会			
消化管ホルモンxeninのELISA法の開発 多河 典子1)、中張 隆司2)、浅野 真司3)、桑原 厚和3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1)神戸薬大2)立命館大薬 3)立命館大総合科学 技術研	2019/3/23	日本薬学会第139年会			
マウス視床下部及び脂肪組織でのNUCB2 mRNA発現について 多河 典子1)、浅川 明弘2)、藤波 綾1)、乾 明夫2)、加 藤 郁夫1) 1)神戸薬科大学 病態生化学研究室 2)鹿児島大学 大学院 医歯学総合研究科心身内科学分野	2019/5/10	第92回日本内分泌学会学術総会			
腸管ペプチドxeninのELISA法の確立とマウス小腸組織での定量 ○多河 典子1)、浅野 真司2)、中張 隆司3)、桑原 厚和 3)、丸中 良典3)、加藤 郁夫1) 1)神戸薬科大学病態生化学研究室2)立命館大学薬学部分子 生理学教室3)立命館大学総合科学技術研究機構	2020/10/30~11/1	第60回日本臨床化学会年次学術集会			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
1986年7月~ 日本薬学会会員	日本薬学会会員				
2006年4月~ 日本内分泌学会代議員	日本内分泌学会代議員				
2014年6月~ 日本臨床化学会評議員					

上田久美子

所属 総合教育研究センター 職名 講師	氏名 上田 久美子					
I 教育活動						
教育実践上の主な業績	年月日		概		要	
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)						
特になし						
2 作成した教科書、教材、参考書						
特になし						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
「Libra」誌上にて報告	2018. 12		1興子、中山尋量、北河		田吉昭、八巻耕也、土生康 ¹ 期体験学習におけるピア評	
「Libra」誌上にて報告	2018. 12				田興子、中山尋量、北河修 習の構築の試み その2"	
「Libra」誌上にて報告	2018. 12				田興子、力武良行、中山尋 遺断統合演習の構築の試み"	
第3回日本薬学教育学会にて発表	2018. 9		€子、八巻耕也、土生康 ・ーム基盤型学習を用い		田興子、中山尋量、北河修 習の構築"	
平成29年度神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム成果報告会にて報告	2018. 6		a、上田久美子、八巻耕 、基盤型学習(TBL)を用			
「薬学教育」誌上にて報告	2017. 12	育、2017			田興子、北河修治。薬学教 -ム基盤型学習を用いた分野	
第2回日本薬学教育学会にて発表	2017. 9		€子、八巻耕也、土生康 √基盤型学習を用いた分			
平成28年度神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラム成果報告会にて報告	2017. 6		a、上田久美子、八巻耕 本基盤型学習(TBL)を用			
4 その他教育活動上特記すべき事項 特になし				_		

Ⅱ 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka S, Hosokawa M, Miyamoto T, Nakagawa A, Haruna M, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Rep. 2021, 26:100996. "miR-33a-5p in small extracellular vesicles as non-invasive biomarker for oxaliplatin sensitivity in human colorectal cancer cells."
Ueda K, Nakamura T, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Drug Metab. Pharmacokinetics. 2020, 35, 124-130. "Numerical analysis of apparent decitabine uptake in HCT116 cells: Incorporation of a bidirectional first-order kinetic parameter for ENT1 transport and Michaelis-Menten parameters for subsequent phosphorylation"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 2019, 509, 249-254. "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells with intrinsic resistance to decitabine."
Ueda K, Masuda A, Fukuda M, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S	論文	Drug Metab. Pharmacokinet. 2017, 32, 301-310. "Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells."
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol Pharm Bull. 2017, 40, 1320-1325. "Effects of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
ヒト大腸がんHCT116細胞におけるデシタビンの取り込みの速度論解析―膜透過クリアランスと代謝クリアランスを含むコンパートメントモデル―	2019. 1	第69回日本薬学会関西支部総会・大会
Kinetic analysis of decitabine uptake in HCT116 colon cancer cells	2018. 1	2018 International Meeting on 22nd Microsome and Drug Oxidations and 33rd Japanese Society for the Study of Xenobiotics
ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞におけるデシタビンの細胞内 取り込みの速度論的解析	2018. 5	日本薬剤学会第33年会

上田久美子

ヒト大腸がん細胞株HCT116細胞によるトランスポーター、解糖系酵素、メタロプロテアーゼの発現量に対するニトロベンジルチオイノシン処置の影響		2018. 3	日本薬学会第138年会
Monophosphorylation by deoxycytidine kinase affects apparent cellular uptake of decitabine in HCT116 colon cancer cells		2017. 12	日本薬物動態学会第32回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動		
2006年 4月~2017年 3月	一般社団法人 薬学教育	が協議会 病院・薬局実務実習近畿	地区調整機構 委員
2009年 4月~2011年 3月	日本薬学会 ファルマシア トピックス専門小委員		

所属 生化学研究室	職名 講師	氏名 三上 雅久			
I 教育活動		•	•		
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む) (1) 学部学生への教育	2007年4月~現在に至る	にいやル理といては 開る疾ギ解どる。 BTや試験 CBTや試験	の講義を、また学部2年次に生化学II」では、タンパク質の関連性を織り交ぜながら解謝と恒常性の維持について、もらえるよう努めている。で、後の講義やオフィスア!	(2014年度新入生までは、学部2年次前期 こ対して「生化学III」の講義を行って 質・酵素について、できるだけ日常の話題 解説している。「生化学III」では、エネ 補助プリント等を用意して、体系的に また、学生からの質問に対して個別対応に フーなどで学生全体にフィードバックして はする過去問の解説を実施し、その一部を 理解度の把握に努めている。学生評価 以上の評価を得ている。	
		を行った 英文内容 で取り扱 した。担	。既存の薬学英語のテキス の背景ならびに概要の理解しった頻出専門用語や注意する。	ス)に対して、「薬学英語入門II」の講義トや学術論文から抜粋した資料を用い、 こ重点をおいた。講義毎に、前回の講義 べき発音などについて確認テストを実施 学生評価アンケートにおいて、いずれも	
		2017年度 中で、当 プログラ 技術の進 に、少人	より生化学実習に名称変更) 該分野の必須項目を満たし、 ムを組み立てている。実習収 展と同調したものにするたと	実習(2014年度より生物学系I実習に、の実施を担当している。限られた時間の自ら考えながら実習を行えるような実習質目についても、最新の医療や遺伝子操作めに、随時改訂している。実習時間の最後答を行い、実習内容と講義や国家試験とのいる。	
			自ら積極 に開催さ ている研	的に取り組む姿勢を身についれる研究室のセミナーでのご	行っている。与えられたテーマに対して、 けさせることに重点を置いている。定期的 文献紹介や研究報告などを通じて、携わっ プレゼンテーション能力や問題解決力の

(2) 大学院生への研究指導	2000年4月~現在に至る	論、201 論では、 について でを理解 になるこ	韓座所属の大学院生に対する研究指導ならびに大学院特論(生化学特 2年度以降、生命科学特論に改称)の講義を担当している。大学院特 糖鎖の生理機能の重要性と正常な機能に異常を来たした代謝異常症 発生学的視点から講義をしている。大学院生に対しては、研究テー 好し、主体的に実験計画と組み立てながら課題解決に取り組めるよう とを目標に指導をしている。また、修了までの間に少なくとも1回 終表ができるよう、日々の研究指導にあたっている。
2 作成した教科書、教材、参考書 教科書	2015年3月31日発行		糖質 スタンダード薬学シリーズII 4 生物系薬学I. その基礎(東京化学同人, 2015)28-34.
	2020年9月4日発行	代謝、第	タンパク質の基本、第3章 タンパク質の機能、第4章 タンパク質 35章 タンパク質解析技術、第16章 組織・器官の構築 「ニュー ション薬学生化学」(京都廣川書店)
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等 該当なし。			
4 その他教育活動上特記すべき事項 ベストティーチャー賞受賞	2008年度、2010年度 薬学英語入門II(2008年度および2010年度)		5入門II(2008年度および2010年度)
Ⅱ 研究活動			
1. 著書・論文等			
氏名	種別		内容
Mikami, T., Kitagawa, H., and Iwasaki, N.	著書		In Glycoscience: Basic Science to Applications Insights from the Japan Consortium for Glycobiology and Glycotechnology(JCGG) Springer Chapter13, 2020, pp221-226. "Glycans in Osseous Tissue and Articulation"

Mikami T., Kitagawa H.	著書	In Complehensive Gllycoscience, 2nd edition (ed. Joe Barchi)2020, pp. 29-62, Elsevier. "Biosynthesis and Degradation of Glycans of the Extracellular Matrix: Sulfated
Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Glycosaminoglycans, Hyaluronan, and Matriglycan" Biochem. Biophys. Res. Commun. 2017, 487(3), 678-683. "A characteristic chondroitin sulfate trisaccharide unit with a sulfated fucose branch exhibits neurite outgrowth-promoting activity: Novel biological roles of fucosylated chondroitin sulfates isolated from the sea cucumber Apostichopus japonicus"
Shida M., Mikami T., Tamura J., Kitagawa H.	論文	Biochim. Biophys. Acta Gen. Subj. 2019, 1863(9), 1319-1331. "Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin $\alpha\mathrm{V}\beta3$ "
Mikami T., Kitagawa H.	総説	Glycoconj. J. 2017, 34(6), 725-735. "Sulfated glycosaminoglycans: their distinct roles in stem cell biology"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
Distinct roles of highly sulfated chondroitin sulfates in neural polarity formation.	2016年・1月	The 3rd International Symposium on Glyco-Neuroscience (Awaji)
コンドロイチン硫酸鎖による破骨細胞分化の制御メカニズム の解析	2017年・7月	第36回日本糖質学会年会(旭川)
高硫酸化コンドロイチン硫酸Dによる神経突起伸長促進機構の 解析	2018年・8月	第37回日本糖質学会年会(仙台)
Chondroitin sulfate-D promotes neurite outgrowth by acting as an extracellular ligand for neuronal integrin α V β 3.	2019年・9-10月	11th International Conference on Proteoglycans (Kanazawa)

コンドロイチン硫酸の骨格筋可塑性における役割と加齢性変 化		2020年・9月	第93回日本生化学会大会(横浜)
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動		
1997年2月~現在に至る	日本薬学会会員		
1996年4月~現在に至る	日本生化学会会員		
2000年4月~現在に至る	日本糖質学会会員		
1998年4月~現在に至る	日本分子生物学会会員		

所属 総合教育研究センター 職名 講師	氏名 西村 克己			
I 教育活動	-			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2006年4月から	教科書と	で演習問題を連動させて解説し、	理解に役立てるよう努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書	2006年4月から	講義内容	ドのレジュメを作成し、適宜配付	している。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
Ⅱ 研究活動				
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Le D. H., Nishimura K., Tanahashi T.	論文		Natural Product Communications from the Tuber of Stephania cf	2016, 11 (7), 949-952. "Alkaloids . rotunda"

Le D. H, Nishimura K.,Takenaka Y., Mizushina Y., Tanahashi T.	論文	J. Nat. Prod. 2016, 79 (7), 1798-1807. "Polyprenylated Benzoylphloroglucinols with DNA Polymerase Inhibitory Activity from the Fruits of Garcinia schomburgkiana"
Nishimura K., Horii S., Tanahashi T.	論文	Heterocycles 2018, 97 (2), 865-876. "Asymmetric Synthesis of O-Methylneferine"
児玉典子、内田吉昭、川西和子、安岡由美、 西村克己、小山淳子、佐子綾香、和田昭盛	研究ノート	神戸薬科大学研究論集Libra. 2020, 20, 1-8.
2. 学会発表		•
演題名	発表年・月	学会名
単離培養地衣菌Graphis sp. NH9933012の産生する新規スピロケタール化合物の合成と立体化学	2016 · 3	日本薬学会第136年会
アポルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	2017 · 3	日本薬学会第137年会
クリッカーを活用した研修会参加前後における気分と意欲の 変化及び関連性	2019 • 9	第3回日本薬学教育学会大会
"Stay home"期間、学生の効果的な自学学習とリメディアル 教育におけるメタ認知 的学習支援の試み	2020 • 9	第5回日本薬学教育学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動		•

所属 総合教育研究センター 職名 講師	氏名 猪野 彩					
I 教育活動	1					
教育実践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
	2010年4月~現在	4年次の	実務実習事前教育を分担した。			
	2010年4月~現在	1年次生	の初期体験臨床実習を分担した。			
	2011年4月~現在	4年次の	薬事関係法規・薬事制度を分担した	-0		
	2012年4月~2020年3月	6年次の	処方解析学・演習を分担した。			
	2014年4月~現在	3年次の	F次の調剤学 I の講義を分担した。			
	2017年4月~現在	2年次の	医療コミュニケーション演習を分担	した。		
	2018年4月~現在	4年次の	処方解析Ⅱを分担した。			
2 作成した教科書、教材、参考書						
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特記すべき事項						
Ⅲ 研究活動	I	l				
1. 著書・論文等						
氏名	種別			內容		

波多江 崇, 石田好宏, 伊東真知, 大島沙紀, 藤森可純, 森口沙里, 猪野 彩, 竹下治範, 辰見明俊, 田内義彦, 濱口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果:二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス,日本地域薬局学会誌,4(1),2016		
波多江 崇,田中智啓,猪野 彩,田内義彦,竹下治範,辰見明俊,濵口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果:二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス,医薬品情報学,18(4)67-72,2017		
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐 希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濵口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響, 医薬品情報学, 20(2) 98-103, 2018		
2. 学会発表				
演題名	発表年・月	学会名		
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響	2016年3月	日本薬学会第136年会		
PTP包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会		
NDBオープンデータを用いた乳幼児における抗ヒスタミン薬の 処方実態調査	2018年3月	日本薬学会第138年会		
育児中の母親が薬の疑問について薬剤師に相談しない理由に ついての検討	2019年3月	日本社会薬学会第38年会		
「副作用」の説明に着目した服薬指導時の薬剤師の対応につ いての検討	2019年3月	日本社会薬学会第38年会		
III 学会等および社会における主な活動				
2002年~現在に至る	日本病院薬剤師会 会員			
2016年~現在に至る	日本薬学会 会員			

所属 薬用植物園	職名 講師	氏名 西山 由美					
I 教育活動							
教育実	:践上の主な業績	年月日			概	要	
1 教育内容・方法のエ	に夫(授業評価等を含む)	1986年〜2008年6月 2010年8月〜現在に至る	習開始時説明し、い理解をしく安全	すの講義ではパワ 実験終了時には 深めるようにし	プーポイントを使 は、結果について している。また、	って、実験の目的 考察するなどのテ 実験中は各実習析	を担当している。実 」や実験内容について ディスカッションを行 Lを見回り、手技が正 扱いなどを習得して
		2011年4月~現在に至る	なことか る。国家	いら始め、薬とし	ての生薬につい	て理解を深めてもを習得しながら、	生薬に関する基本的 らえるようにしてい 生薬に興味が持てる
		2014年9月~2017年3月	薬由来の 医薬品か やすい内)医薬品の内、特 ぶ多いので、国家 3容から始め、化	Fにアルカロイド E試験やCBT試	化合物を中心に講験に必要な知識を その特徴・作用を	を担当していた。生 養を行った。重要な 中心に、興味を持ち ・暗記ではなく、化学
		2014年4月〜現在に至る	マ) を担 の部分を たことや 識や汎用	∃当している。こ ☆意識して説明し ♪、利用を希望す	れまで学んでき ている。近年は る人も増えてき 中心に講義し、	た西洋医学とは櫻 、漢方薬も多く処 ているので、漢方	016年度からは7コ ほ念が異なるので、そ 上方されるようになっ 「に関する基本的な知 家試験の問題に対応
		2017年9月~現在に至る		だ訳すだけでな			で書かれた専門的な そく理解することを目
2 作成した教科書、教	坟材、参考書	2013年8月~現在に至る	いて自分に載って	rでまとめながら いないことなど	、勉強出来るよ	うにしている。 薬について自分た	式なので、生薬につ 注白を使って、教科書 だけのまとめのノート

	2010-07] 2011-07]	でまとめでまとめとめのノ	学の講義で用いる冊子を作成した。書き込み式で、重要な化合物を自分って勉強できるようにしている。余白を利用して、教科書の内容を自分って書いたり、教科書に載っていないことなども書き込んで、自分のまいートとなるように使ってもらいたいと考えて作成した。 学の講義で用いる冊子を毎年作成している。テキストには多くの情報が
		あり、湾語や内容子だけでる。冊子	東方医学のことを学ぶにはじっくり読むのが一番だが、馴染みのない単系が多いことから、簡単に内容をまとめた冊子を作成した。ただし、冊では不十分なので、冊子とテキストの両方で勉強して欲しいと考えているには、国家試験やCBTの問題集も入れて、少なくともどんな内容を勉異しないといけないかを考えてもらうことにした。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			
4 その他教育活動上特記すべき事項	月	かを検言 物園で、 用法な 行うほか	の園を教育に活かすために、植物園を利用してどのような教育ができる付するために、1年生を対象に薬用植物園トライアル実習を行った。植植物を直接観察したり五感を使って体験することで、植物の生態や利ぎを学んでもらった。また、薬用植物を用いた利用法として染色などをい、簡単な実験も行い、知識がより定着するように工夫した。今後、こ内容を、植物園を利用した実習などに役立てていく予定である。
		や生薬、 の人たり えて行い	が園を利用した能動的な学習として、学生ガイドの育成を始めた。植物ガイドに関心のある学生で希望者に対して行うものだが、学生は一般らに向けてガイドするために、説明の内容だけでなく方法なども自ら考い、能動的な学習につながると考えている。また、薬剤師に必要なコケーション能力の向上にもつながるものと考えている。
Ⅱ 研究活動			
1.著書・論文等			
氏名	種別		内容
Nishiyama Y., Noda Y., Nakatani N., Shitan N., Sudo T., Kato A., Chalo Mutiso P. B.	論文		Journal of Natural Medicines, 2019, 73(1): 289-296. "Structure of constituents isolated from the bark of Cassipourea malosana and their cytotoxicity against a human ovarian cell line"
北河 修治、西山 由美	著書		果物の色に秘められた巧みな力⑨ かきといちじく 大塚薬報 2019, 4 月, No. 744, 22-25.

北河 修治、西山 由美		著書	果物の色に秘められた巧みな力⑩ トロピカルフルーツ 大塚薬報 2019, 5月, No. 745, 26-29.
Sumiko Ikari, Shiou-Ling Lu, Feike Hao, Kenta Imai, Yasuhiro Araki, Yohei Yamamoto, Chao-Yuan Tsai, Yumi Nishiyama, Nobukazu Shitan, Tamotsu Yoshimori, Takanobu Otomo, Takeshi Noda		論文	PLoS One, 2020, 15(3): e0230156. "Starvation-induced autophagy via calcium-dependent TFEB dephosphorylation is suppressed by Shigyakusan"
2. 学会発表			
演題名		発表年・月	学会名
アポルフィンアルカロイドの鎮痛作用と構造活性相関	III.	2017年・3月	日本薬学会137年会 仙台
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対するタクシャの抗腫瘍活性成分 の探索		2017年・9月	日本生薬学会64回年会 千葉
ヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する漢方薬とシスプラチンの併用効果		2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
ビャクシのヒト卵巣がん細胞KOC7C株に対する抗腫瘍 の探索	活性成分	2018年・3月	日本薬学会138年会 金沢
Uvaria scheffleri根の成分検索		2019年・3月	日本薬学会139年会 千葉
3. その他			
演題名		発表年・月	学会名
研究って・・・? なんだか難しそう		2016年・1月、2017年・1月	兵庫県立西宮高等学校 リサーチII 「課題研究入門・学術講演会」
植物のちから		2019年・9月	2019年度阪神地区相互利用担当者連絡会 神戸
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			•
1986年7月~現在に至る 日本生薬学会会	会員		
1986年12月~現在に至る 日本薬学会会	<u></u>		

所属	中央分析室	職名 講師	氏名 都出 千里]				
I 考	 教育活動		•						
	教育実施	践上の主な業績	年月日		概	要			
1	1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		1996~2010	学生実習	図の円滑な進行を促すため 上の指導に当たる。また、	析学実習および有機化学系 めの準備をおこない、実習記 実習内容についての討議。	講義をおこない実習		
			2003, 2005, 2006	情報リラ	テラシー 講義の円滑な過	進行のためのサポートを行 っ	った。		
			2010~		斤学Ⅰ(分担)担当分野を ノトを用いて講義を行って	わかりやすくするためにパ ている。	パワーポイント、補		
			2017~	14 0241 — 4	≠演習(B 4 クラス)担当分野の説明を分かりやすくするために補 ≥用いて講義を行っている。				
			2018~	を用いた		当範囲を分かりやすくする7 た、補講時間を設け、授業7			
			2018~			野の説明を分かりやすくす? り、実際のスペクトルの測?			
			2019~	14 0241 - 4	こ解答させ、それを添削っ	めに、2回に1回の割合で⁴ することで、個人個人に反応			
			1996~		名のゼミ生の実験指導を行 方、発表の方法などの指導	テい、学年末にはプレゼン 算を行った。	テーションのための		
2	2 作成した教科書、教材、参考書		2010~2012	2 V 1 1 — 4	学III(分担)NMRやES し、簡潔にまとめている。	Rの原理を理解しやすくす	るための補充教材		
			2013~		所学Ι(分担)NMRやΕς し、簡潔にまとめている。	SRの原理を理解しやすく	するための補充教材		
			2010~	/ / //	14 4 11 1111	∆要なことをまとめたプリン 加して解説するための資料を	/		

	2018~	構造解析学 I I (分担) NMR での構造解析を理解しやすくするための補充教材を作成し、簡潔にまとめている。演習するスペクトル課題を選定し、プリントにしている。
	2021~	構造解析学 I で使用している薬学機器分析学のNMRの部分について改定し、 執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
Ⅲ 研究活動	!	
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Kimura K., Hirota Y., Kuwahara S., Takeuchi A., Tode C., Wada A., Osakabe N., Suhara Y.	論文	J. Med. Chem., 2017, 60, 2591-2596. "Synthesis of novel synthetic vitamin K analogues prepared by introduction of a heteroatom and a phenyl group that induce highly selective neuronal differentiation of neuronal progenitor cells"
Teraoka R. Fukami T. Furuishi T. Nagase H. Ueda H. Tode C. Yutani R. Kitagawa S. Sakane T.	論文	Chem. Pharm. Bull. (2019), 67(9), 940-944. "Improving the solid-state photostability of furosemide by its cocrystal formation"
Yutani R. Haku R. Teraoka R. Tode C. Koide T. Kitagawa S. Sakane T. Fukami T.	論文	Crystals (2019), 9(11), 553. "Comparative evaluation of the photostability of carbamazepine polymorphs and cocrystals"
Nishioka T. Endo-Umeda K. Ito Y. Shimoda A. Takeuchi A. Tode C. Hirota Y. Osakabe N. Makishima M. Suhara Y.	論文	Molecules (2019), 24(23), 4316. "Synthesis and in vitro evaluation of novel liver X receptor agonists based on naphthoquinone derivatives"
Takeuchi A. Tode C. Nishino M. Wijaya Y.O.S. Niba E. Tabe E. Awano H. Takeshima Y. Saito T. Saito K. Lai P.S. Bouike Y. Nishio H. Shinohara M.	論文	Kobe Journal of Medical Sciences (2019), 65(3), E95- E99. "Newborn screening for spinal muscular atrophy: DNA preparation from dried blood spot and DNA polymerase selection in PCR"

	shimura H. Hirota Y. Soda S. Okazeri M. Takagi Y. keuchi A. Tode C. Kamao M. Osakabe N. Suhara Y.		Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters (2020), 30(8),127059. "Study on structure-activity relationship of vitamin K derivatives: Conversion of the naphthoquinone part into anather aromatic ring and evaluation of their neuronal differentiation-inducing activity"		
Rochmah M.A.R. WijayaY.O.S. Harahar Takeuchi A. Ohuchi K. Shimazawa M. Saito T. et al		論文	Kobe Journal of Medical Sciences (2020), 66(1), E1-E11. "Phosphoethanolamine elevation in plasma of spinal muscular atrophy type 1 patients"		
Tode C. Maoka T. Takeuchi A.		論文	Carotenoid Science (2020), 24, 24-34. "Application of DOSY Experimentto Analysis of Astaxanthin and it's Analogues"		
2. 学会発表	_		•		
演題名		発表年・月	学会名		
ζ-caroteneの合成研究-	その1-	2019. 9	第33回カロテノイド研究談話会		
固体NMRでみるロキソプロフェ	ン製剤の経時変化	2017. 3	日本薬学会 第137年会		
レチノイン酸結晶多形の固体NM	R解析-その2-	2016. 6	第30回カロテノイド研究談話会		
固体NMRを用いた先発および後多	後医薬品の物性評価	2016. 3	日本薬学会 第136年会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動				
1993年12月~	日本薬学会会員				
1995年~	日本カロテノイド学会会員				
2006年~	日本核磁気共鳴学会会員				

所属 生命有機化学研究室 職名 講師	氏名 沖津 貴志				
I 教育活動		=			
教育実践上の主な業績	年月日		概		要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2006年4月~2017年3月	プディス		またこれまでの講義	▷人数での実習並びにグルー で学んだことと実習内容とを めた。
	2009年4月~2010年9月	1年次配	当の情報リテラシーの講	議において進行度の	遅い学生のサポートを行った。
	2011年4月~2012年9月		当の化学系基礎演習 Ⅰ 合わせて解説すること		Fの小テストを毎回行い、学生の めた。
		が、基礎	りなところから復習した.	上で問題を解いてもら	まで受講した講義内容ではある い、適宜学生に黒板に答案を書 なるように努めている。
	2014年9月 - 2020年3月	半に問題 ば有機化	を解いてもらい、理解を	:深める工夫を行っていことを学生に認識して	項を板書、解説した上で講義後 いる。一般的な規則を理解できれ こもらえるよう、教科書の章末問題
		欲しい内 行えるよう いる。	谷を盛り込んた「フレテ」 に工夫した。また、これ	スト」を実習前に実施しまでの「有機化学系II	習を行うにあたって理解していて し、実習をより能動的・積極的に I実習」のSGDを引き続き行って
	2018年4月〜現在に至る	3年次配置 てもらい、	当の合成化学IIの講義を 各班が発表、学生と教	と行っている。 与えた詞 員からの質疑応答をき	果題の合成戦略をSGDで立案し 受けるという形式をとっている。
	2020年4月〜現在に至る	範囲をし 解いても	っかり復習しながら、合用	页化字Ⅰの範囲を講義 ドをWebClassからダウ	で受講済みの有機化学I〜IVの している。講義の途中で問題を フンロードできるようにするなど、

	T	
2 作成した教科書、教材、参考書	有機化	ビ学演習のテキストの取り纏めを担当し、毎年改訂を行っている。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
Ⅱ 研究活動	1	
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Okitsu T., Kobayashi K., Kan R., Yoshida Y., Matsui Y., Wada A.	論文	Org. Lett. 2017, 19(17), 4592-4595. "3-Methylene-4-amido-1,2-diazetidine as a Formal 1,4-Dipole Precursor: Lewis Acid-Catalyzed Nucleophilic Addition with Silylated Nucleophiles"
Okitsu T., Matsuyama T., Yamashita T., Ishizuka T., Yawo H., Imamoto Y., Shichida Y., Wada A.	論文	Chem. Pharm. Bull. 2017, 65(4), 356-358. "Alternative Formation of Red-Shifted Channelrhodopsins: Noncovalent Incorporation with Retinal-Based Enamine-Type Schiff Bases and Mutated Channelopsin"
Okitsu T., Nakahigashi H., Sugihara R., Fukuda I., Tsuji S., In Y., Wada A.	論文	Chem. Eur. J. 2018, 24(70), 18638-18642. "Silyl Group-Directed 6-exo-dig Iodocyclization of Homopropargylic Carbamates and Amides"
Okitsu, T., Namura, A., Kondo, S., Tada, S., Yanagida, M., Wada, A.	論文	Org. Chem. Front. 2020, 7(6), 879-884. "Ynamides enabled 6-, 7-, and 8-endo-dig iodocyclization of ethoxyethyl ethers: rapid construction of medium-sized oxacycles at room temperature"
Okitsu, T., Horike, A., Shimazawa, N., Wada, A.	論文	Org. Biomol. Chem. 2020, 18(18), 3501-3511. "A dearomative ipso-iodocyclization/desymmetrization sequence leading to optically active tricyclic piperazine scaffolds"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

シリル基を配向基とするプロパルギルグリシン類のヨード環 化反応	2016年11月	第42回反応と合成の進歩シンポジウム
イナミドのヨード環化反応を利用した中員環エーテルの即時 合成	2017年11月	第43回反応と合成の進歩シンポジウム
σ-求核剤による3-メチレン-4-アミド-1, 2-ジアゼチジンの求 核的開環反応	2018年11月	第44回反応と合成の進歩シンポジウム
Iodocyclization of Ynamides for the Construction of Medium-Sized Oxacycles	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress
メトキシナフタレンとアルキンの分子内Diels-Alder反応	2020年3月	日本薬学会第140年会
3. その他 (講演)		
演題名	発表年・月	学会名
ヨード環化反応を基軸とする複素環合成	2016年3月	創薬基盤化学研究 若手セミナー 第14回特別講演会
窒素共役型多重結合の特性を生かした複素環合成法の開発	2016年6月	第2回近畿薬学シンポジウム:化学系の若い力
レチノイン酸を母核とするRXRアゴニストの探索	2016年10月	日本レチノイド研究会第27回学術集会

医薬品合成を指向した基質設計とカチオン性ヨウ素試薬を鍵 とする複素環合成法の開発		2020年11月	第18回有機合成化学協会関西支部賞受賞講演会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活	·動				
2001年4月~現在に至る	日本薬学会会員	日本薬学会会員			
2006年4月~2020年3月	日本カロテノイド研究会会員				
2007年4月~現在に至る	有機合成化学協会会員				
2009年4月~2020年3月	日本ビタミン学会会員				
2011年4月~現在に至る	ョウ素学会会員				
2011年4月~2014年3月	日本薬学会 ファルマシアトピックス専門小委員				
2013年4月~2020年3月	日本レチノイド学会会員				
2019年3月~現在に至る	日本薬学会代議員				

所属 総合教	女育研究センター	職名 講師	氏名 藤波 綾					
I 教育活	動		•					
	教育実施	践上の主な業績	年月日			概	要	
1 教育	内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)	1995年度〜現在に至る	学生実習 たってい	の円滑ないる。また	進行を促すための準	結果について考察	Pは実習室で指導にあ 琴するなどのディスカッ
			2004, 2007~2009年度	情報リテ	ラシー	講義の円滑な進行	のためのサポート	、を行った。
		2011年度~現在に至る	薬学英語	入門II				
			3年次生し しながら いる。20 資料を多	こ対して、 、それま)20年度か く準備す	での専門科目の講義 らはオンライン講義 るとともに、学生の	内容をも復習でき となっているため	的な英語の知識を習得 るように講義を行って ら、内容の理解に必要な 引づくりを行っている。	
		2015年度〜現在に至る	3年次生		血液に関する臨床権	倹査の項目と意義	,異常値に対する見方	
			2016. 10. 1~2019. 9. 30	6年次生	こ対して、			患の関係および国試に うことを伝えた。
			2020.10.1~現在に至る	総合薬学	講座(実	務)		
					薬物療法の実践に まおよび相互作用に		量」について注意すべいる。	
			2019. 4. 1~現在に至る	実務実習	事前教育			
					5年次に行われる実 、セルフメディケー		な技能や態度(特に調 5導している。	
			2020.4.1~現在に至る	感染制御	学II			

		適切な感染症診療を行うための臨床検査ならびに肺炎やインフルエンザな 感染症についての予防と治療について解説している。		
2 作成した教科書、教材、参考書	2016年3月	Buman Reader -life and disease-第2版(京都廣川		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2016年8月	第1回日2	本薬学教育学会 ポスター発表	
4 その他教育活動上特記すべき事項	2016年4月	神戸薬科大学教育改革プログラム 基礎教育センターの協力のもと、1,2年次基礎科目からの統合的学習へとして基礎科目と臨床科目のコラボレーション授業を行った。		
Ⅱ 研究活動		ı		
1. 著書・論文等				
氏名	種別		内容	
児玉典子、川西和子、田中将史、藤波 綾	著書		Human Reader -life and disease-第2版(京都廣川書店) 2016.3	
Imoto S, Kim SR, Amano K, Iio E, Yoon S, Hirohata S, Yano Y, Ishikawa T, Katsushima S, Komeda T, Fukunaga T, Chung H, Kokuryu H, Horie Y, Hatae T, Fujinami A, Kim SK, Kudo M, Tanaka Y.	論文 Serum Hepatiti		Dig Dis. 2017;35(6):531-40. "Serum IFN-λ3 Levels Correlate with Serum Hepatitis C Virus RNA Levels in Symptomatic Patients with Acute Hepatitis C."	
藤波 綾、小山淳子、児玉典子	報告		Libra, 2018; 18: 59-71. 血糖値測定の講義を介した糖とその誘導体の重要性の理解度に関する調査・考察―基礎科目と臨床科目のコラボレーション授業を目指して―	
Ohta M, Fujinami A, Oishi K, Kobayashi N, Ohnishi K, Ohkura N.	論文		J. Diet Suppl., 2019; 16(3):331-344. "Ashitaba (Angelica Keiskei) exudate prevents increases in plasminogen activator inhibitor-1 induced by obesity in Tsumura Suzuki Obese Diabetic Mice."	
2. 学会発表		•		
演題名	発表年・月		学会名	

2型糖尿病患者および妊娠糖尿病患者に 濃度	における血清中AIF-1 2016年・12月		第56回日本臨床化学会年次学術集会		
脂肪細胞とマクロファージの共培養系 分泌動態および高血糖、肥大化の影響	こおけるTNF-alphaの	2017年・12月	ConBio2017		
高脂肪食負荷マウスにおけるアシタバ 糖尿病作用	由来成分カルコンの抗	2018年・3月	日本薬学会第138年会		
脳梗塞におけるアディポネクチンアイ! 義	ソフォームの臨床的意	2019年・3月	日本薬学会第139年会		
野生型マウスのメタボリックシンドロ・ ナットウキナーゼ摂取の効果	野生型マウスのメタボリックシンドローム関連因子に及ぼす ナットウキナーゼ摂取の効果		日本薬学会第140年会		
3. その他					
演題名		発表年・月	講演内容		
ポリフェノールの多彩な魅力 ーポリフェノールの王様 アシタバカ	カルコンを通して一 2017年・7月		第18回神戸薬科大学健康食品講座		
ポリフェノールの多彩な魅力 ーポリフェノールの王様 アシタバカ	ルコンを通して-	2020年	2020年度神戸薬科大学健康食品講座		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動				
1995年8月~現在に至る	日本臨床化学会会員				
1996年1月~現在に至る	日本薬学会会員				
2001年1月~現在に至る	日本生化学会会員				
2016年4月~現在に至る	初年次教育学会会員				
2016年4月~現在に至る	日本薬学教育学会会員				
2019年4月~現在に至る	日本薬剤師会会員				
2019年4月~現在に至る	日本病院薬剤師会会員				

所属 医薬品情報学研究室 職名	講師	氏名 土生 康司					
I 教育活動							
教育実践上の主な	業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評	価等を含む) 2	2013~現在	CBT対策	委員、実施委員			
	2	2013~現在	実務実習	事前教育委員会委員			
	2	2014~現在	医薬品情	報学(4年生前期)			
	2	2014~現在	薬学入門	(1年生前期)			
	2	2014~現在 情報リ		「報リテラシー(1年生前期)			
	2	2014~2017 薬剤設計		計学II(旧機能性製剤学)(4年前期、2コマ)			
	2	2015~現在 実務実習運営委員会委員					
	2	2021.4~現在	総合教育研究センター統括部門(兼任)				
2 作成した教科書、教材、参考書	2	2017. 4	医薬品情	報学(廣川書店)執筆、講家	 度用プリント冊子作成		
	2	018.9 臨床への有機と薬理からのアプローチ(京都廣川書店)執筆		チ(京都廣川書店)執筆			
	2	2019. 1	みてわか	る薬学 図解医薬品情報学改	女訂第4版(南山堂)執筆		
3 教育方法・教育実践に関する発	表、講演等 2			学習の構築〜臨床薬学-薬理 月、土生 康司、宮田 興子	里学-有機化学の橋渡し教育を目指して~ 第1回薬学教育学会.		
	2			報 様々な情報源、その選択 ニングセミナー	と活用 土生 康司 第17回薬剤師のた		

	PMT7 U	薬学統合学習の構築 第2報 — 臨床薬学-薬理学-有機化学の橋渡し教育を目指して 土生 康司、水谷 暢明、宮田 興子 第2回薬学教育学会.
	2017. 10	医薬品、サプリメントの 特徴にあった情報活用を考える 土生 康司 サプリメントフォーラム2017
		薬学統合学習の構築 第3報 一低学年次生への臨床薬学・薬理学・有機化学の 橋渡し教育の導入— 土生康司、水谷暢明、宮田興子 第3回薬学教育学会.
4 その他教育活動上特記すべき事項	2013~現在	情報委員会委員
	2014~2017.3	大学広報委員会委員
	2015~現在	個人情報保護委員会委員
	2016. 4~2018. 3	図書委員会委員
	2018.4~現在	国家試験対策委員会委員
	2018.4~現在	動物実験委員会委員
	2021.4~現在	インスティテューショナル・リサーチ委員会委員

Ⅱ 研究活動

1. 著書・論文等

氏名	種別	内容
八巻耕也,上田昌史,上田久美子,江本憲昭,水谷暢明, 池田宏二,八木敬子,田中将史,土生康司,中山喜明, 武田紀彦,森脇健介,北河修治		基礎から臨床までを繋げる分野横断的統合型初年次導入教育「薬学入門」の学習効果 薬学雑誌 136, 1051-1064 (2016).
八巻耕也、池田宏二、上田久美子、土生康司、中山喜明、 武田紀彦、森脇健介、和田昭盛、小山淳子、児玉典子、 北河修治		分野横断的統合型初年次導入科目「薬学入門」へのミニッツペーパー 導入が生み出す学習意欲と学習効果 薬学雑誌 137, 1285-1299 (2017).
上田久美子、寺岡麗子、八巻耕也、土生康司、宮田興子、 北河修治		チーム基盤型学習を用いた分野横断統合演習の構築の試み 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2017-012 (2017).
土生康司、水谷暢明、宮田興子		基礎系分野を臨床的課題の理解に繋ぐ思考プロセスを体験するための ジグソー型学習の実施 薬学教育 doi: 10.24489/jjphe.2020-018 (2020).
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

B型肝炎再活性化リスクのあるプレドニゾロン服用患者の抽 出と疑義照会に向けたプログラム構築	2018. 3	日本薬学会第138年会		
大阪赤十字病院におけるがん疼痛コントロールマニュアル改 定に伴うオピオイド持続静注処方の内容及び指示の変化に関 する調査	2018. 3	日本薬学会第138年会		
PMDA 添付文書情報検索サイトにおける糖尿病薬識別コードの 登録様式の多様性	2019. 3	日本薬学会第139年会		
薬剤鑑別におけるPMDA 添付文書情報検索サイトの活用状況と ニーズに関する病院薬剤師へのアンケート調査	2019. 3	日本薬学会第139年会		
近隣5病院統一の問い合わせ簡素化に対する医師の意識調査	2019. 11	第29回日本医療薬学会年会		
3. シンポジウム等				
シンポジウム『新時代の医薬品リスクマネジメント 〜新たなハザードに対して』 医薬品情報を活用するベースはできているか 〜ドイツの状況から再考〜	2019. 3	日本薬学会第139年会		
臨床の諸問題を基礎薬学の知識でどのようにひも解くか SGLT2阻害薬について 臨床を考えた数字の読み方	2018. 10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム		
臨床から基礎までをつなぐ薬学教育をどのように構築するか 低学年での臨床から基礎薬学までをつなぐ薬学教育 〜チー ム基盤型教育 (TBL)を活用する橋渡し教育〜	2018. 10	神戸薬科大学 臨床・基礎薬学連携シンポジウム		
教育講演 学会発表のhow-to	2018. 2	近畿薬剤師合同学術大会2018		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
2003~現在 日本医療薬学会会員				

2013~現在	日本医薬品情報学会会員
2014~現在	日本薬学会会員
2003~現在	日本病院薬剤師会会員
2010~現在	日本薬剤師会会員
2007~現在	日本医療薬学会認定薬剤師

所属 機能性分子化学研究室 職名 講師	氏名 前田 秀子			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2010年4月~現在に至る 1年生に「情報リテラシー」(前期)の講義をPower Pointを使用して行った。 ワープロソフトやプレゼンテーションソフトで課題を作成した。			
	2009年4月~現在に至る	1年生に	基礎化学実習」(後期)を教え	えた。
		毎回,誤	!題の提出をさせ,終了時に実	験ノートの提出を行った。
	2015年10月~現在に至る	1年生に	「無機・錯体化学」(後期)を	を教えた。
2 作成した教科書、教材、参考書				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項	2007年10月~2009年1月 神戸大学の非常勤講師として、1年生に化学実験を教えた。			
Ⅲ 研究活動				
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Maeda H., Moriwaki A., Nariai H., Nakayama H.	論文			32, 5-9. "Two sites phosphonylation of sphonate inaAqueous solution"

Maeda H., Iga Y., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2016, 86, 337-342. "Characterization of inclusion complexes of betahistine with b-cyclodextrin and evaluation of their anti-humidity properties"
Maeda H., Obata S., Nakayama H.	論文	J. Incl. Phenom. Macrocycl. Chem. 2018, 91(3-4), 125-131. "Preparation and characterization of the inclusion complexes of equol with sulfobutylether-b-cyclodextrin: Their antioxidant activity and dissolution evaluation"
Maeda H., Morita K., Murokawa A., Matsuo R., Nariai H., Nakayama H.	論文	Phosphorus Res. Bull. 2019, 35: 55-58. "Introduction of Phosphonate Group into Kojic acid by Diphosphonate"
Maeda H., Shiobara R., Tanaka M., Kajinami A., Nakayama H.	論文	Drug Dev. Ind. Pharm., 2021, 47: 535-41. "Effect of mechanochemical inclusion of triamterene into sulfobutyletherbeta-cyclodextrin and its improved dissolution behavior"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
シクロデキストリンによるエトドラクの包接能評価	2017. 03. 27	日本薬学会第137年会
ヒドロキシプロリンの保湿性向上を目指したシクロ三リン酸 塩によるリン酸修飾	2017. 08. 25	第26回無機リン化学討論会
シクロデキストリンによるプラバスタチンの包接能評価	2019. 09. 12	第36回シクロデキストリンシンポジウム
美白成分の浸透性の向上を目指したジホスホン酸塩によるリン酸修飾	2020. 09. 25	第29回無機リン化学討論会

シクロデキストリンによるルシノールのシナーゼ阻害活性の評価	の溶解性の改善とチロ	2021. 03. 27	日本薬学会第141年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
2010年10月~2018年10月	日本無機リン化学会学会誌編集委員		
2018年10月~現在に至る	日本無機リン化学会学会誌副編集委員長		
2020年9月~現在に至る	日本無機リン化学会総務担当理事		

所属 総合教育研究センター 職名 講師	氏名 竹下 治範				
I 教育活動					
教育実践上の主な業績	年月日			概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
	2014年~	『実務実 局) にス	習事前教育』おい ムーズに取り組み		る長期実務実習(病院・薬 はめられる知識・技能・態度の
	2014年~	を用いる うな工夫	とともに計算問題 を行った。また、	圓等も作成して、実務実	値応、輸液療法について、実薬 経習に先立つ知識をえられるよ は生が医療事故インシデントを
	2014年~		学講座』の授業で	講座」を担当している。 では、病院薬剤師業務や	。 P注射薬、輸液療法について授
	2014年~	『調剤学 担は、注 現場の経	Ⅱ』の授業では、 射薬の調剤(計数	数・無菌調製)、代表的 と多く取り入れ、最新の	を教員と分担している。私の分 日な輸液と適応、栄養輸液など ロトピックスを交えて興味をも
	2017年~	内容と臨		えて、臨床経験を活かし	。倫理の4原則など理論的な て学生が理解しやすいよう補

	2018年~	4年生を対象に「処方解析学1」「処方解析2」を担当している。処方解析学1では関節リウマチをメインに膠原病について、また処方解析学2では、酸関連疾患を4年生に、薬の知識だけでなく、症状、臨床検査値な幅広い知識と実務実習に役立つ内容を意識して講義している。
	2019年~	「在宅医療演習」の開講の初年度をむかえるが、約3年に渡り準備を行ってきた。甲南女子大学の看護リハビリテーション学部(看護・理学)とともに、在宅医療(地域包括ケアシステム)を想定したIPW(多職種連携)の合同授業の運営に携わり、次世代の多職種のあり方について学生が学べるようサポートした。 2020年度は、コロナ禍なのでオンライン開催の準備を行った。
	2020年~	「感染制御学Ⅱ」の開講のため、結核感染症、小児感染症、泌尿器感染症及び、感染に関わるエビデンスやアウトブレイク対応法などの授業準備を行った。最新のCovid-19感染など、感染症の話題などにも触れた。
2 作成した教科書、教材、参考書		
薬学生・薬剤師のための 添付文書徹底活用術 (薬事日報社, 2016)	2016年10月1日	薬剤師の業務で起こり得る10の事例について、可能な限り添付文書やインタ ビューフォームで解決する方法を紹介し、薬学生・薬剤師が臨床現場で解決し ていけるようなヒントを与える構成となっている。
八野芳巳,高取真吾,柴田隆司,北小路 学,大嶋耐之,難波 弘行,緒方 憲太郎,枡渕泰宏,八重徹司,林雅彦,垣東英 史,冨永宏治,名德倫明,二宮昌樹,竹下治範,島田憲一, 榎屋友幸,コンパス 調剤学 改訂第3版,南江堂	2020年2月15日	改訂モデルコアカリキュラムに合わせて、最新の調剤業務、その他周辺情報など分かりやすい、基礎的な教科書として執筆した。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
Ⅱ 研究活動		<u> </u>

1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
波多江 崇,石田好宏,伊東真知,大島沙紀,藤森可純,森口沙里,猪野 彩,竹下治範,辰見明俊,田内義彦, 濵口常男	論文	日本人の変形性膝関節症に対するグルコサミン塩酸塩およびN-アセチルグルコサミンの効果:二重盲検プラセボ対照ランダム比較試験のメタアナリシス,日本地域薬局学会誌,4(1),2016
波多江 崇,田中智啓,猪野 彩,田内義彦,竹下治範,辰見明俊,濵口常男	論文	日本人を対象とした食後血糖上昇に対する難消化性デキストリンの効果:二重盲検プラセボ対照ランダム化比較試験のメタアナリシス,医薬品情報学,18(4)67-72,2017
竹下治範,井上知美,髙瀬尚武,波多江 崇,室井延之, 濵口常男	論文	副腎皮質ステロイド軟膏剤の適正使用に向けたFinger-tip unitによる服薬指導の実態調査と製剤学的使用性の評価, 医薬品情報学,18(4)48-54,2017
竹下治範, 北 早織, 若林知子, 藪田有沙, 猪野 彩, 原田祐 希, 中川素子, 中川道昭, 波多江 崇, 濵口常男	論文	PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響,医薬品情報学,20(2) 98-103, 2018
竹下治範,藪田有沙,北 早織,若林知子,猪野 彩,原田祐 希,中川素子,中川道昭,波多江 崇,濵口常男	論文	患者がPTP包装から錠剤を出しやすくする手技についての科学的検討,薬局薬学,12(1)1-8,2020
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
PTP包装からの錠剤の押し出し方法の調査	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼす製剤間の影響	2016年3月	日本薬学会第136年会
PTP包装からの錠剤の押し出し力に及ぼすフィルムの素材及び 膜厚の影響	2018年3月	日本薬学会第139年会

NDBオープンデータを用いた乳幼児にお 処方実態調査	らける抗ヒスタミン薬の	2018年3月	日本薬学会第138年会	
高湿度下における市販錠剤の重量と硬度に及ぼす包装素材の 相違について		2019年3月	日本薬学会第139年会	
種々の恒温恒湿条件下でのPTP包装の防湿効果と錠剤の押し出 し易さに及ぼすPTP素材の影響		2020年3月	日本薬学会第140年会	
痙攣またはてんかんの既往歴のある患 わり	者に対する薬剤師の関	2020年9月	第31回日本医療薬学会年会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動			
2001年から現在	日本薬学会会員	日本薬学会会員		
2003年から現在	日本病院薬剤師会会員	日本病院薬剤師会会員		
2005年から現在	日本医療薬学会会員	日本医療薬学会会員		
2007年から現在	日本リウマチ学会会員			
2017年から現在	日本医薬品情報学会会員			
2019年から現在	日本薬局学会会員	日本薬局学会会員		
2008年から現在	日本薬剤師研修センター	-認定薬剤師 第08-30718号		
2008年から現在	日本薬剤師研修センター認定 実務実習指導薬剤師 実習指導08102621号			
2008年から現在	日本病院薬剤師会 生涯研修履修認定 第6504号			
2009年から現在	日本医療薬学会認定薬剤	利師 第09-0035号		
2019年から現在	日本医療薬学会認定指導	尊薬剤師 第19-0021号		

所属 薬品化学研究室 職名 講師	氏名 武田 紀彦			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	2015年10月~現在	化学反応 試験から	を理解してもらうように努めて	いる。医薬品合成を実施し、基本的な いる。未知検体においては様々な定性 こ、未知検体の正しい構造へ導ける論理
	2015年4月~現在	習う有機 おける官 心に説明 行うこと	終化学」を意識しながら、NSAIDs 『能基の役割や性質、どのように 引するように心がけている。また :で、薬は有機化合物であり、有	学の部分を担当している。「これからsを題材に講義をしている。薬物分子にご効果を示すのか、有機化学の視点を中こスモールグループディスカッションを『機化学、物理化学、薬理学、薬剤学な好してもらうように意識している。
	2017年9月~現在	感染症治 官能基か 薬剤名に 作用を持	☆療薬」を担当している。医薬品 ぶ果たす役割、薬理効果を示すそ こよる単なる記憶ではなく、医薬	謝系に作用する医薬品、抗がん剤、 品における構造式の重要性とその意味、 この理由などを中心に説明している。 選品の構造式をみれば、どのような薬理 後性・塩基性などの物理的性質がイメー っうように心がけている。
	2017年9月~現在	まとめて 学生には 大事なす	であるが、すべての内容がつなが は適宜反応機構や解答などを板書	ている。これまで習った講義内容の総 、り、より深く理解してもらう目的で、 等してもらう。学生がわからない箇所、 、しでも理解が深まるように意識しなが
	2018年8月~現在	活用し、 トリアル 子を設定 論・考慮	与えられた分子の合理的な合成 で逆合成解析を説明し、各自繍 Eし、スモールグループディスカ	ている。これまで習得した化学反応を は経路を提案してもらう。始めにチュー 東習問題を解いてもらう。次に複雑な分 カッションを通して様々な合成経路を議 レープ発表してもらう。各グループには もように指導している。

	2020年4月~現在	6年次の「がん薬物療法論(分担)」の「低分子の細胞障害性抗がん薬」を担当している。有機化学の観点から抗がん薬の構造式の重要性、官能基が果たす役割、その作用機序を含めて説明している。特に抗がん薬にはヘテロ環が多く含まれているため、ヘテロ環の分類、化学的性質、反応性だけでなく生体内DNA関連のヘテロ環の説明から始まり、古典的なDNAのアルキル化による抗がん薬からチロシンキナーゼ阻害薬である分子標的薬まで幅広く、理解してもらえるように意識している。
2 作成した教科書、教材、参考書		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
Ⅲ 研究活動	1	
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Takeda N., Futaki E., Kobori Y., Ueda M., Miyata O.	論文	Angew. Chem. Int. Ed. 2017, 56, 16342-16346. "Nucleophilic Arylation of N , θ -Ketene Acetals with Triaryl Aluminum Reagents: Access to α -Aryl Amides through an Umpolung Process"
Takeda N., Furuishi M., Nishijima Y., Futaki E., Ueda M., Shinada T., Miyata O.	論文	Org. Biomol. Chem. 2018, 16, 8940-8943. "Chiral isoxazolidine-mediated stereoselective umpolung α -phenylation of methyl ketones"
Takeda N., Arisawa N., Miyamoto M., Kobori Y., Shinada T., Miyata O., Ueda M.	論文	Org. Chem. Front. 2019, 6, 3721-3724. "Reagent-controlled regiodivergence in the [3,3]-sigmatropic rearrangement of N-(acyloxy)enamides"

Takeda N., Kobori Y., Okamura K., Yasui M., Ueda M.	論文	Org. Lett., 2020, 22(24), 9740-9744. "Sequential Nucleophilic Arylation/Ring-Contractive Rearrangement of N-Alkoxylactams" doi: 10.1021/acs.orglett.0c03821.	
2.学会発表(2018年度に行った学会発表)			
演題名	発表年・月	学会名	
アミドの極性転換反応: α 位および γ 位への求核剤導入 法の開発	2019年5月	第17回次世代を担う有機化学シンポジウム	
Synthesis of pyrazoles from conjugated hydrazone through acid-promoted β-protonation/nucleophilic addition/cyclization/aromatization sequence	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress (27th ISCHC)	
ヒドラゾンを利用した形式的[3+2]付加環化反応による トリアゾール合成	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会·大会	
連続へテロ原子を有するラクタムを利用したアルキン 導入を伴う連続反応の開発	2019年10月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム	
ヒドラゾンの極性転換反応を利用した新規トリアゾール 合成法の開発	2020年3月	日本薬学会第139年会(オンライン)	
3. その他 (講演など)			
演題名	発表年・月	学会名	
連続ヘテロ原子が関与するアミドの化学	2018年8月	第38回有機合成若手セミナー 「明日の有機合成を担う人のために」(依頼講演)	

N-アルコキシアミドを用いた新分子変換法		2019年7月	第5回関西薬学シンポジウム:化学系の若い力 (依頼講演)	
アミド・エナミドが創り出す新たな有機合成反応の開発 〜連続へテロ原子を組み込むと何ができる?〜		2020年1月	ヘテロ原子部会第3回懇話会(依頼講演)	
Ⅲ 学会等および社会における主な活	動			
2003年~現在に至る	日本薬学会会員			
2010年~現在に至る	有機合成化学協会会員			
2015年~現在に至る	近畿化学協会会員			
2019年~現在に至る	近畿化学協会へテロ原	近畿化学協会へテロ原子部会幹事		

所属 エクステンションセンター 職名 講師	氏名 鎌尾 まや			
I 教育活動	•			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	1997. 4~2017. 3	書き込み	☑学系実習」 ▷式実験プロトコールを導入し受診 習の教育効果を向上させた。	講前の事前学習を促進することによ
	2017.4~現在に至る	施し、科ルス感染	□け健康食品講座の受講に加え、例 □け健康食品講座の受講に加え、例 □学的根拠に対する考え方の教育に	建康食品に関する情報検索の演習を実 こ努めた。2020年度は新型コロナウイ を導入し、WEBによるレポート提出に
	2017.4~現在に至る	し、学生に努めた	・ 対象としたグループディスカッミ こと薬剤師が共に学ぶ場を提供する	ス感染症対応として、e-learning形式
	2019. 10〜現在に至る	衛生薬学かるよう		て、どこが重要ポイントであるかがわ D関連する法・制度の変更点について
	2020.4~現在に至る			learning形式の講義を実施した。最 者の理解の向上に努めた。
2 作成した教科書、教材、参考書	1997. 4~2017. 3	神戸薬科	A 大学衛生薬学系実習書	
	2007. 4~2017. 3	書き込み	*式実験プロトコール(プリント)	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等	2018. 3. 28		ト ト大学薬剤師生涯研修支援事業であ 明査(日本薬学会第138年会)	あるシンポジウムにおける10年間の
	2019. 2. 22		ト大学における生涯研修支援事業 & 習慣病予防のための機能性食品開発	と健康食品領域研修認定薬剤師制度 発に関する研究会)
	2019. 3. 22		ト大学における「健康食品領域研修 を講者の調査(日本薬学会第139年	冬認定薬剤師制度」に基づく研修プロ 会)

	2019. 8. 24	神戸薬科大学における薬剤師を対象とした在宅医療研修プログラムの受講者調査及び学部学生を対象とした多職種連携1日見学実習の試み(第4回日本薬学教育学会大会)
	2019. 8. 25	薬剤師の生涯研修と神戸薬科大学における生涯研修支援事業(令和元年度 神 戸薬科大学同窓会支部生涯研修企画委員夏季研修会)
	2019. 10. 17	薬学における健康食品分野への取り組み 一神戸薬科大学における健康食品領域研修認定薬剤師制度について— (レギュラトリーサイエンス財団 大阪事業所職員研修会)
	2020. 3. 28	神戸薬科大学における在宅医療に関する薬剤師生涯研修の有用性と問題点評価 (日本薬学会第140年会)
	2020. 9. 12	神戸薬科大学における「健康食品領域研修認定薬剤師制度」に基づく研修プログラム受講者に対するアンケート調査 -2018年度および2019年度の比較分析 - (第5回薬学教育学会大会 シンポジウム)
	2020. 9. 13	薬学教育への「栄養薬学」の導入とその課題:大学教員、生涯研修担当者の立場から 一より良い薬物治療と健康サポートに貢献するために― (第5回薬学教育学会大会)
4 その他教育活動上特記すべき事項	2018. 6	2018 (平成30) 年度 学長裁量経費教育改革プログラム採択 「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推 進」
	2019. 4	2019年度 学長裁量経費教育改革プログラム採択 「生涯研修支援プログラムと連携した地域・在宅医療と多職種連携教育の推 進」 (継続)
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tsugawa N, Uenishi K, Ishida H, Ozaki R, Takase T, Minekami T, Uchino Y, <u>Kamao M</u> , Okano T	論文	Association between vitamin D status and serum parathyroid hormone concentration and calcaneal stiffness in Japanese adolescents: sex differences in susceptibility to vitamin D deficiency. J. Bone Miner. Metab., 34(4), 464-74, 2016 日本人思春期男女を対象として血清ビタミンD代謝物濃度や骨密度について調査した。25-hydroxyvitamin D濃度は男子より女子で低い傾向を示し、男子では30%、女子では47%がビタミンD不足領域であった。また、踵骨骨密度に与える影響はカルシウム摂取量よりビタミンD摂取量の方が強く、思春期においてビタミンD摂取が骨密度の向上に有用であることを示した。また、25-hydroxyvitamin D濃度が50 nmol/Lを保つために必要なビタミンD摂取量を、男子では12μg、女子では14μgと推定した。本人担当部分:ビタミンD濃度の測定とデータ解析

論文	Determination of Menadione by Liquid Chromatography-Tandem Mass Spectrometry Using Pseudo Multiple Reaction Monitoring. Anal. Sci., 33(7), 863-867, 2017 疑似的なmultiple reaction monitoring (MRM)を用いたLC-MS/MS法により、従来定量が困難であった側鎖を持たないビタミンKである menadione (MD)の定量法を確立した。本法によるMDおよび重水素化MDの検出限界は40 pgあるいは2 pgであり、日内変動、日差変動は5.4-8.2%と良好な値を示した。本法により尿中、血漿中、細胞あるいは培地抽出物中のMDの定量が可能であった。本人担当部分:研究デザイン、測定およびデータ解析
論文	Eldecalcitol is more effective in promoting osteogenesis than alfacalcidol in Cyp27b1-knockout mice. PLoS One. 13, e0199856, 2018 ビタミンD誘導体のエルデカルシトールはアルファカルシドールよりも骨形成促進作用が強いことをビタミンD活性化酵素であるCYP27B1の遺伝子欠損マウスを用いて証明した。本人担当部分:CYP27B1遺伝子欠損マウスの維持・管理、ビタミンD濃度測定
総説	ビタミンDと生殖機能 最新女性医療, 6, 83-87, 2019 ビタミンDと女性の月経異常、着床、妊娠あるいは男性の精子機能と の関係について、最近の知見を概説した。
総説	Study on structure-activity relationship of vitamin K derivatives: Conversion of the naphthoquinone part into another aromatic ring and evaluation of their neuronal differentiation-inducing activity. Bioorg. Med. Chem. Lett. 30, 127059, 2020 ビタミンKのニューロン分化活性には、1,4-キノンと側鎖構造が重要であることを明らかにした。本人担当部分:ビタミンK誘導体の精製法開発、活性分析
発表年・月	学会名
2016. 6	日本ビタミン学会第68回大会,富山
2017. 3	日本薬学会第137回大会,仙台
	論文 総説 総説 発表年・月 2016.6

T	Т			
若齢ラットの血中25-Hydroxyvitamin D3濃度に対するvitamin D3および25-hydroxyvitamin D3の補給効果ならびにカルシウ ム摂取量の影響	2018. 6	日本ビタミン学会第70回大会,高槻		
血中25-hydroxyvitamin D3濃度に対するカルシウム摂取量の 影響ならびにvitamin D3および25-hydroxyvitamin D3の補給 効果の検討	2019. 6	日本ビタミン学会第71回大会,鳥取		
レチノイン酸側鎖とのハイブリッド構造を有する新規ビタミンK誘導体の合成と神経分化誘導作用の検討	2020. 9	日本ビタミン学会第72回大会,名古屋(WEB)		
3. その他				
演題名	発表年・月	学会名		
いきいきと元気に暮らすための骨の健康のお話	2018. 12	神戸薬科大学第15回健康サポートセミナー		
健康食品って大丈夫?	2019. 3	千代が丘つながりの場所〜エナガの家〜イベント 薬剤師に聞いてみよう!!		
一緒に学ぼう! 健康食品・サプリメントの正しい知識	2019. 9	神戸薬科大学第20回健康サポートセミナー		
薬学における健康食品分野への取り組み —神戸薬科大学に おける健康食品領域研修認定薬剤師制度について—	2019. 10	レギュラトリーサイエンス財団 大阪事業所職員研修会		
薬学教育への「栄養薬学」の導入とその課題:大学教員、生涯研修担当者の立場から 一より良い薬物治療と健康サポートに貢献するために一	2020. 9	第5回薬学教育学会大会		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
2019.6~ 消費者庁セカンドオピ	消費者庁セカンドオピニオン事業 健康食品の表示・広告に関する科学的根拠の妥当性評価における論文レビュー			

所属 薬理学研究室 職名 講師	氏名 泉 安彦				
I 教育活動					
教育実践上の主な業績	年月日			概	要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)					
(1) 本学薬学部学生への教育(講義)	2017年~現在	薬理学Ⅱ	(2年次後期)		
	2018年~現在	薬理学IV	(3年次前期)	(分担4コマ)	
	2018年~現在	医薬品毒	性学(4年次前	 (分担4コマ)	
	2017年~現在	総合薬学	講座(6年次後	後期)	
(2) 本学薬学部学生への教育(実習)	2017年~現在	薬理学実	習(3年次後	期)	
	2017年~現在	卒業研究 I、II (4年次、5年次)研究室に配属された学部学生に対して研究指導を実施。		された学部学生に対して	
(3) 本学薬学研究科大学院生への教育	2018, 2020年	病態薬理	生化学特論(後期)	
(4) 他大学での講義	2017年11月2,9,30日, 12月7日				
	2017年12月25日	京都大学	<学薬学部にて薬理学Ⅲの講義を実施。		
	2017年12月1日	京都大学大学院薬学研究科にて基礎医療薬科学特論IIの講義を実施。			学特論IIの講義を実施。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし	,		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし	,		
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし	,		
Ⅲ 研究活動	II 研究活動				
1. 著書・論文等					

氏名	種別	内容
Masaki Y, Izumi Y, Matsumura A, Akaike A, Kume T.	論文	Protective effect of Nrf2-ARE activator isolated from green perilla leaves on dopaminergic neuronal loss in a Parkinson's disease model. Eur J Pharmacol. 798:26-34, 2017.
Izumi Y, Wakita S, Kanbara C, Nakai T, Akaike A, Kume T.	論文	Integrin $\alpha5\beta1$ expression on dopaminergic neurons is involved in dopaminergic neurite outgrowth on striatal neurons. Sci Rep. 7:42111, 2017.
Izumi Y, Kataoka H, Inose Y, Akaike A, Koyama Y, Kume T.	論文	Neuroprotective effect of an Nrf2-ARE activator identified from a chemical library on dopaminergic neurons. Eur J Pharmacol. 818:470-479, 2018.
Yamamoto K, Izumi Y, Arifuku M, Kume T, Sawada H.	論文	α -Synuclein oligomers mediate the aberrant form of spike-induced calcium release from IP3 receptor. Sci Rep. 9:15977, 2019.
Inose Y, Izumi Y, Takada-Takatori Y, Akaike A, Koyama Y, Kaneko S, Kume T.	論文	Protective effects of Nrf2-ARE activator on dopaminergic neuronal loss in Parkinson disease model mice: Possible involvement of heme oxygenase-1. Neurosci Lett. 736:135268, 2020.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
新規Nrf2-ARE活性化物質のヘムオキシゲナーゼ-1を介した抗パーキンソン病作用	2019年6月	第135回日本薬理学会近畿部会
ミクログリアにおけるNrf2-ARE経路活性化物質による炎症性 サイトカインの抑制作用とその機序の解析	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019
DAT 遺伝子へのインテグリン α5 遺伝子へテロノックイン ES 細胞の作製と神経分化効率に 関する検討	2019年8月	次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2019

Nrf2活性化薬によるミクログリア活性化の抑制作用とその機 序解析		2019年11月	第136回日本薬理学会近畿部会
神経炎症に対するNrf2活性化薬によるドパミン神経保護作用 〜人工知能による計数〜		2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
2003年1月~現在	日本薬理学会		
2005年2月~現在	日本神経科学学会		
2008年4月~現在	日本薬学会		
2013年4月~現在	日本薬理学会 学術評議員		
2018年10月~2020年3月	日本薬理学会 代議員		

所属	4 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 細川 美香			
Ι	教育活動					
	教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)				
	薬学部学生への教育	実習	2009年~2014年		大学薬学部4年生に実務実習事前 大学薬学部4年生に実務実習事前 大学薬学部4年とままでできる。	教育 前期(薬剤学関連実習)、実務実) の指導を行った。
	薬学部学生への教育	実習	2009年~現在に至る		f究室(卒業研究I,II)に配属され た研究したことをまとめ、発表で	れた学生に(5,6年生)、研究の指導を ぎきるように指導した。
	薬学部学生への教育	実習	2014年~現在に至る	神戸薬科	- 大学薬学部3年生に薬剤学・製剤	学実習の指導を行った。
3	薬学部学生への教育	薬学英語入門	2013年~2020年	神戸薬科	4大学薬学部3年生に薬学英語入門の	の指導を行った。
3	薬学部学生への教育	薬物動態学 I	2019年~2020年	神戸薬科	大学薬学部3年生に薬物動態学 (の指導を行った。
2	薬学部学生への教育	臨床薬剤学Ⅱ	2021年~現在に至る	神戸薬科		の指導を行った。
2	作成した教科書、教	材、参考書				
	特になし					
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等				
		学会発表	2017年9月	演題名	本薬学教育学会大会にて、以下の 「神戸薬科大学の薬学英語入門での 「ィングによる質的分析から学生の)学力向上に導くジグソー法の検討
		学会発表	2018年9月	演題名	本薬学教育学会大会にて、以下の 「薬学英語入門」におけるジグソー 討ージグソー活動での深い学びを	-法を用いた協調学習の効果的な予習

4 7 0 / 4 4 4 7 4 1 4 2 4 2 4 4 7 7		
4 その他教育活動上特記すべき事項		- 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1. 1.
	2017年	神戸薬科大学学長裁量経費に基づく教育改革プログラムへ参画し、プログラム:ジグソー法を活用した「薬学英語入門 I 、Ⅱ」の授業改善を代表者として実施した。
II 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
Tanaka S, Hosokawa M, Matsumura J, Matsubara E, Kobori A, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 40, 1320-1325 (2017). "Effects of zebularine on invasion activity and intracellular expression level of let-7b in colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S.	論文	Biol. Pharm. Bull. 40, 2199-2204 (2017). "Different schedule-dependent effects of epigenetic modifiers on cytotoxicity by anticancer drugs in colorectal cancer cells"
Hosokawa M, Tanaka S, Ueda K, Iwakawa S, Ogawara KI.	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun. 509, 249-254 (2019). "Decitabine exerted synergistic effects with oxaliplatin in colorectal cancer cells intrinsic resistance to decitabine"
Ueda K, Nakamura T, Tanaka S, Hosokawa M, Iwakawa S, Ogawara KI.		Drug Metab. Pharmacokinet. 35, 124-130 (2020). Numerical analysis of apparent decitabine uptake in HCT116 cells: Incorporation of a bidirectional first-order kinetic parameter for ENT1 transport and Michaelis-Menten parameters for subsequent phosphorylation.
Hosokawa M., Goto K., Tanaka S., Ueda K., Iwakawa S., Ogawara KI.		Chem. Pharm. Bull. 68, 1-6 (2020). Optimization of analytical conditions for hydrophilic nucleic acids using mixed-mode and reversed-phase pentabromobenzyl columns.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
イオン交換基と疎水基を併せ持つ逆相系カラムによるヌクレ オチドの分析:移動相条件による比較	2019年3月	日本薬学会 第139年会
逆相HPLCにおける親水性化合物の分析条件の最適化	2019年5月	日本薬剤学学会 第34回年会

Optimization of analytical condition compounds by reversed-phase HPLC	timization of analytical conditions for hydrophilic mpounds by reversed-phase HPLC		The 3nd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceutics
デシタビンとオキサリプラチン併用効果の増強におけるDNA損 傷応答経路の関与		2020年3月	日本薬学会 第140年会
逆相蒸発法により調製した水溶性物質内封リポソームの内封 効率評価法の比較		2020年5月	日本薬剤学会 第35回年会
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
2004年~現在に至る	日本薬学会会員		
2005年~現在に至る	日本医療薬学会会員		
2007年~現在に至る	日本薬剤学会会員		
2008年~現在に至る	日本薬物動態学会会員		
2016年~2020年	日本薬学教育学会会員		

所属 微生物化学研究室	職名 講師	氏名 増田 有紀			
I 教育活動					
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)				
微生物学実習		2010年10月~現在	め、少人 作)の-	吹後期に、微生物実習を行っている数でのディスカッションを実施しつつの意味について理解を深め ✓ストレーションを行っている。	る。学生の理解度を向上させるた ている。また、操作(特に無菌操 るために、実習開始時に説明に加え
情報リテラシー		2014年4月~現在	学部1年 いたプレ	次前期に、情報リテラシーの講義6 √ゼンテーションの作成について指	の一部として、パワーポイントを用 消している。
2 作成した教科書、教	材、参考書				
なし					
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等				
なし					
4 その他教育活動上特	記すべき事項				
なし					
Ⅱ 研究活動					
1. 著書・論文等					
	氏名	種別		F	为容
Masuda Y, Nakayama Y, Ta	naka A, Naito K, Konishi M.	論文		PLoS One., 2017, 12(3):e0173621. administered maitake α-glucan b response in murine tumor."	
Nakayama Y., Masuda Y., Nabeshima YI, Miyake A,	Ohta H, Tanaka T, Washida M, Itoh N, Konishi M.	論文		Sci. Rep., 2017, 23:7(1):330. "Fin the neonatal and juvenile thy	Sgf21 regulates T-cell development mus."

Masuda Y, Nakayama Y, Mukae T, Tanaka A, Naito K, Konishi M.		論文	Int. Immunopharmacol., 2019, 67:408-416. "Maturation of Dendritic Cells by Maitake α -glucan Enhances Anti-Cancer Effect of Dendritic Cell Vaccination."
2. 学会発表			
演題名		発表年・月	学会名
分泌因子Neudesin のがん免疫抑制作用	分泌因子Neudesin のがん免疫抑制作用について		日本薬学会 第139年会
Fgf21の胸腺樹状細胞を介した免疫寛容維持機構		2020年10月	第70 回 日本薬学会関西支部総会・大会
Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動		
2003年~現在に至る	日本薬学会会員		
2009年~現在に至る	日本免疫学会会員		
2010年~現在に至る	日本分子生物学会会員		

所属 医療薬学研究室	職名 講師	氏名 堀部 紗世				
I 教育活動			•			
教育実	践上の主な業績	年月日			概	要
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)					
4年生に対する実務事前実習	된 -	2013年10月1日~	いている	先生方とロールこ	プレイおよびグルーフ	いる。疑義照会では、現場で働 『ディスカッションを行い、実際 iとしての倫理について指導して
卒業研究		2013年10月1日~	本学5年 て、問題	生および6年生を対 夏を提議しその問題	対象に、卒業研究を指 題を自己解決する力を	消している。卒業研究を通し 養いように指導している。
2 作成した教科書、教	材、参考書					
特になし						
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					
特になし						
4 その他教育活動上特	記すべき事項					
特になし						
Ⅱ 研究活動			1			
1. 著書・論文等						
	氏名	種別			内容	
Horibe S, Tanahashi T, K Y.	awauchi S, Mizuno S, Rikitake	論文		p653-63 "Preve	ntative Effects of	ciences (2016),Vol. 13, Sodium Alginate on nal Injury in Mice."

Kawauchi S, Nakamura T, Horibe S, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Biopharmaceutics & drug disposition (2016), Vol. 37, p522-532 "Down-regulation of hepatic CYP3A1 expression in a rat model of indomethacin-induced small intestinal ulcers."
Horibe S, Kawauchi S, Yasuike S, Mizuno S, Kato I, Rikitake Y.	論文	Journal of Biomedicine (2017), Vol. 2, p101-108 "Anti-inflammatory Effect of JBP485 on Dextran Sulfate Sodium-induced Colitis in Mice."
Terao Y, Fujita H, Horibe S, Sato J, Minami S, Kobayashi M, Matsuoka I, Sasaki N, Satomi-Kobayashi S, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications (2017), Vol. 486, p811-816 "Interaction of FAM5C with UDP-glucose:glycoprotein glucosyltransferase 1 (UGGT1): Implication of N-glycosylation in FAM5C secretion."
Horibe S, Tanahashi T, Kawauchi S, Murakami Y, Rikitake Y.	論文	BMC Cancer (2018), 18, 47. "Mechanism of recipient cell-dependent differences in exosome uptake."
Sato J, Horibe S, Kawauchi S, Sasaki N, Hirata KI, Rikitake Y.	論文	J Neurochemistry (2018), Vol. 147, p495-513 "Involvement of aquaporin-4 in laminin-enhanced process formation of mouse astrocytes in 2D culture: Roles of dystroglycan and α-syntrophin in aquaporin-4 expression."
Horibe S*, Kawauchi S, Tanahashi T, Sasaki N, Mizuno S, Rikitake Y.	論文	Biochemical and biophysical research communications. (2018) Vol. 507, p426-432 "CD44v-dependent upregulation of xCT is involved in the acquisition of cisplatin-resistance in human lung cancer A549 cells."
Kawauchi S., Horibe S., Sasaki N., Hirata KI., Rikitake Y.	論文	Experimental Cell Research (2019), Vol. 374(2), p333-341. "A novel in vitro co-culture model to examine contact formation between astrocytic processes and cerebral vessels."
Kawauchi S, Horibe S, Sasaki N, Tanahashi T, Mizuno S, Hamaguchi T, Rikitake Y.	論文	Marine drugs (2019), Vol.17, 104. "Inhibitory Effects of Sodium Alginate on Hepatic Steatosis in Mice Induced by a Methionine- and Choline-deficient Diet."
Amin HZ, Sasaki N, Yamashita T, Mizoguchi T, Hayashi T, Emoto T, Matsumoto T, Yoshida N, Tabata T, Horibe S, Kawauchi S, Rikitake Y, Hirata KI.	論文	Scientific reports (2019), Vol.30, 8065. "CTLA-4 Protects against Angiotensin II-Induced Abdominal Aortic Aneurysm Formation in Mice."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名

シスプラチン耐性獲得機構におけるミトコンドリアDNA変異の 役割		2019年12月	第42回日本分子生物学会年会
血管内皮特異的老化マウスにおける脳血管周囲へのAQP4の局在低下		2020年3月	日本薬学会第140年会
ミクログリアの活性化における脳血管内皮細胞老化の役割		2020年3月	日本薬学会第140年会
アルツハイマー病の病態形成における脳血管内皮細胞老化の役割		2020年3月	日本薬学会第140年会
Involvement of mtDNA Mutations in Acquired Resistance to Cisplatin in A549 Cell-Derived Cisplatin -Resistant Cells.		2020年10月	第79回日本癌学会学術総会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
2000年4月~現在に至る	日本薬学会会員		
2001年1月~現在に至る	医療薬学会会員		
2008年1月~現在に至る	癌学会会員		

所属 生命分析化学研究室 職名 講師	氏名 森田 いずみ			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	1995. 4. 1〜現在に至る	『分析化学系美智』を担当している。全体講義で結長の扱い方を見せなから 明を行うことはもちろんのこと、特に注意すべき点に関しては班ごとの少人 にわけて、操作を実際に見せてから実施させるなどの工夫を心がけている。 『卒業研究』を担当している。 長い時間を費やす卒業研究において得られる 様々な経験を通し、社会に出てからも自ら実践できるような学習の機会とな よう常に心がけている。		
	2020. 4. 1〜現在に至る			
2 作成した教科書、教材、参考書	2014	『免疫測定法』(講談社)の執筆を分担担当した.		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		特になし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		特になし		
Ⅱ 研究活動		I		
1. 著書・論文等				
氏名	種別	内容		
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Miyake S., Moriuchi A., Akisada T., Niwa T., Kobayashi N.	論文	Anal. Chem. 2017, 89(1), 988-995. "One-Shot in Vitro Evolut Generated an Antibody Fragment for Testing Urinary Cotinine More Than 40-Fold Enhanced Affinity"		

I. Morita, H. Oyama, M. Yasuo, K. Matsuda, K. Katagi, A. Ito, H. Tatsuda, H. Tanaka, S. Morimoto, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(2), 174-181. "Antibody Fragments for On-Site Testing of Cannabinoids Generated via in Vitro Affinity Maturation"
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. "Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"
I. Morita, H. Oyama, Y. Kanda, M. Yasuo, A. Ito, M. Toyota, Y. Hayashi, T. Yokoyama, N. Kobayashi	論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(1), 123-131. "Enantioselective Monoclonal Antibodies for Detecting Ketamine to Crack Down on Illicit Use"
I. Morita, H. Oyama, Y. Kiguchi, A. Oguri, N. Fujimoto, A. Takeuchi, R. Tanaka, J. Ogata, R. Kikura-Hanajiri, N. Kobayashi	論文	J. Pharm. Biomed. Anal. 2020, 190, 113485. "Immunochemical monitoring of psilocybin and psilocin to identify hallucinogenic mushrooms"
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
In vitro affinity maturation of a single-chain Fv fragment for on-site testing of cannabinoids	2017. 6	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
試験管内親和性成熟を目的とする抗シロシビン一本鎖Fvフラグメントの作製	2019. 7	日本法中毒学会第38年会
幻覚性キノコ成分のオンサイト分析を目的とするシロシンシ リル化体に対する新規モノクローナル抗体の作製	2019. 9	日本法中毒学会第37年会
Generation of monoclonal antibodies for on-site analysis of psilocin and psilocybin in hallucinogenic mushrooms	2019. 5	European Congress of Clinical Chemistry and Laboratory Medicine
マジックマッシュルーム中シロシビン、シロシンのELISA	2020. 1	第70回日本薬学会関西支部大会

森田

Ⅱ 学会等および社会における主な活動		
1995年4月~現在	日本薬学会会員	
2003年9月~現在	日本分析化学会会員	
2013年4月~現在	生物化学測定研究会会員	
2017年6月~現在	日本法中毒学会会員	

所属 総合教育研究センター 職名 講師	氏名 富田淑美			
I 教育活動	<u> </u>	•		
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
	2020年4月~	4,5年次	「海外薬学研修」を分担	
				いても、オンライン講義やビデオ講義 D機会を設け、学生の英語学習の意欲 かた。
	2020年4月~	4年次「	実務実習事前教育」を分担	
	2021年4月~	4年次「	地域医療・プライマリケア論	」を分担
	2021年4月~	4年次「	社会保障制度と薬剤経済」を	分担
	2021年4月~	4年次「	処方解析 I 」を分担	
	2021年4月~	6年次「	がん薬物療法論」を分担	
	2021年4月~	6年次「	感染制御学Ⅱ」を分担	
	2021年9月~	4年次「	処方解析Ⅱ」を分担	
	2021年9月~			舌かし、講義では具体的に例題や実例 要な知識と技術を修得する一助となる
2 作成した教科書、教材、参考書				

3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4 その他教育活動上特記すべき事項		
Ⅱ 研究活動		
1. 著書・論文等		
氏名	種別	内容
富田 淑美	論文	ファルマシア 2017, 53(4), 313-316.
富田 淑美	論文	ファルマシア 2018, 54(10), 976-977.
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
DPC対象病院の院外処方箋を対象とした患者の後発医薬品 に対する意識調査	2016年・3月	日本薬学会第136年会
当薬局における疑義照会実施状況の分析とその評価	2016年・11月	第49回東海薬剤師学術大会
薬剤師が在宅療養支援に介入を続けることにより薬物治療が 適正化された1症例	2017年・10月	第50回日本薬剤師会学術大会
3. その他		
演題名	発表年・月	学会名

化学的考察から患者のために薬	経剤師だからできること	2017年・9月	第6回日本くすりと糖尿病学会学術集会	
薬局での有機化学を活かした働	薬局での有機化学を活かした働き方		臨床・基礎薬学連携シンポジウム	
現場で活きる考える力	退場で活きる考える力		第47回徳島大学薬学部卒後教育公開講座	
Ⅲ 学会等および社会における	学会等および社会における主な活動			
2013年9月~2020年3月	静岡県災害薬事コーデ	静岡県災害薬事コーディネーター		
2004年~	日本薬学会	日本薬学会		
2012年~	日本薬剤師会	日本薬剤師会		
2016年4月~	日本病院薬剤師会	日本病院薬剤師会		
2014年4月~	日本医療薬学会	日本医療薬学会		
2011年10月~	国際薬剤師・薬学連合	国際薬剤師・薬学連合 (FIP)		

所属 医療統計学研究室 職名 講師	氏名 阿部 興				
I 教育活動	•				
教育実践上の主な業績	年月日		概		要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)					
	2018年9月26日		yクトレーニング」 スタリング、生存時		いて、R言語を用いた主成分分
	2019年9月18日~19日	データ掉			いて、R言語を用いた基本的な ラスタリング、生存時間分析、
	2019年11月22日		境と人間」:名古屋 とともに紹介する請		学研究と統計の関わりを最新の
2 作成した教科書、教材、参考書	2018年9月26日	「ベーシ	·ックトレーニング」	に使用する演習用で	プログラムの作成を行った。
	2019年9月18日~19日	「ベーシ	/ ックトレーニング」	に使用する演習用で	プログラムの作成を行った。
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項					
Ⅲ 研究活動	1				
1. 著書・論文等					
氏名	種別			内容	

論文	ENIGMA: an enterotype-like unigram mixture model for microbial association analysis. BMC genomics 20(Suppl 2) 191 2019年4月			
論文	A latent allocation model for the analysis of microbial composition and disease. BMC BIOINFORMATICS 19 2018年12月31日			
論文	窓打ち切りされた観測データの交代再生イベントのモデルとパラメータの推定方法および推定量の比較. 計算機統計学 31(1) 1 - 15 2018年			
論文	項目反応理論を用いた野球選手の能力評価指標の提案. 統計数理 65(2) 235 - 249 2017年12月			
論文	窓打ち切り状況下での交代再生過程のパラメータの最尤推定.計算機 統計学 29(2) 133 - 146 2016年			
発表年・月	学会名			
2019年・9月	2019年度統計関連学会連合大会			
2019年・6月	日本計算機統計学会第33回大会			
2018年・9月	2018年度統計関連学会連合大会			
2017年・11月	日本計算機統計学会シンポジウム			
2016年・12月	Australian Statistical Conference 2016			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
	論文 論文 論文 発表年・月 2019年・9月 2019年・6月 2018年・9月 2017年・11月			

所属 薬剤学研究室	職名 講師	氏名 河野 裕允				
I 教育活動						
教育実	践上の主な業績	年月日		概		要
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)					
薬剤学実習		2014年4月1日~2020年12月31日	薬物動態	《学的解析法の理解を い、積極的に質疑を	と深めるため、実習	、薬剤学実習の指導を行った。 ごとの課題の解説を学生に担当 ファシリテーターとしての役割
卒業研究		2014年4月1日~2020年12月31日	行った。		1上させるため、毎	、学部学生の卒業研究の指導を 週研究進捗報告会を開き、実験 論を行った。
2 作成した教科書、教	材、参考書					
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特	記すべき事項					
Ⅱ 研究活動		•	•			
1. 著書・論文等						
	氏名	種別			内容	

Y Kono, T Nakai, H Taguchi, T Fujita.	論文	Drug Deliv. 24, 1740-1749 (2017). "Development of magnetic anionic liposome/atelocollagen complexes for efficient magnetic drug targeting."
Y Kono, H Jinzai, Y Kotera, T Fujita.	論文	Biol Pharm Bull. 40, 2166-2174 (2017). "Influence of physicochemical properties and PEG modification of magnetic liposomes on their interaction with intestinal epithelial Caco-2 cells."
Y Kono, S Gogatsubo, T Ohba, T Fujita.	論文	Drug Deliv. 26, 935-943 (2019). "Enhanced macrophage delivery to the colon using magnetic lipoplexes with a magnetic field."
Y Kono, K Yokoyama, M Suzuki, H Takakura, M Ogawa.	論文	Biol Pharm Bull. 43, 736-741 (2020). "Surface modification of liposomes using IR700 enables efficient controlled contents release triggeredby near-IR light."
Y Kono, A Miyamoto, S Hiraoka, R Negoro, T Fujita.	論文	Biol Pharm Bull. 43, 1785-1791 (2020). "Mesenchymal stem cells alter the inflammatory response of C2C12 mouse skeletal muscle cells."
2. 学会発表		
演題名	発表年・月	学会名
磁性アニオン性リポソーム/アテロコラーゲン複合体を利用した磁性化間葉系幹細胞の作製	2017年7月	第33回 日本DDS学会学術総会
	2017年7月 2018年6月	第33回 日本DDS学会学術総会 NanoBio第11回若手ネットワーキングシンポジウム
た磁性化間葉系幹細胞の作製 アテロコラーゲンを利用した安全な磁性リポソーム製剤の開	2018年6月	
た磁性化間葉系幹細胞の作製 アテロコラーゲンを利用した安全な磁性リポソーム製剤の開発 An openable artificial intestinal tract system enables the evaluation of drug absorption in Caco-2 cells under	2018年6月	NanoBio第11回若手ネットワーキングシンポジウム
た磁性化間葉系幹細胞の作製 アテロコラーゲンを利用した安全な磁性リポソーム製剤の開発 An openable artificial intestinal tract system enables the evaluation of drug absorption in Caco-2 cells under conditions of the reduction of the unstirred water 磁性リポソームを用いた間葉系幹細胞の磁性化とその骨格筋	2018年6月	NanoBio第11回若手ネットワーキングシンポジウム AAPS 2019 PharmSci 360
た磁性化間葉系幹細胞の作製 アテロコラーゲンを利用した安全な磁性リポソーム製剤の開発 An openable artificial intestinal tract system enables the evaluation of drug absorption in Caco-2 cells under conditions of the reduction of the unstirred water 磁性リポソームを用いた間葉系幹細胞の磁性化とその骨格筋内保持効率の評価	2018年6月 2019年11月 2020年5月	NanoBio第11回若手ネットワーキングシンポジウム AAPS 2019 PharmSci 360 日本薬剤学会 第35年会

2010年4月~現在	日本DDS学会会員
2012年4月~現在	日本薬学会会員
2013年4月~現在	日本癌学会会員
2019年7月~現在	次世代医工学研究会幹事

所属 医薬細胞生物学研究室 職名 助教	氏名 山田泰之			
I 教育活動	-			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
	2017年9月1日〜現在に 至る	本学2年: 物の組織 ている。	生を対象に「細胞生物学実習」 はの観察、マウスの解剖、重要:	にて、顕微鏡の使用方法や、動物・植 生薬の観察や鑑定についての指導を行っ
	2018年4月1日〜現在に 至る	らった框	3年生を対象の選択科目「アク 植物を用いた組織培養実験や動物 は出実験などについて、指導を	ティブ・ラボ」にて、学生に持参しても 物細胞の継代培養とルシフェラーゼによ 行っている。
2 作成した教科書、教材、参考書				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
Ⅲ 研究活動				
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Yamada Y., Nishida S., Shitan N., Sato F	論文			transcription factor-encoding genes cholzia californica) and their

Hori K., Yamada Y., Purwanto R., Minakuchi Y., Toyoda A., Hirakawa H., Sato F.	論文	Plant & Cell Physiology, 2018, 59, 222-233. doi: 10.1093/pcp/pcx210. "Mining of the Uncharacterized Cytochrome P450 Genes Involved in Alkaloid Biosynthesis in California Poppy Using a Draft Genome Sequence"	
Yamada Y., Shimada T., Motomura Y., Sato F	論文	PLoS One 2017, 12, e0186953 "Modulation of benzylisoquinoline alkaloid biosynthesis by heterologous expression of CjWRKY1 in Eschscholzia californica cells."	
Yamada Y., Yoshimoto T., Yoshida T.S., Sato F.	論文	Frontiers in Plant Science 2016, 7, 1352 "Characterization of the Promoter Region of Biosynthetic Enzyme Genes Involved in Berberine Biosynthesis in <i>Coptis japonica</i> "	
Yamada Y., Sato F.	論文	Scientific reports 2016, 6, 31988 "Tyrosine phosphorylation and protein degradation control the transcriptional activity of WRKY involved in benzylisoquinoline alkaloid biosynthesis"	
2. 学会発表			
演題名	発表年・月	学会名	
輸送工学を利用した効率的なイソキノリンアルカロイド生産	2020年3月	日本農芸化学会2020年度大会 福岡	
ケシ科ハナビシソウのイソキノリンアルカロイド生産に関わ る遺伝子の探索と機能解析	2020年3月	第61回日本植物生理学会年会 大阪	
ケシ科ハナビシソウのドラフトゲノムデータを利用したイソ キノリンアルカロイド生合成関連遺伝子のマイニング -ドラ フトゲノムデータを利用した生合成関連遺伝子の探索-	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会 神戸	
ハナビシソウドラフトゲノムデータを利用したイソキノリン アルカロイド生合成関連遺伝子のマイニング	2019年3月	日本農芸化学会2019年度大会 東京	
オウレンのイソキノリンアルカロイド生合成におけるERF転写 因子の機能解析	2018年10月	日本植物化学調節学会第53回大会 札幌	
3. その他			
招待講演・演題名	発表年・月	学会名	

Ⅲ 学会等および社会における主な活!	動
2008年5月~現在に至る	日本植物細胞分子生物学会(日本植物バイオテクノロジー学会に改名)会員
2008年11月~現在に至る	日本農芸化学会会員
2010年1月~現在に至る	日本植物生理学会会員
2019年2月~現在に至る	日本薬学会会員
2020年3月~現在に至る	トランスポーター研究会幹事 (第15回トランスポーター研究会年会 実行委員)

所属 薬品物理化学研究室	職名 助教	氏名 山﨑 俊栄			
I 教育活動					
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)	2017年~現在		:実習(2年次後期)(タ -デル粒子への薬物の分配	
2 作成した教科書、教	材、参考書		該当なし	,	
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等		該当なし	,	
4 その他教育活動上特	記すべき事項		該当なし	,	
Ⅱ 研究活動					
1. 著書・論文等					
	氏名	種別			内容
Kannaka K., Sano K., Nak M., Yamasaki T., Mukai T	ahara H., Munekane M., Hagimori	論文		<i>Langmuir</i> , 36: 10750-5 Radiation-induced redo	(2020) ox alteration in the mouse brain.
Yamasaki T., Azuma R., S Y., Yamada K., Mukai T.	ano K., Munekane M., Matsuoka	論文		ACS. Med. Chem. Lett. Radioiodinated Nitrox: Radicals.	, 11(1): 45-8 (2020) ide Derivative for the Detection of Lipid
	, Ueno M., Shibata S., Ozawa I., Yamada KI., Aoki I.,	論文		<i>Free Radic. Biol. Med.</i> Radiation-induced redo	., 143: 412-21 (2019) ox alteration in the mouse brain.

Kannaka K., Sano K., Hagimori M., Yamasaki T., Munekane M., Mukai T.		論文	Bioorg. Med. Chem., 27(16): 3613-8 (2019) Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs.	
Yamasaki T., Buric D., Chacon C., Gérard A., Braguer D., Marque S. R. A., Carré M., Brémond P.		論文	Bioorg. Med. Chem., 27(10): 1942-51 (2019) Chemical modifications of imidazole-containing alkoxyamines increase C-ON bond homolysis rate: effects on their cytotoxic properties in glioblastoma cells.	
2. 学会発表				
演題名		発表年・月	学会名	
脂質ラジカルの核医学イメージングを目 プローブの開発	的とした新規放射性	2020年11月	電子スピンサイエンス学会2020	
生体内脂質ラジカルを非侵襲検出する放射性プローブの合成 及び脂質過酸化誘発モデルマウスでの評価		2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会	
TEMPO型アルコキシアミンのホモリシスにおける置換基の影響		2020年 3月	日本薬学会第140年会	
脂質ラジカルの生体内検出に向けた放射 キシドの開発	性ヨウ素標識ニトロ	2020年 3月	日本薬学会第140年会	
生体内の脂質アルキルラジカルを検出す。 ニトロキシドプローブの開発	る放射性ヨウ素標識	2019年11月	第3回日本核医学会分科会放射性薬品科学研究会/第19回放射性医薬品・画像診断薬研究会	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	<u>.</u>		<u> </u>	
2006年 ~ 現在	日本薬学会会員			
2007年 ~ 現在 電	電子スピンサイエンス学会会員			
2014年 ~ 現在 Ir	International EPR Society会員			
2018年 ~ 現在	本核医学会会員			
2019年 ~ 現在	本癌学会会員			

所属 薬化学研究室	職名助教	氏名 高木 晃				
I 教育活動						
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要	
1 教育内容・方法の工	「夫(授業評価等を含む)	2016年10月-現在に至る	薬化学研 を薬剤師 いる。	F究室に配属された学生の卒業 市国家試験と関連付けすること	業研究指導を行っている。 とで実験にも興味を持てる	実験で行うこと るように工夫して
		2017年4月-現在に至る	有機化学 ションを ている。	生実習(学部2年生)を分担して 注行い、実習の目的と実際に行	いる。実習時間の終わり 行った手順の理解を促進 [・]	にディスカッ できるように努め
2 作成した教科書、教	女材、参考書					
3 教育方法・教育実践	とに関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特	記すべき事項					
Ⅲ 研究活動						
1. 著書・論文等						
	氏名	種別			内容	
T. Ikawa, S. Masuda, A.	Takagi, S. Akai	論文		Chem. Sci. 2016, 7, 5206-equivalents for regioselecheterocycles"		
T. Ikawa, Y. Sumii, S. M	Masuda, D. Wang, Y. Emi, A. Takaş	論文		Snlett 2018 , 29, 530-536. Disubstituted Indoline De Reactions between Benzyne: Aminobutyronitriles"	rivatives through Cycl	oaddition

H. Tsujino, T. Uno, T. Yamashita, M. Katsuda, K. Takada, T. Saiki, S. Maeda, A. Takagi, S. Masuda, Y. Kawano, K. Meguro, S. Akai	論文	Bioorg. Med. Chem. Lett. 2019, 29, 126607. "Correlation of indoleamine-2, 3-dioxigenase 1 inhibitory activity of 4,6-disubstituted indazole derivatives and their heme binding affinity"	
T. Ikawa, J. Sun, A. Takagi, S. Akai	論文	J. Org. Chem. 2020 , 85, 3383-3392. "One-Pot Generation of Functionalized Benzynes from Readily Available 2-Hydroxyphenylboronic Acids"	
I. Takashima, Y. Inoue, N. Matsumoto, A. Takagi, K. Okuda	論文	Chem. Commun. 2020, 56, 13327-13330. "A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc"	
2. 学会発表			
演題名	発表年・月	学会名	
小胞体ストレス応答を制御する化合物群の創製研究	2019年6月	第25回癌治療増感研究会	
Development of Drugs for Modulating Endoplasmic Reticulum Stress Response	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress	
小胞体ストレス応答を標的とする創薬化学研究	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会	
栄養飢餓耐性解除に基づく抗腫瘍性天然物ならびに類縁体の 合成研究	2020年3月	日本薬学会第140年会	
(±)-Uvaridacol Lの合成研究	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会	
3. その他		•	
演題名	発表年・月	学会名	
がん微小環境を標的とした生物活性化合物の創製研究	2020年10月	第6回関西薬学シンポジウム:化学系の若い力(招待講演)	

Ⅲ 学会等および社会における主な活動		
2009年~現在に至る	日本薬学会会員	
2009年~現在に至る	有機合成化学協会会員	
2017年~現在に至る	国際癌治療増感研究協会会員	

所属 医薬細胞生物学研究室 職名 助教	氏名 池田義人			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
細胞生物学実習	2019年4月1日~現在に至る		生を対象に、顕微鏡の使用方法や、 重要生薬の観察や鑑定についての	、動物・植物の組織の観察、マウス)指導を行っている。
アクティブ・ラボ	2019年4月1日~現在に至る	本学1~3年生の一部対象の選択科目にて、動物培養細胞への遺伝子導入実験 ~現在に至る 培養細胞内への必須微量金属元素(亜鉛)取込みを発光反応へ置換し間接的に 価する研究に関する実験の指導を行っている。		
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし	,	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項	2019年1月1日〜現在に至る	1月1日~現在に至る 日本医療薬学会 医療薬学専門薬剤師(認定番号 19-0093)		定番号 19-0093)
Ⅱ 研究活動		1		
1. 著書・論文等				
氏名	種別		内容	
T. Suzuki , Y. Wakao, T. Watanabe, M. Hori, Y. Ikeda, H. Tsuchiya, K. Kogure, M. Harada-Shiba, M. Fujimuro, H. Kamiya	論文		Effects of plasmid-specific hi recruitment system in vivo. : Acids, 38 (12), 942-949 (2019)	Nucleosides Nucleotides Nucleic
Y. Ikeda, SY. Morita, R. Hatano, T. Tsuji, T. Terada	論文		Enhancing effect of taurohyodeoxycholate on ABCB4-mediate phospholipid efflux. : Biochim. Biophys. Acta. Mol. Cell Lipids, 1864 (10), 1495-1502 (2019)	

T. Tsuji, SY. Morita, Y. Ikeda, T. Terada		論文	Enzymatic fluorometric assays for quantifying all major phospholipid classes in cells and intracellular organelles. : Sci. Rep., 9 (1), 8607 (2019)
SY. Morita, Y. Ikeda, T. Tsuji, T. Terada		論文	Molecular mechanisms for protection of hepatocytes against bile salt cytotoxicity. : Chem. Pharm. Bull., 67 (4), 333-340 (2019)
S. Noda, T. Yoshida, D. Hira, R. Mu Tsuru, S. Kageyama, A. Kawauchi, Y. T. Terada		論文	Exploratory investigation of target pazopanib concentration range for patients with renal cell carcinoma. : Clin. Genitourin. Cancer, 17 (2), e306-e313 (2019)
2. 学会発表			
演題名		発表年・月	学会名
カンデサルタンシレキセチルの併用はパクリタキセルーカル ボプラチン併用療法施行患者の好中球減少リスクを増加させ る		2019年3月	日本臨床腫瘍薬学会
酵素蛍光法を用いたオルガネラ膜における主要リン脂質クラ スの定量分析		2019年5月	日本膜学会
ABCB4による胆汁中リン脂質排出を促進する胆汁酸の探索とメ カニズムの解明		2019年5月	日本薬剤学会
ABCB4リン脂質排出を促進する分子の探	索とメカニズムの解明	2018年5月	日本膜学会
タウリン抱合型ヒオデオキシコール酸ルン脂質排出の促進	こよるABCB4を介したリ	2018年3月	日本薬学会
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	助 		
2010年4月~現在に至る	日本薬学会会員		
2010年4月~現在に至る	日本生化学会会員		
2014年4月~現在に至る	日本脂質生化学会会員		
2014年4月~現在に至る	日本医療薬学会会員		

所属 薬品化学研究室 職名 助教	氏名 安井基博			
I 教育活動	I	<u> </u>		
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)	第を含む) 2019年4月~現在 3年次の「医薬品化学実習」を担当している。医薬品学の魅力を伝えると共に、これまでの学習内容をより生との議論に重点を置いている。未知化合物の構造を「未知検体実験」では有機化学の体系的理解と思考力している。		習内容をより深く理解できるよう、学 合物の構造を定性試験から解明する	
	2019年4月~現在		議論において、薬剤師国家試験	研究指導を担当している。日々の実験 に必要な知識や論理的思考力の養成を
2 作成した教科書、教材、参考書				
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
Ⅱ 研究活動	·			
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Konishi, K.; Yasui, M.; Okuhira, H.; Norihiko T.; M.	Ueda, 論文			0). "Copper-Catalyzed Sequential yl Hydrazides for Construction of lones"

Yasui, M.; Yamada, A.; Tsukano. C.; Hamza, A.; Pápai, I.; Takemoto, Y.	論文	Angew. Chem. Int. Ed., 59, 13479-13483 (2020). "Enantio/Diastereoselective Synthesis of γ -Alkoxybutenolide by Dynamic Kinetic Resolution Using Chiral Thiourea-Quaternary Ammonium Salt Catalyst and Its Application to the Stereoselective Synthesis of Strigolactones"	
Nakamura, H.; Tsukano, C.; Yoshida, T.; Yasui, M.; Yokouchi, S. ; Kobayashi, Y.; Igarashi, M.; Takemoto, Y.	論文	J. Am. Chem. Soc. 141, 8527-8540 (2019). "Total Synthesis of Caprazamycin A: Practical and Scalable Synthesis of syn- β - Hydroxyamino Acids and Introduction of a Fatty Acid Side Chain to 1,4-Diazepanone"	
Yasui, M.; Ota, R.; Tsukano, C.; Takemoto, Y.	論文	Org. Lett., 20, 7656-7660 (2018) "Synthesis of cis/all-cis-substituted cyclopropanes through stereocontrolled metalation and Pd-catalyzed Negishi coupling"	
Yasui, M.; Ota, R.; Tsukano, C.; Takemoto, Y	論文	Nat. Commun., 8, 674 (2017) "Total synthesis of avenaol"	
2. 学会発表		•	
演題名	発表年・月	学会名	
N, N-二置換アルキニルヒドラゾンのハロ環化による4-ブロ モー1-ブロモアルキル-5-置換ピラゾール合成	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会	
ストリゴラクトンの立体選択的合成を志向したチオウレアー 第四級アンモニウム塩触媒を用いる不斉アセタール化反応	2020年9月	第62回天然有機化合物討論会	
Total Synthesis of Avenaol, a Non-canonical Strigolactone	2020年8月	Reaxys PhD Prize Symposium 2020	
連続的閉環-開環反応による構造多様性指向型イソキサゾロ ン合成法の開発	2020年3月	日本薬学会第140年会	
連続へテロ原子を有するラクタムを利用したアルキン導入を 伴う連続反応の開発	2019年10月	第45回反応と合成の進歩シンポジウム	
3. その他			
演題名	発表年・月	学会名	
Avenaolの全合成と不斉γ-アルコキシブテノリド合成法の開発	2019年10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会(受賞講演)	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動			
2014年~現在に至る 日本薬学会会員			
2016年~現在に至る 有機合成化学協会会員			

所属 衛生化学研究室 職名 助教	氏名 北條 寛典			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)		実習に関		学生でディスカッションを行い、思
衛生薬学実習	2018年4月~	考力の向身が深く	上につながるように努めている。 考えるきっかけを与えるようにエ	また、身近なものを例に挙げ学生自 夫を凝らしている。
衛生薬学II	2020年4月~	べきポイ	ントをとらえやすくできるように	プリントを作成することにより学ぶ 工夫した。また演習問題を作成する ようにし、効率的な復習に結びつく
環境衛生学	2020年9月~	ようにし		S J I C U、 M T I J S W E I C III U J V
2 作成した教科書、教材、参考書				
授業用プリント	2020年4月~	衛生薬学	薬学IIと環境衛生学で用いる授業プリントを作成した。	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等				
4 その他教育活動上特記すべき事項				
Ⅱ 研究活動	•			
1. 著書・論文等				
氏名	種別	_	ļ	
Hohjoh H., Horikawa I., Nakagawa K., Segi-Nishida E., Hasegawa H.	論文		Neurosci. Lett., 2020, 739:135 10.1016/j.neulet.2020.135406. matrix metalloproteinases Mmp- infarct cerebral cortex of pho	"Induced mRNA expression of 3, Mmp-12, and Mmp-13 in the

	azali N., Hohjoh H., Inazumi T., Maharjan D.B., akagawa K., Konishi M., Sugimoto Y., Hasegawa H.		Biol. Pharm. Bull, 2020, 43(4), 649-662. "Induced Prostanoid Synthesis Regulates the Balance between Th1- and T2-Producing Inflammatory Cytokines in the Thymus of Diet-Restricted Mice"	
Razali N., Horikawa I., Hohjoh H., Hasegawa H.	Yoshikawa C.,	論文	BPB Reports, 2019, 2(4), 39-47. "Prostaglandin-Modulated Interaction of Thymic Progenitor Cells with Blood Vessels during Estradiol-Induced Thymic Involution"	
Iwasaki R., Tsuge K., Kishimoto K., T., Hohjoh H., Inazumi T., Kawahara Sugimoto Y.		論文	Sci. Rep., 2019, 9(1), 7650. doi: 10.1038/s41598-019-44095-5. "Essential Role of Prostaglandin E2 and the EP3 Receptor in Lymphatic Vessel Development During Zebrafish Embryogenesis"	
Tsuchiya H., Hohjoh H., Fujiwara Y. Koshimizu T.A.	, Sugimoto Y.,	論文	Biochem. Biophys. Res. Commun., 2016, 470(4), 804-810. "Prostaglandin D2 Elicits the Reveersible Neurite Retraction in Hypothalamic Cell Line"	
2. 学会発表				
演題名		発表年・月	学会名	
T細胞による軸索再生促進メカニズムの	解明	2020年・10月	第70回日本薬学会関西支部総会・大会	
末梢神経再生におけるT細胞の役割の解 経再生を促進するー	が 一T細胞は末梢神	2019年・10月	第69回日本薬学会関西支部総会・大会	
T細胞による軸索再生促進機構の解析		2019年・9月	第92回日本生化学会大会	
妊娠初期のDEHP曝露が膣免疫能に与える	る影響	2019年・8月	フォーラム2019衛生薬学・環境トキシコロジー	
T cells facilitate peripheral nerve	e regeneration	2019年・7月	NEURO2019	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	動			
2012年~	日本生化学会会員			
2015年~	日本脂質生化学会会員			
2017年~	日本薬理学会会員			
2018年~	日本薬学会会員			
2019年~	日本神経科学学会会員			

所属	製剤学研究室	職名 助教	氏名 田中 晶子			
I 孝			•			
	教育実	践上の主な業績	年月日		概	要
1	教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)				
	アクティブラボ		2018年4月~		を対象に薬物動態関連の研究を こもらうように工夫している。	行い、研究の面白さと研究室の雰囲気
	製剤学・薬剤学実習		2018年4月~	3年次生後期の薬剤学・製剤学実習において、製剤試験法についての指導 行っている。		
	卒業研究		2018年4月~	製剤学研究室に配属された4、5、6年次生に対し、卒業研究の指導を行いる。卒業研究を通して、問題解決能力・プレゼンテーション能力等を養とができるように指導している。		
2	作成した教科書、教	材、参考書				
	特になし					
3	教育方法・教育実践	に関する発表、講演等				
	特になし					
4	その他教育活動上特	記すべき事項				
	特になし					
Ⅱ 有	开究活動					
1. 津	善書・論文等					
		氏名	種別			内容
Rina S	Shimomura, Chiaki Mae te Kusamori, Hidemasa I	ubayashi, Yuki Enomura, Tomoki Hori, da, Shunsuke Kimura, Daisuke Inoue, Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira	論文			2-219. "Nasal Drug Absorption from uid Volume Changes on the Mucosal

Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Manami Tomisaki, Mayuko Kawakami, ShunsukeKimura, Daisuke Inoue, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Eur. J. Pharm. Sci., 2017, 96, 284-289. "Nasal drug absorption from powder formulations: The effect of three types of hydroxypropyl cellulose (HPC)"			
Akiko Tanaka, Tomoyuki Furubayashi, Mari Arai, Daisuke Inoue, Shunsuke Kimura, Akiko Kiriyama, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Reiko Yutani, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto	論文	Mol. Pharm., 2018, 15, 1105-1111. "Delivery of Oxytocin to the Brain for the Treatment of Autism Spectrum Disorder by Nasal Application"			
Tanaka A., Takayama K., Furubayashi T., Mori K., Takemura Y., Amano M., Maeda C., Inoue D., Kimura S., Kiriyama A., Katsumi H., Miyazato M., Kangawa K., Sakane T., Hayashi Y., Yamamoto A.	論文	Mol. Pharm. 2020, 17, 32-39."Transnasal Delivery of the Peptide Agonist Specific to Neuromedin-U Receptor 2 to the Brain for the Treatment of Obesity"			
田中晶子、坂根稔康	著書	肥満症に対する新規治療システム: 鼻腔内投与による中分子ペプチドの脳内 送達 180-187 (2019) CMC出版.			
2. 学会発表					
演題名	発表年・月	学会名			
鼻腔内投与されたoxytocinの脳内移行特性	2020年3月	日本薬学会第140年会			
中分子ペプチドによる新規肥満治療法の開発:鼻腔内投与後 の脳移行性に対するペプチドの安定性の影響	2020年5月	日本薬剤学会第35年会			
鼻腔内投与によるペプチドの脳内送達:鼻腔から脳への移行機構と 移行後の脳内送達	2020年7月	第36回日本DDS学会学術集会			
鼻腔内投与後の脳への薬物移行機構の解析:脳内移行の左右差	2020年7月	第36回日本DDS学会学術集会			
鼻腔より直接脳内へ移行した薬物の脳内動態	2020年7月	第36回日本DDS学会学術集会			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
2010年10月~現在に至る 日本薬学会会員					

田中 晶子

2011年3月~現在に至る	日本薬剤学会会員
2015年3月~現在に至る	日本DDS学会会員
2017年3月~現在に至る	日本薬物動態学会会員
2019年4月~現在に至る	日本医療薬学会会員

所属 衛生化学研究室	職名 助教	氏名 中山 啓					
I 教育活動	I 教育活動						
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工	上夫(授業評価等を含む)						
2 作成した教科書、教	材、参考書						
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特	記すべき事項						
Ⅱ 研究活動			5				
1. 著書・論文等							
	氏名	種別		内名	容		
Imajo M, Kondoh K, Yaman Koyama M, Nishida E.	moto T, Nakayama K, Nakajima-	論文		Mol. Cell. Biol. 37: e00012-17, interactions between ERK MAP kin signaling in colorectal cancer c	ase and retinoic acid receptor		
Nakayama K, Ohashi R, Shinoda Y, Yamazaki M, Abe M, Fujikawa A, Shigenobu S, Futatsugi A, Noda M, Mikoshiba K, Furuichi T, Sakimura K, Shiina N.		論文		eLife. 6: e29677, 2017. "RNG105/protein for dendritic mRNA local long-term memory formation."			
Shimada A, Minou S, Okus Kadofusa N, Sato A, Nish	Shen J, Guh YJ, Tamai TK, shi Y, Shimmura T, Furukawa Y, nimura T, Tanaka M, Nakayama K, pudon AS, Nishiwaki-Ohkawa T, T, Nakane Y, Yoshimura T.	論文		PNAS. 117: 9594-9603, 2020. "Seas antioxidant pathway regulates wi behavior."	_		

lasegawa H, Kondo M, Hohjoh H, Nakayama K,Segi-Nishida		論文	BPB Reports 3: 208-215, 2020 "C-C Chemokine Receptor 5 (CCR5) Expression in the Infarct Brain of the Photothrombosis Mouse Model"
2. 学会発表			·
演題名		発表年・月	学会名
RNA顆粒構成因子RNG105は、シナプス後 制御し、記憶形成に必要である	部形態の可塑的変化を	2017年12月	2017年度生命科学系学会合同年次大会
RNG105, an RNA granule-associated RNA-binding protein, regulates the structural plasticity of spine and is required for memory formation		2018年7月	第41回 日本神経科学大会
RNG105/caprin1, an RNA granule prot structural spine plasticity and is term memory formation		2018年11月	The 48th Annual Meeting of the Society for Neuroscience
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	<u>.</u> 動		·
2005年~	日本分子生物学会会員		
2015年~	日本神経科学学会会員		
2018年~ 北米神経科学学会会員			
2021年~	日本薬学会会員		

所属 薬品物理化学研究室 職名 特任助教	氏名 宗兼 将之			
I 教育活動				
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
(1) 物理化学系実習(2年次後期)	2018年4月~	化合物の	加水分解反応速度、表面張力の	D測定に関する実習等を担当。
(2) アクティブラボ (1~3年次通年)	2018年4月~	8年4月~ アクティブラボの一部(物理化学関連の実験指導)を担当。		
(3) 卒業研究(4~6年次通年)	2018年4月~	研究室に	配属された学生の卒業研究指導	尊を実施。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし		
Ⅱ 研究活動				
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Kannaka K., Sano K., Nakahara H., Munekane M., Hagimori M., Yamasaki T., Mukai T.	論文		Inverse Electron Demand Diels-Alder Reactions in the Liposo Membrane Accelerates Release of the Encapsulated Drugs, Langmuir, 36, 10750-10755, 2020.	
Yamasaki T., Azuma R., Sano K., Munekane M., Matsuoka Y., Yamada K., Mukai T.	論文		Radioiodinated Nitroxide De Radicals, ACS Med. Chem. Le	rivative for the Detection of Lipid tt., 11(1), 45-48, 2020.

Kannaka K., Sano K., Hagimori M., Yamasaki T., Munekane I., Mukai T.		論文	Synthesis of an amphiphilic tetrazine derivative and its application as a liposomal component to accelerate release of encapsulated drugs, Bioorg. Med. Chem., 27(16), 3613-3618, 2019.			
M. Munekane, M. Ueda, S. Motomura, S. Kamino Y. Yoshikawa, H. Yasui, S. Enomoto	o, H. Haba,	論文	Investigation of biodistribution and speciation changes of orally administered dual radiolabeled complex, bis(5-chloro-7-[131I]iodo-8-quinolinolato)[65Zn]zinc, Biological and Pharmaceutical Bulletin, 40(4), 510-515, 2017.			
M. Munekane, S. Motomura, S. Kamino, M. Ueda Y. Yoshikawa, H. Yasui, M. Hiromura, S. Enom		論文	Visualization of biodistribution of Zn complex with antidiabetic activity using semiconductor Compton camera GREI, Biochemistry and Biophysics Reports, 5, 211-215, 2016.			
2. 学会発表						
演題名		発表年・月	学会名			
がんの核医学診断・治療を志向した非イオン性界面活性剤を 用いたナノ粒子の開発		2020年11月	第60回日本核医学会学術総会			
Development of phospholipid-styrene maleic a copolymer nanodiscs for the diagnosis and thintractable cancer.		2020年10月	第79回日本癌学会学術総会			
難治性がんを標的としたディスク状脂質ナノ粒子	の開発	2020年8月	第36回日本DDS学会学術集会			
難治性がんのセラノスティクスを志向した放射性 チレンマレイン酸共重合体ナノディスクの開発	標識脂質-ス	2020年3月	日本薬学会第140年会			
がんセラノスティックスを目的としたコンドロイ 覆リポソームの作製と基礎的評価	チン硫酸被	2018年6月	第28回金属の関与する生体関連反応シンポジウム			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
2011年 ~ 現在 日本薬学:	会会員					
2018年 ~ 現在 日本分子	イメージング学	全会会員				
2018年 ~ 現在 日本核医学	日本核医学会会員					
2019年 ~ 現在 日本癌学会	会会員					

2020年 ~ 現在	日本DDS学会会員
2020 - 9011	HATODO I AAR

所属 薬化学	職名 特任助教	氏名 髙嶋 一平					
I 教育活動							
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)(1) 卒業研究		2019年4月-現在に至る	的な報告 習得を目	集化学研究室に配属された学生の卒業研究指導を行っている。研究進 的な報告会を行うように工夫した。これは論理力やコミュニケーショ 習得を目的としている。企業での勤務経験から社会で必要なコミュニ ン技術を教科書などを用いて学生に教育する。			
(2) 有機化学実習		2019年4月-現在に至る	有機化学 ションを ている。	有機化学実習(学部2年生)を分担している。実習時間の終わりにディスカションを行い、実習の目的と実際に行った手順の理解を促進できるようにている。			
2 作成した教科書、教材、参考書		2019年7月 · 2021年7月	アクティ	アブラボ用の教材作成			
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等	該当なし					
4 その他教育活動上特	宇記すべき事項	該当なし		,			
Ⅱ 研究活動							
1. 著書・論文等							
	氏名	種別		内	容		
Ippei Takashima, Yohei Inoue, Nobuyuki Matsumoto, Akira Takagi Kensuke Okuda		論文	Chem. Commun. 56, pp 13327-13330, 2020. A fluorogenic probe using zinc-catalyzed detection trace of intracellular zinc.				
	Wu, Ippei Takashima, Kathy-Uyen oto, Jonathan S. Lindsey	論文		New J. Chem. 44, pp 14266-14277, 2020 . Engineering of an Archaean Phosphodiesterase to Trigger Aggregation-Induced Emission of Synthetic Substrates.			

Ippei Takashima, Kosuke Kusamori, Thi Hue Vu, Yuya Mizukami, Megumi Takashima, Yousuke Katsuda, Yukiya Takayama, Shin-ichi Sato, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Motonari Uesugi		論文	ACS Chem. Biol. 14, pp 775-783, 2019. Multi-functionalization of cells with a self-assembling molecule to enhance cell engraftment.			
Kenji Yatsuzuka, Shin-ichi Sato, Ka Yousuke Katsuda, Ippei Takashima, M Motonari Uesugi		論文	Chem. Commun. 54, pp 7151-7154, 2018. Live-cell imaging of multiple endogenous mRNAs permits the direct observation of RNA granule dynamics.			
Ryosuke Kawagoe, Ippei Takashima, S Akio Ojida	Shohei Uchinomiya,	論文	Chem. Sci. 8, pp 1134-1140, 2017 . Reversible Ratiometric Detection of Highly Reactive Hydropersulfides Using a FRET-Based Dual Emission Fluorescent Probe.			
2. 学会発表	•		•			
演題名		発表年・月	学会名			
A fluorogenic probe using a catalytic reaction for the detection of trace intracellular zinc		2020年11月	生命金属に関する合同年会: ConMetal 2020 (千葉大学けやき会館)			
自己集合性分子による移植細胞の機能化	Ŀ	2020年10月	第70回日本薬学会関西支部大会(Web配信)			
Signal amplification method for the intracellular zinc	e detection of	2020年9月	第11回エネルギー理工学研究所国際シンポジウム(Web配信)			
自己集合性分子による移植細胞の機能化	Ŀ	2018年3月	日本薬学会第135春季年会(金沢)			
Self-assembling molecules functionalize transplanted cells		2018年3月	日本化学会第98春季年会(日本大学理工学部 船橋キャンパス) 優秀講演賞(学術) 受賞			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	Ⅲ 学会等および社会における主な活動					
2007年2月-現在に至る	日本化学会会員					
2011年1月-現在に至る	日本薬学会会員					
2012年8月-現在に至る 日本ケミカルバイオロジー学会会員						

	1		1	
所属 生命分析化学研究室 職名 特任助教	氏名 木口 裕貴			
I 教育活動	•			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)				
分析化学系実習	2019. 4. 1~現在に至る	分析化学	※系実習では実験室を巡回し、 学生全員が実験の原理・原貝	実技指導や全体説明の補足を個別に行う 川を理解できるように努めている。
アクティブ・ラボ	2019. 4. 1~現在に至る	に研究室	で行う実験の実技指導や原理	の低学年(2-3年生)の学生に対し、実際 理の説明を国家試験と関連付けて行うこと てもらえるように努めている。
2 作成した教科書、教材、参考書		該当無し	,	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし	,	
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし	,	
Ⅱ 研究活動		<u> </u>		
1. 著書・論文等				
氏名	種別			内容
Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Banzono E., Ishii K., Kubo S., Watanabe Y., Hirai A., Kaede C., Ohta M., Kobayashi N.	論文			988-995. "One-shot in vitro evolution gment for testing urinary cotinine nanced affinity"

Oyama H., Morita I., Kiguchi Y., Morishita T., Fukushima S., Nishimori Y., Niwa T., Kobayashi N.		論文	Biol. Pharm. Bull. 2017, 40(12), 2191-2198. "A single-step "breeding" generated a diagnostic anti-cortisol antibody fragment with over 30-fold enhanced affinity"			
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Katayama E., Fujita M., Narasaki M., Yokoyama A., Kobayashi N.		論文	Biol. Pharm. Bull. 2018, 41(7), 1062-1070. "Antibodies and engineered antibody fragments agaisnt M13 filamentoous phage to facilitate phage-display-based molecular breeding"			
Oyama H., Kiguchi Y., Morita I., Yamamoto C., Higashi Y., Taguchi M., Tagawa T., Enami Y., Takamine Y., Hasegawa H., Takeuchi A. Kobayashi N.		論文	Sci. Rep. 2020, 10, 4807. "Seeking high-priority mutations enabling successful antibody-breeding: systematic analysis of a mutant that gained over 100-fold enhanced affinity"			
Kiguchi Y., Oyama H., Morita I., Morikawa M., Nakano A., Fujihara W., Inoue Y., Sasaki M., Saijo Y., Kanemoto Y., Murayama K., Baba Y., Takeuchi A., Kobayashi N.		論文	Sci. Rep. 2020, 10, 14103. "Clonal array profiling of scFv-displaying phages for high-throughput discovery of affinity-matured antibody mutants"			
2. 学会発表	2. 学会発表					
演題名		発表年・月	学会名			
高親和力変異scFvの創製におけるアレイ型選択法の有用性		2019年3月	日本薬学会第139年会			
ナンセンス変異を持つscFv遺伝子産物の	の構造及び機能解析	2019年9月	日本分析化学会第68年会			
免疫測定法の高感度化を目指す高親和力抗コルチゾール変異 抗体の効率的創製		2019年10月	第69回 日本薬学会関西支部総会・大会			
V _L 49番システインの置換による抗コルチゾールscFvの抗原結 合能の変化		2020年3月	日本薬学会第140年会			
V _H -FR1へのアミノ酸挿入による抗コルチゾールscFvの試験管 内親和性成熟		2020年10月	第70回 日本薬学会関西支部総会・大会			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動						
2015年4月~現在	日本薬学会会員					
2019年1月~現在	日本分析化学会会員					

所属 医療薬学研究室 職名 特任助教	氏名 田中 亨			
I 教育活動	1			
教育実践上の主な業績	年月日		概	要
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)				
卒業研究	2020年4月~	医療薬学研究室に配属された4,5,6年生を対象に卒業研究の指導を行なっている。研究の背景や研究方針などを丁寧に説明し、理解を促すとともに自らえて研究を進められるように工夫している。		
実務実習事前実習	2020年4月~		間に向けて、疑義照会の流れや薬剤 ルンやロールプレイを通して学んで	
2 作成した教科書、教材、参考書		該当なし	,	
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		該当なし	,	
4 その他教育活動上特記すべき事項		該当なし	,	
Ⅲ 研究活動				
1. 著書・論文等		_		
氏名	種別		P	内容
Tanaka T, Maekawa N, Kashio T, Ishiba R, Izawa K, Shirakura K, Ishimoto K, Hino N, Aird WC, Doi T, Okada Y	論文		Tumor necrosis factor α induce endothelial cell-specific recept nuclear factor- κ B pathway. Bio (2017)	otor Roundabout4 through the

Araki M, Hisamitsu T, Kinugasa-Katayama Y, Tanaka T, Harada Y, Nakao S, Hanada S, Ishii S, Fujita M, Kawamura T, Saito Y, Nishiyama K, Watanabe Y, Nakagawa O.		論文	Serum/glucocorticoid-regulated kinase 1 as a novel transcriptional target of bone morphogenetic protein-ALK1 receptor signaling in vascular endothelial cells. Angiogenesis. (2):415-423 (2018)			
Tanaka T, Izawa K, Maniwa Y, Okamura M, Okada A, Yamaguchi T, Shirakura K, Maekawa N, Matsui H, Ishimoto K, Hino N, Nakagawa O, Aird WC, Mizuguchi H, Kawabata K, Doi T, Okada Y.		論文	ETV2-TET1/TET2 Complexes Induce Endothelial Cell-Specific Robo4 Expression via Promoter Demethylation. Sci Rep. 8(1):5653 (2018)			
Izawa K, Shirakura K, Kakiuchi K, Funahashi N, Maekawa N, Hino N, Tanaka T, Doi T, Okada Y.		論文	PRC2 Components Maintain DNA Hypermethylation of the Upstream Promoter and Regulate Robo4 Expression in Endothelial Cells. Biol Pharm Bull .43(4):742-746 (2020)			
Harada Y, Tanaka T, Arai Y, Isomoto Y, Nakano A, Nakao S, Urasaki A, Watanabe Y, Kawamura T, Nakagawa O.		論文	ETS-dependent enhancers for endothelial-specific expression of serum/glucocorticoid-regulated kinase 1 during mouse embryo development. Genes Cells (2021)			
2. 学会発表	2. 学会発表					
演題名		発表年・月	学会名			
血管内皮細胞特異的Robo4発現が生み出されるメカニズムの解 明		2016年9月	第17回pharmaco-hematology学会			
Significance of Hey transcription factors in endothelial cell differentiation and embryonic vascular development		2019年10月	NAVBO Vascular Biology 2019			
特定波長の紫外線B波による動脈硬化抑制効果とその機序の解 明		2021年3月	日本薬学会第141年会			
Ⅲ 学会等および社会における主な活動						
2012年6月~現在に至る	日本薬学会会員					

所属 病態生化学研究室 職名 特任助教	氏名 安宅 弘司				
I 教育活動					
教育実践上の主な業績	年月日		概 要		
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)			該当なし		
2 作成した教科書、教材、参考書			該当なし		
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等			該当なし		
4 その他教育活動上特記すべき事項			該当なし		
II 研究活動					
1. 著書・論文等					
氏名	種別		内容		
Yagi T, Ataka K, Cheng KC, Suzuki H, Ogata K, Yoshizaki Y, Takamine K, Kato I, Miyawaki S, Inui A, Asakawa A.	論文		Food Nutr Res. 64, 2020. Red rice koji extract alleviates hyperglycemia by increasing glucose uptake and glucose transporter type 4 levels in skeletal muscle in two diabetic mouse models.		

Ogata K, Ataka K, Suzuki H, Yagi T, Okawa A, Fukumoto T, Zhang B, Nakata M, Yada T, Asakawa A.	論文	Evid Based Complement Alternat Med. 5418586, 2020. Lavender Oil Reduces Depressive Mood in Healthy Individuals and Enhances the Activity of Single Oxytocin Neurons of the Hypothalamus Isolated from Mice: A Preliminary Study.		
Shiozaki K, Kawabe M, Kasuyama K, Kurachi T, Hayashi . Ataka K, Iwai H, Takeno H, Hayasaka O, Kotani T, Komatsu M, Inui A.	A, 論文	Sci Rep. 10(1), 5913 2020. Neuropeptide Y deficiency induces anxiety-like behaviours in zebrafish (Danio rerio).		
Suzuki H, Ataka K, Asakawa A, Cheng KC, Ushikai M, Iw H, Yagi T, Arai T, Yahiro K, Yamamoto K, Yokoyama Y, Kojima M, Yada T, Hirayama T, Nakamura N, Inui A.	ai 論文	Sci Rep. 9(1), 6011, 2019. Helicobacter pylori Vacuolating Cytotoxin A Causes Anorexia and Anxiety via Hypothalamic Urocortin 1 in Mice.		
Kairupan TS, Cheng KC, Asakawa A, Amitani H, Yagi T, Ataka K, Rokot NT, Kapantow NH, Kato I, Inui A.	論文	J Food Drug Anal. 27(1):266-274, 2018. Rubiscolin-6 activates opioid receptors to enhance glucose uptake in skeletal muscle.		
2. 学会発表				
演題名	発表年・月	学会名		
がん悪液質に及ぼす基礎疾患の影響 -糖尿病を中心に	2018年 8月	第3回日本がんサポーティブケア学会学術集会ワークショップ(福岡)		
Helicobacter Pylori VacA Inhibits Food Intake and Induces Anxiety-like Behavior through Interactions wi Urocortin 1 and CRF Receptors in Mice.	th 2017年 3月	ANMA & JSNM Joint Meeting (Osaka)		
摂食障害と内分泌ペプチド	2016年 9月	第20回日本摂食障害学会学術集会 シンポジウム 摂食障害の生物基盤-病態解明に向けた新たな試み- (東京)		
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
1990年~現在 日本薬理学会				
2010年~現在 日本解剖学会				
2015年~現在 日本神経学会				

所属 微生物化学研究室	職名 特任助教	氏名 清水涼平				
I 教育活動						
教育実践	践上の主な業績	年月日		概	要	
1 教育内容・方法の工	夫(授業評価等を含む)					
アクティブラボ		2021年4月~	1~3年次生を対象に主に生化学的な研究方法について指導を行い、研さを感じてもらえるように工夫している。		い、研究の面白	
卒業研究		2021年4月~		 と学研究室に配属された学生 う論理的な思考力の向上に勤	Eに対し卒業研究の指導を行≀ 動めている。	なっている。学
2 作成した教科書、教	材、参考書					
3 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4 その他教育活動上特	記すべき事項					
Ⅱ 研究活動						
1. 著書・論文等						
氏名		種別		内容		
	washita, Ryohei Shimizu, Kazuki i, Haruhiko Sago, Kazuhiro	論文		oxidative stress and les	the brain causes the eleves anxious behavior in Tsl'Free Radic. Biol. Med.,	Cje mice, a

Keiichi Ishiahra, Ryohei Shimizu, Kazuyuki Takata, Er Kawashita, Kenji Amano, Atsushi Shimohata, Donovan Lo Takeshi Nabe, Haruhiko Sago, Warren S. Alexander, Florent Ginhoux, Kazuhiro Yamakawa, Satoshi Akiba		"Perturbation of the immune cells and prenatal neurogenesis by the triplication of the Erg gene in model of Down syndrome." Brain Pathology, 30, 75-91. (2020)
Ryohei Shimizu, Keiichi Ishihara, Eri Kawashita, Haruhiko Sago, Kazuhiro Yamakawa, Ken-ichi Mizutani, Satoshi Akiba	論文	"Decrease in the T-box1 gene expression in embryonic brain and adult hippocampus of Down syndrome mouse models." Biochem. Biophys. Res. Commun., 535, 87-92. (2021)
2. 学会発表	•	•
演題名	発表年・月	学会名
ダウン症モデルマウスの脳層構造の解析	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会
DNAマイクロアレイ解析を用いたダウン症モデルマウスにおる脳発達遅滞の関連遺伝子の探索	け 2018年3月	日本薬学会第138年会
ダウン症モデルマウスにおける転写調節因子T-box1減少の頻態意義に関する研究	2018年11月	第8回4大学連携フォーラム
ダウン症モデルマウス成体期表現型に転写因子 Ets-relate gene の3コピー化が及ぼす影響	d 2019年3月	日本薬学会第139年会
Disturbed expression of inflammation-related genes caused by a triplication of Erg gene in the prenatal developing brain with Down syndrome.	2019年6月	The 3rd International Conference of the Trisomy 21 Research Society
Ⅲ 学会等および社会における主な活動	•	•
2015年~現在に至る Trisomy 21 Researc	h Society会員	
2018年~現在に至る 日本薬学会会員		

所属 機能性分子化学研究室	職名 特任助教	氏名 寳田 徹				
I 教育活動	I 教育活動					
教育実	践上の主な業績	年月日		概	要	
1 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)						
2 作成した教科書、教	材、参考書					
3 教育方法・教育実践	に関する発表、講演等					
4 その他教育活動上特記すべき事項						
Ⅱ 研究活動						
1. 著書・論文等						
氏名		種別		内容		
Toru Takarada, Mawaddah Ar Rochmah, Nur Imma Fatimah Harahap Masakazu Shinohara, Toshio Saito, Kayoko Saito, Poh San Lai, Yoshihiro Bouike, Yasuhiro Takeshima, Hiroyuki Awano, Ichiro Morioka, Kazumoto Iijima, Hisahide Nishio*, Atsuko Takeuchi		論文		SMA mutations in SMN Tudor and C- the protein Brain and Development, 39: 606-61		
Shogo Takeda, Hiroshi Shimoda, Toru Takarada, Genji Imokawa*		論文		Strawberry seed extract and its m promote ceramide synthesis in the epidermal equivalents <i>PLoS ONE</i> , 13: e0205061. (2018)		

Kenji Sugawara, Kazuhiro Nomura, Yuko Okada, Aki Sugano, Masaaki Matsumoto, Toru Takarada, Atsuko Takeuchi, Hiroyuki Awano, Yushi Hirota, Hisahide Nishio, Yutaka Takaoka, Wataru Ogawa*		論文	In silico and in vitro analyses of the pathological relevance of the R258H mutation of hepatocyte nuclear factor 4α identified in maturity-onset diabetes of the young type 1 Journal of Diabetes Investigation, 10: 680-684. (2019)	
Hiroshi Shimoda*, Shogo Takeda, Toru Takarada, Yurina Kato, Norihito Shimizu, Kazuya Toda, Masafumi Nakamura, Hiroshi Hanada, Seikou Nakamura, Hisashi Matsuda		論文	Hydroxypterocarpans with estrogenic activity in Aguaje, the fruit of Mauritia flexuosa (Peruvianmoriche palm) Bioactive Compounds in Health and Disease, 2: 64-77. (2019)	
2. 学会発表	<u>.</u>			
演題名		発表年・月	学会名	
New strategy for analysis of the splicing regulatory factors using high-resolution mass spectrometry		2016年8月	21st International Mass Spectrometry Conference, Toronto, CANADA	
エクソン認識を制御するRNA結合蛋白質解析法の構築と遺伝性 疾患治療薬開発への応用		2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会(大阪)	
The Application of Rice Oil-derived Phytochemicals - Potential Effect of Rice-derived Compounds on Skin and Muscle for Functional Foods and Cosmetics-		2018年5月	The 5th International Conference On Rice Bran Oil, Hanoi, VIETNAM	
時計遺伝子を制御するパッションフラワーエキスの自発運動 およびヒトの健康関連 QOL に及ぼす作用		2018年9月	第23回日本フードファクター学会合同学術集会(京都)	
ペルー産オオミテングヤシ果実に含まれるエストロゲン活性 成分に関する研究		2019年3月	日本薬学会第139年会(千葉)	
Ⅲ 学会等および社会における主な活動				
2013年5月~	日本質量分析学会 正会員			
2018年11月~ 日本薬学会 正会員				